302.24
Ko.12

東印度及濠洲の點描

小林織之助著

統正社

2

0000522000

0000522-000

302.24－Ko12ウ

東印度及濠洲の点描

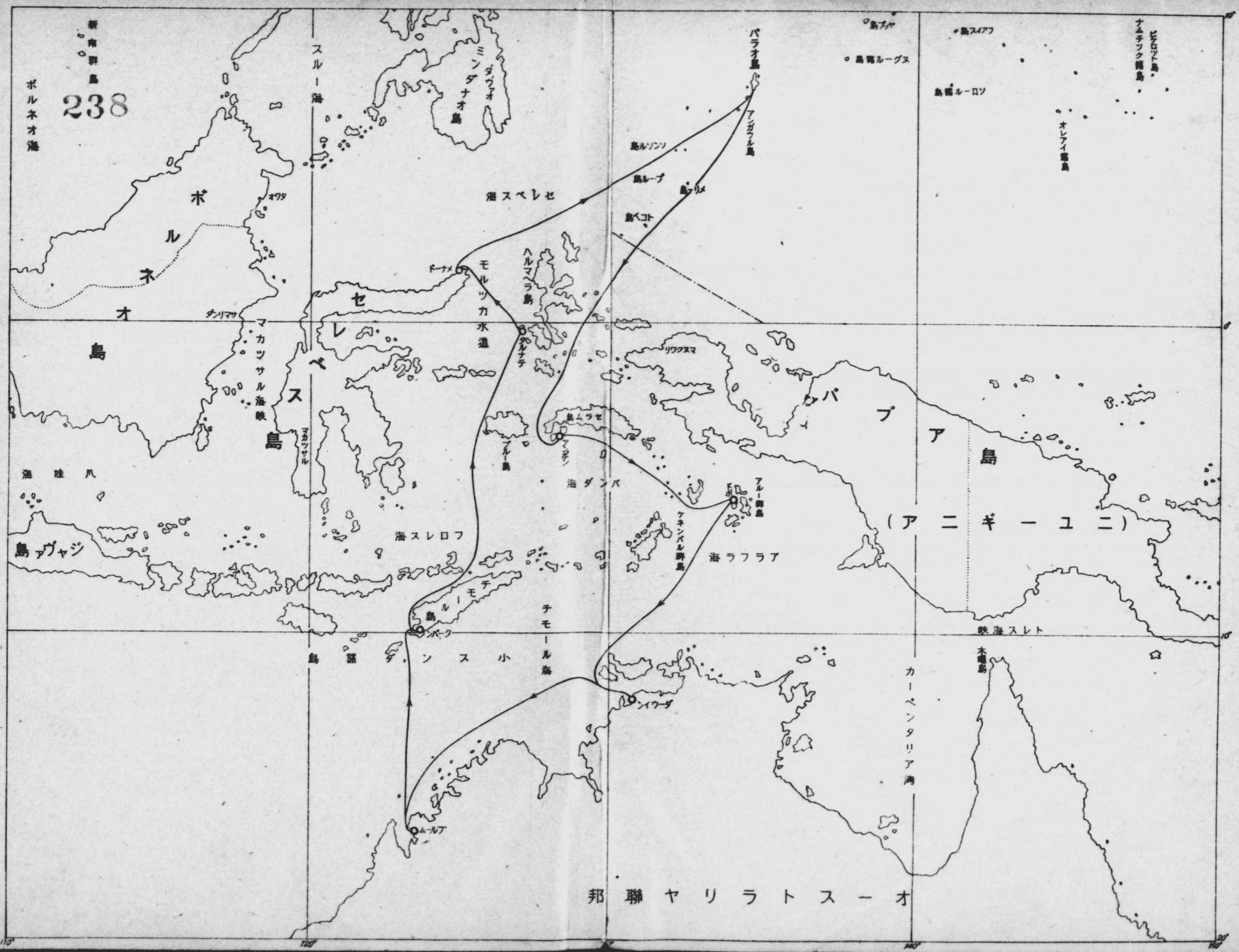
小林織之助・著

統正社

昭和１７

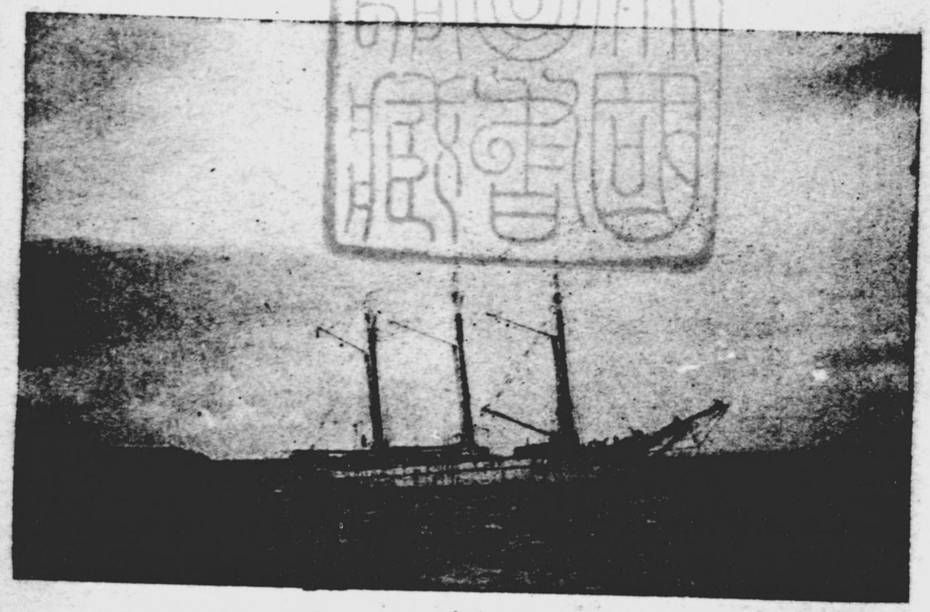
AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。


238
新南群島
ボルネオ海
ボルネオ島
オワタ
ダンリマサ
マカツサル海峡
マカツサル
スルー海
ミンダナオ島
ダヴァオ
セレベス海
セレベス島
ドーナメ
モルッカ水道
ハルマヘラ島
アルナテ
パラオ島
アンガウル島
島ルソンソ
島ループ
島リメ
島ベコト
島ブカ
島ルーグヌ
島スイアフ
島ルーロソ
ピヤロット島
ナムチック諸島
オレアイ諸島
リワクヌマ
パプア島
（アニギーユニ）
島ムラセ
アマボン
ブル島
ダンバ海
ケキンバル群島
アルー群島
海ラフラア
海スレロフ
島ファヴァジ
海陸八
島ルーモチ
ンバーク
チモール海
島諸ダンス小
ンイワーダ
ムールア
カーペンタリア湾
木曜島
海スレト峡
オーストラリヤ聯邦
110°
120°
130°
140°
150°

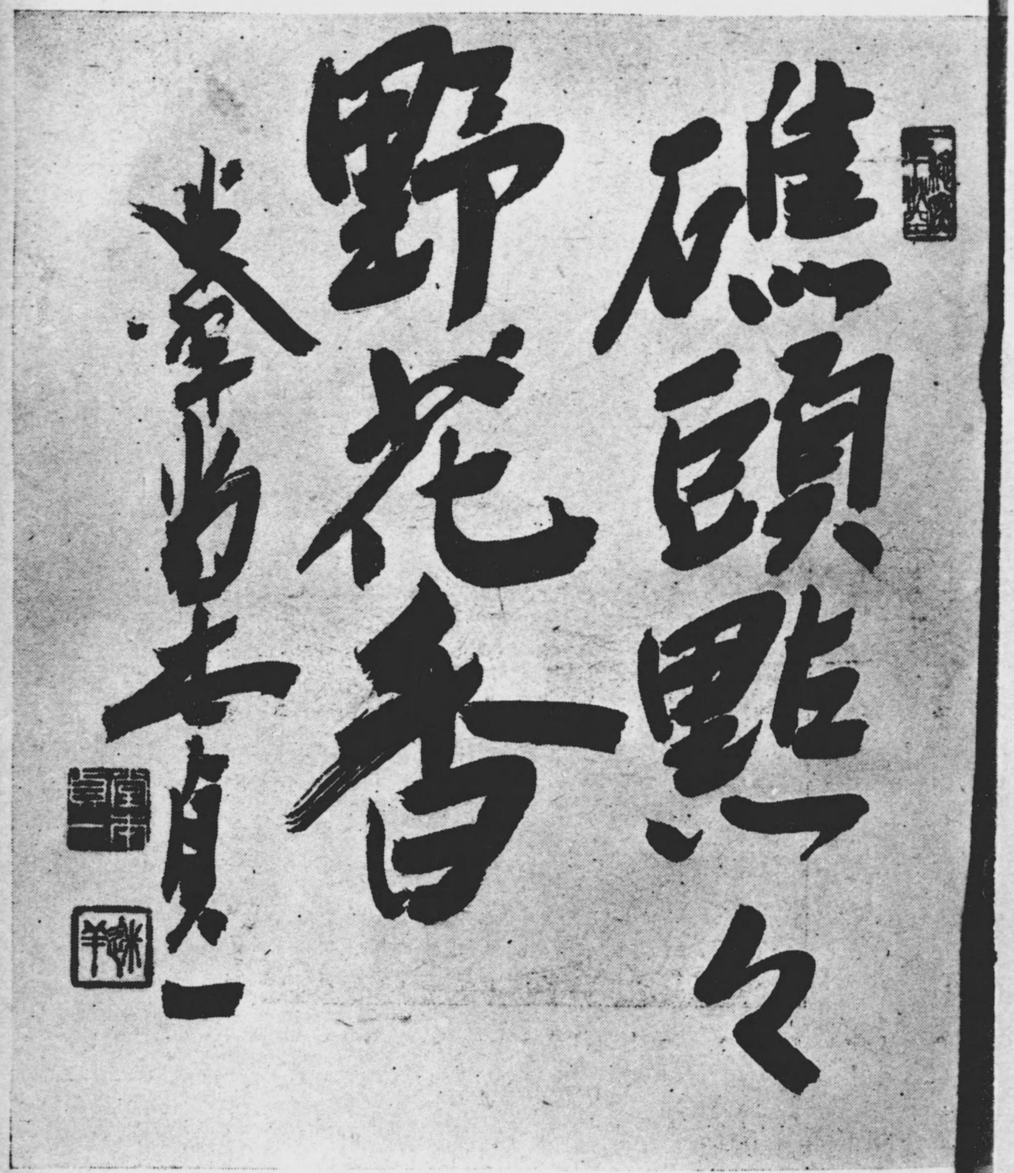
302.24
Ko12

東印度及濠洲の點描



小林織之助著

統正社

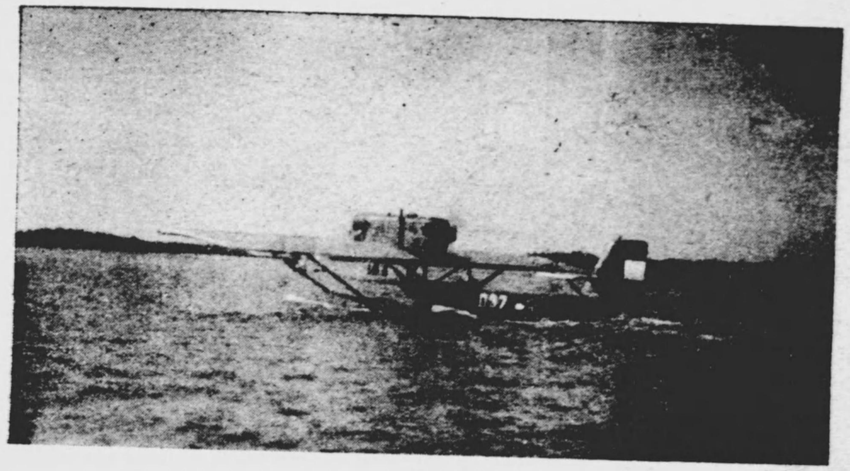

礁頭點點
野花香
光緒丙午

（左）アンボン土着民の風俗
（下）ドボ港の遠景

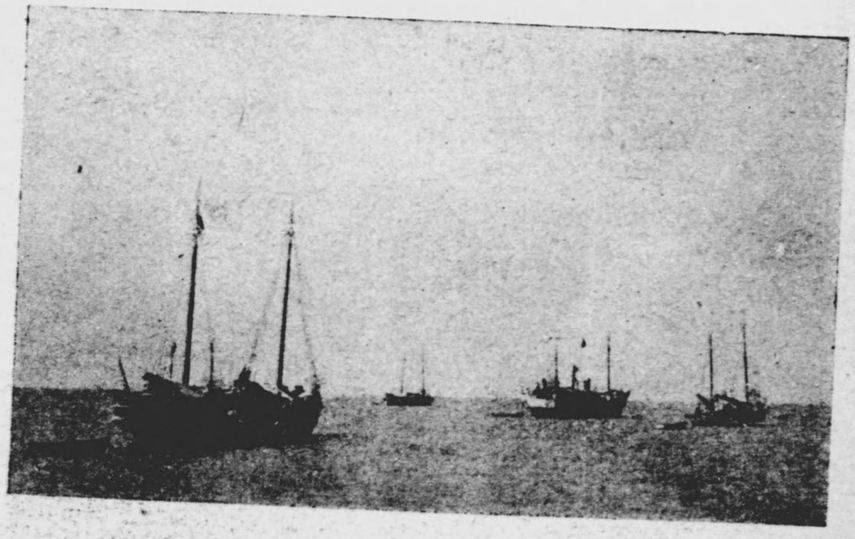
著者の近影

圖瞰鳥のンイウーダ・トーボ
（ず非にのもしせ影撮の者著）

鐵・クンタ油重・橋棧のンイウーダ・トーボ
（ず非にのもしせ影撮の者著）圖瞰鳥の等道



（ボド）機戒哨印蘭たし嚇威を々吾

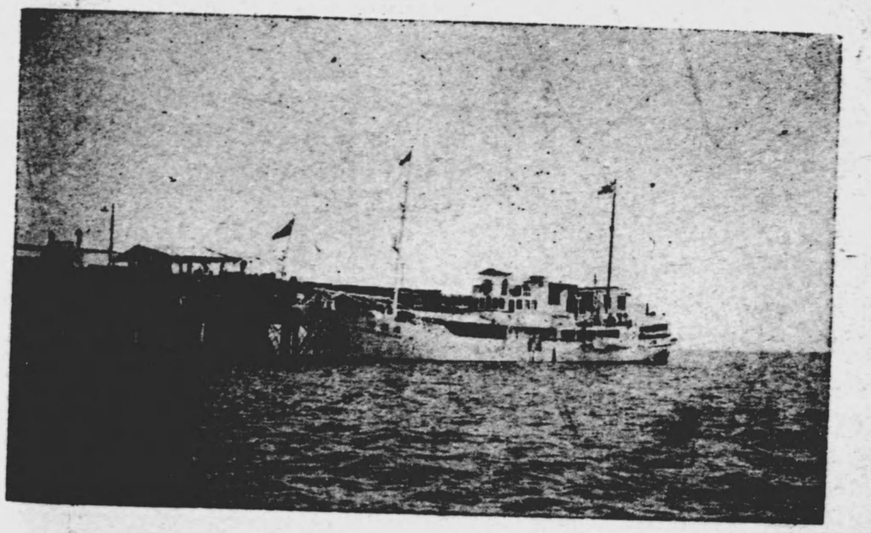


船取採珠眞の人本日るす躍活に海ラフラア

（外郊ンイウーダ）塔の蟻

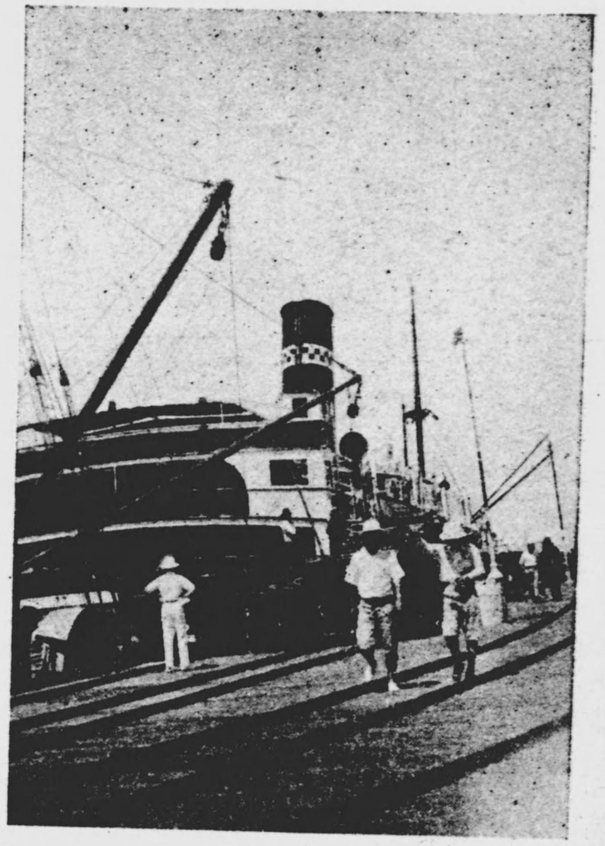
ダーウインの外郊の牧場

ポート・ダーウインの鐵道構内・重油タンク（著者の撮影に非ず）

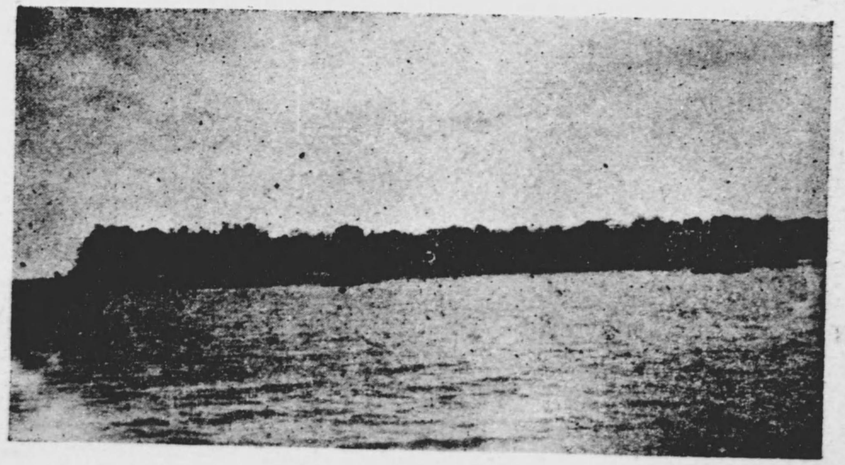


ダーウインの棧橋に繫留された瑞鳳丸

北濠行政長官々邸の庭園（ダーウイン

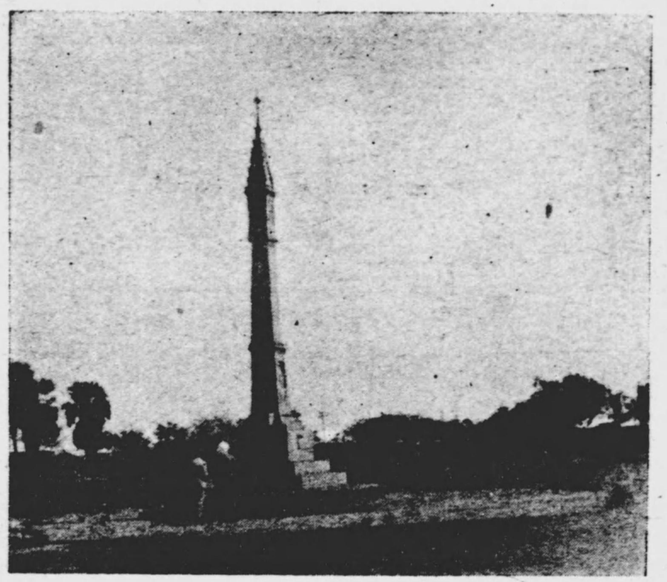


（左）ダーウイン棧橋に繫留された青筒汽船
（下）フオート・ヒル（ダーウイン）



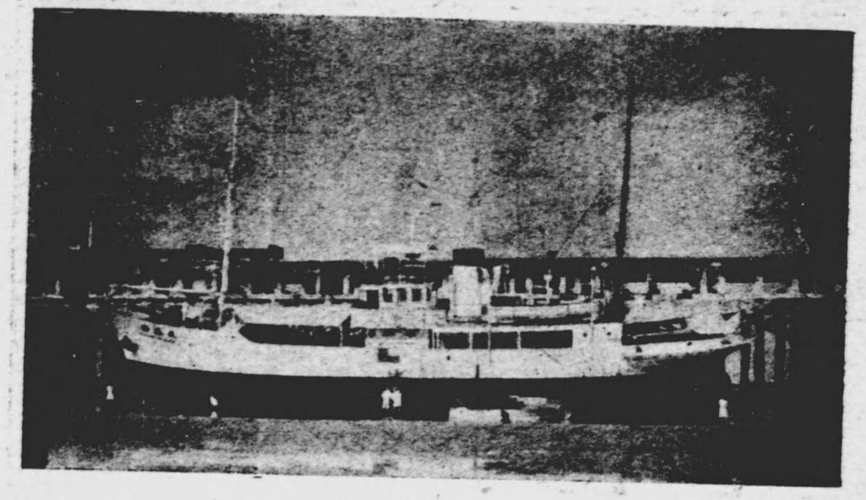
外人住宅（ダーウイン）

林叢の外郊ンイウーダ

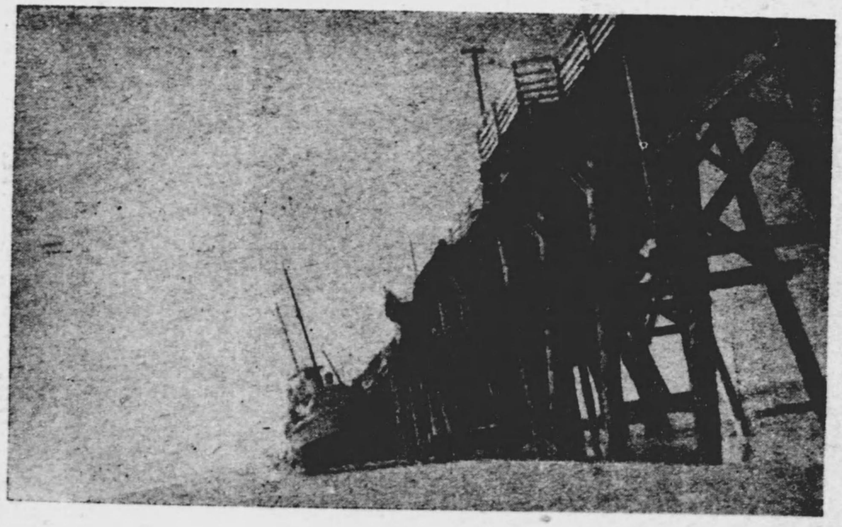


第一次歐洲大戰々捷記念塔（ブルーム）

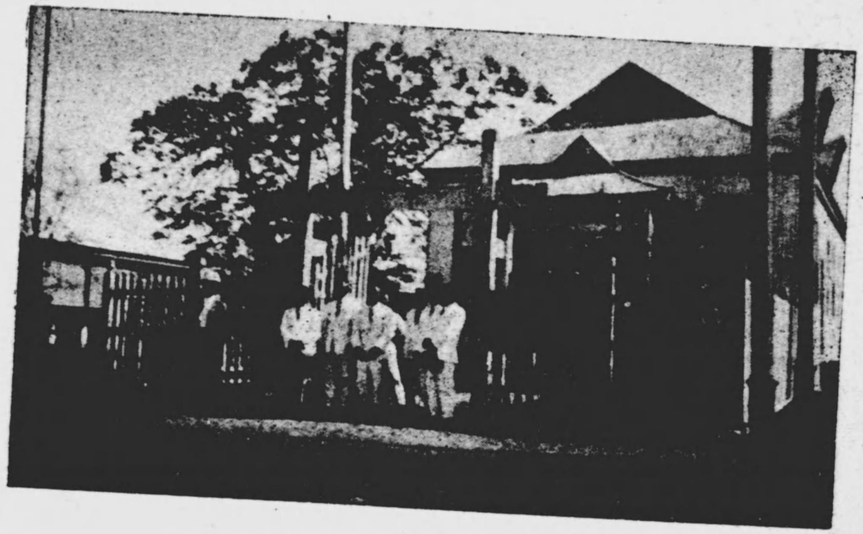
地墓人本日のムールブ



干潮時に船底を現はしたる瑞鳳丸（ブルーム）



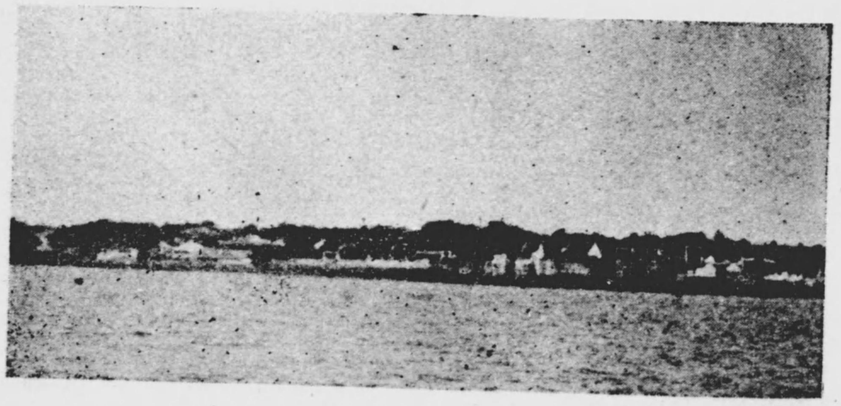
丸鳳瑞たれさ留繋に橋棧ムールブ



ブルームの日本人會館

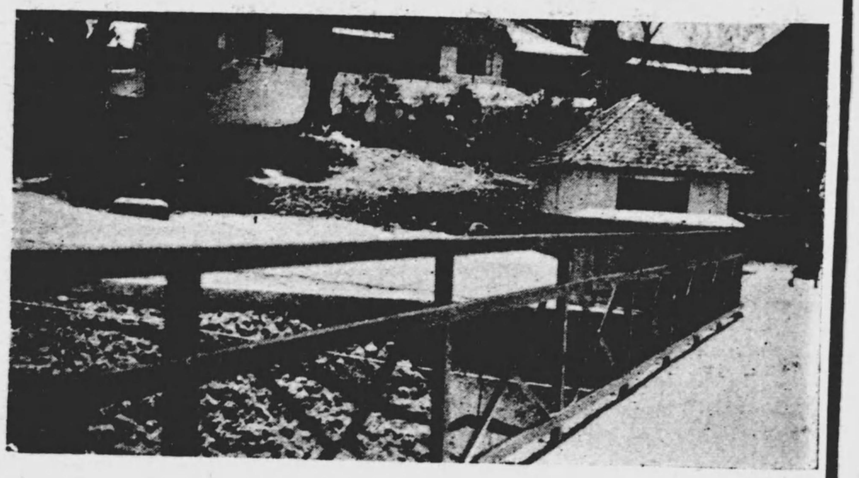
橋桟のンパーク

（左）クーパン土着民の風俗
（下）クーパンの遠望

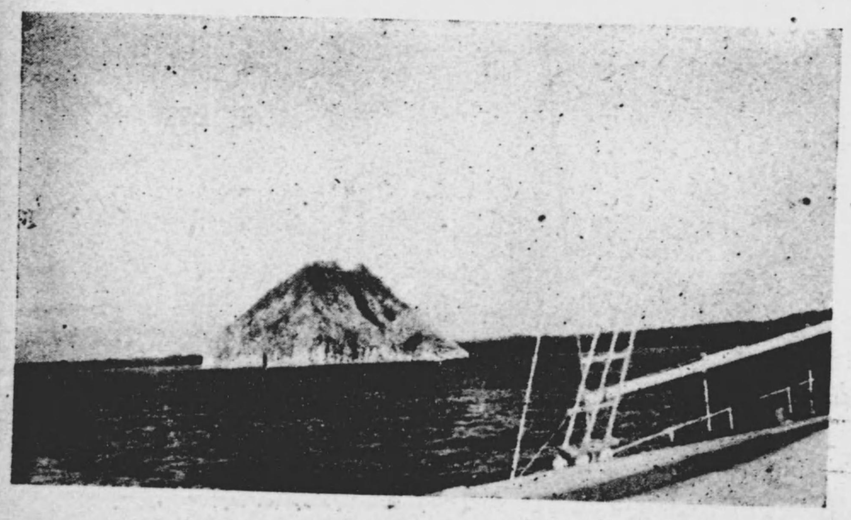


（右）支那人街（クーパン）
（下）クーパンの海岸通り

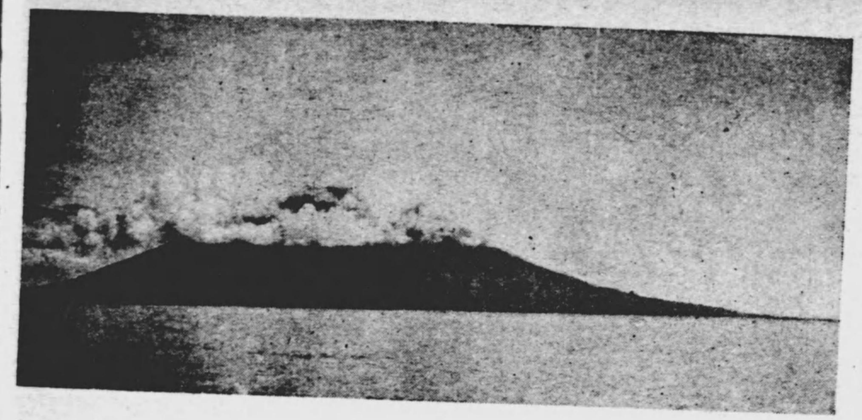
土着民の住宅（クーパン）



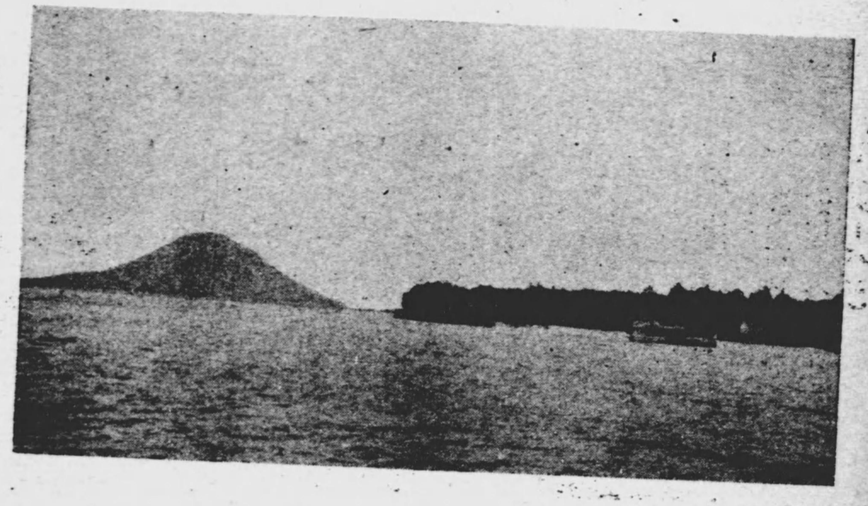
清掃された市街、中央に見えるのが印度人ラフイキ氏住宅（クーパン）



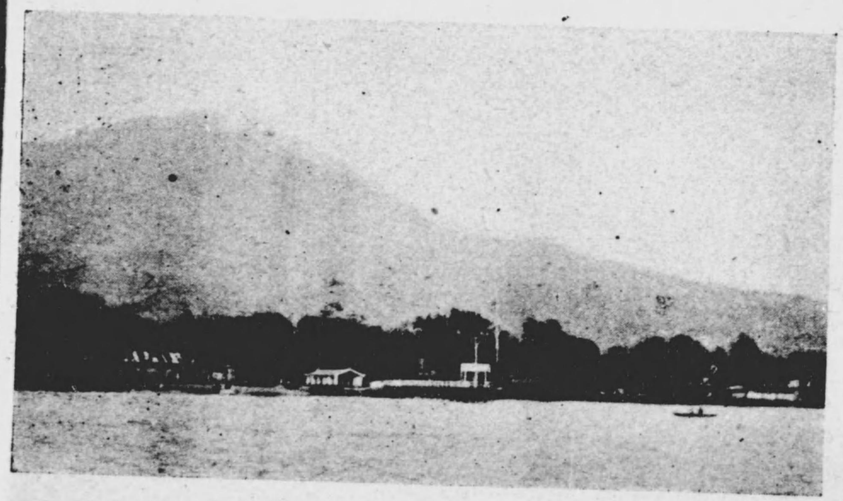
ロチ島のバア港より約十五浬隔つたところにある岩島（クーパン附近）



タルナテ島の全景



チドレ富士、右はタルナテ港の一部



タナルテ島の一部、中央に見えるのは官廳用棧橋

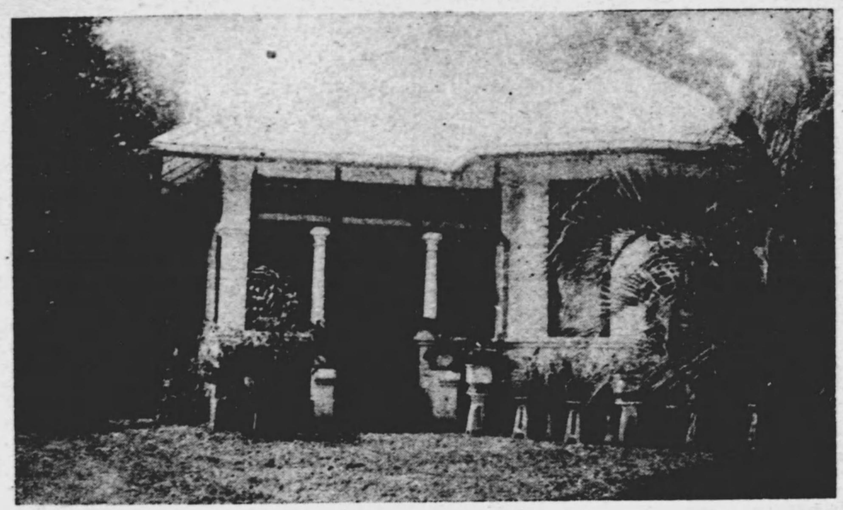
（左）日曜の朝、禮拜から歸る島民たち（メナード）
（下）ビートンの海岸、前方の島はレムベー島

「リンペ」の物名ドーナメ

パソの少年少女合唱隊（メナード）

（左）トモホンとラワンゴワンの中間にある大地獄（メナード）

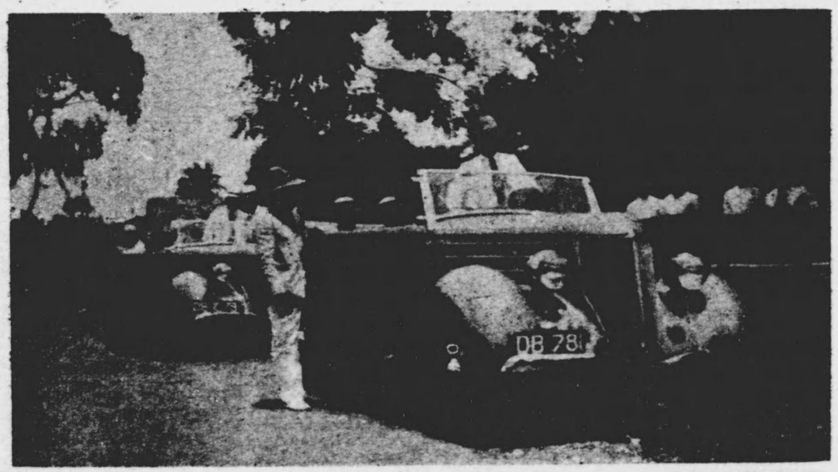
（下）パソの溫泉宿（メナード郊外）



メナードの南洋貿易會社支店長の社宅

（外郊ドーナメ）村漁のントービ

（左）ビートン漁村の住民たち（メナード）
（下）チノール高臺にて（メナード）



メナードの商業街

メナード港の遠景

931
200

序

小林君の文には、些かの衒氣なく、極めて淡々たるものを感ずる。それだけに、癖がなく、嫌味がない。此の淡々たる中に、言ひ知れぬ味ひと香りとを感受させられるのであつて、私は、常、日頃、小林君の文に接する毎に、『文は人なり』の言、われを欺かざるを覺ゆるのである。

敢て、同君の「東印度及濠洲の點描」を江湖に推す所以である。

南洋廳內務部長　堂本貞一識

自序

昭和十六年十二月八日、畏くも對米英宣戰の大詔を拜し、次いで、東條首相の烈々たる信念と決意とを披瀝して、決死報國を誓ふ放送、並に帝國政府の聲明を謹聽、一億の皇民は鐵石の決意を固めたのである。

大東亞戰爭、一たび開始せらるゝや、精鋭無比なる皇軍は、僅か十二日にして敵が難攻不落を誇つた香港を屠り、二十四日にして比島の首府マニラを攻略、更に長驅して、馬來半島を完全に制壓、今や、英國東亞禍亂の基地新嘉坡の死命を制するに至り、將又、北は緬甸より、南は東印度・濠洲及び太平洋諸島に跨る全水域を戰場として、御稜威の下、陸に、海に、且又空に於て、世界戰史上、比類なき赫々たる戰果を收めて居る。

却説、上記の各方面は皇國不退轉の國策たる大東亞共榮圏の主要なる構成部分であり、今次大東亞戰爭の戰域でもある關係上、右該諸領域の事情を研究し又は再檢討することが、近き將來、當方面に雄飛せんとする人々にとつての喫緊事であると言つても、決して過言ではあるまい。

顧るに、昭和十一年九月二十日、私はアラフラ海及びバンダ海を抱擁する蘭印諸島及び濠洲北部近海の水産調査の爲の南洋廳官船瑞鳳丸（一八三噸、船長以下乘組員二十一名）に、依命通譯

として便乘、岡島水産技手及び吉田囑託と共に出帆、蘭印のアンボンを振出しに、アルー群島ドボ、南下して北濠ポート・ダーウインより西濠ブルームに向ひ、再び蘭領に入つて、チモール島クーパンに寄港後、北上してジロロ群島（別名ハルマヘラ）のタルナテ及びセレベス島メナードを經由、パラオに同年十一月十四日歸着した。航程五、二七〇哩、所要日數五十六日であつた。

當時、南進が躍進日本の重要國策の一つとして、斯く人口に膾炙して居たが、皇國の進むべき道は海洋發展にあり、この海洋發展こそは我が國防第一線確守のために、絶對に必要な國是であると力說されてをつた矢先とて、私が調査員一行二名の末席に加へて頂き、蘭印諸島や濠洲北部の一小部分でも、實地見學する好個の機會に惠まれたことは、寔に欣快の至りであつた。勇躍一番、大いに刮目して、精々廣く且つ多く見聞しようといふ心組みで鹿島立つたのである。

斯くして翌十二年、パラオ所在の南洋新報社の懇望默し難く、上司の認許を經て、微力短才の分際をも省みず、獨自の體驗と見聞とを合せて、大膽卒直に縷述したのである。何分にも、出張の目的が水産調査であつた爲に所要日數の半ば以上を海上に過したので、充分各寄港地の事情を踏査する機運に惠まれなかつたけれども、該方面に關する文獻の極めて乏しい當時、幾分なりとも讀者の御參考ともなり、徒然の御興趣ともならば、欣幸之に過ぐるものはないとの考へから駄馬に鞭うつて杜撰乍ら、稿を重ねること八十三回、漸く責を塞ぐことの出來得たのは、上司の懇

篤なる御後援と諸賢の御鞭撻に負ふところ大なりと、玆に感謝を新たにする次第である。

次いで、右脱稿の後、同年五月、堂本南洋廳内務部長閣下の御推奨を忝ふし、南洋廳に於て、之が上梓の運びに至つたことも、之亦、私にとつて無上の光榮と歡喜に堪えざるところであつた。

更に、今回測らずも本書出版の希望切なるものがあるので、上記堂本内務部長閣下の御認許を得て、之が出版を見るに至つたことは、私にとつて大いなる感激であり、御懇情に對し衷心より感謝する次第である。

尚、本文中に於て、飲用水の所在と性質とについて、特に入念に記述したのは、當時「將來、皇軍が上陸した場合、最も必要なるものは飲用水である」と考へ乍ら、踏査したことを今になつて告白して置きたい。

叙上の次第で、本文中に「昨年」又は「一昨年」とあるは往訪當時、即ち昭和十一年を基準として記述したものであることを御諒承して頂き度い。

序乍ら本書に挿入した寫眞は全部著者が撮影したものであることを附記して置く。

皇紀二六〇二年紀元の佳節をトして

千駄ヶ谷の寓居にて

著者識

目次

扉……ダイバー船
題字……南洋廳内務部長　堂本貞一閣下
序……同　一
自序……二
第一章　蘭領アンボン……一
官憲の取締……二
恐日の港アンボン……三
軍備……五
アンボンとは如何なる處か……七
外觀……八
氣候と醫療施設……一一
教育施設……一三

習俗……一四
産業と交通……一八
和蘭本國政府の行政々策……二三
新聞……二五
海の園……二五
氣溫……二六
セラム島の概觀……二七
第二章　蘭領ドボ……二九
ドボ港へ……二九
アルー群島の概觀……三〇
ドボの外觀……三一
ドボの概況……三一
氣候と醫療施設……三四
官憲の取締……三四

極樂島……三七
住民の習俗……三九
常用語……三九
食糧……四〇
教育施設……四一
主要産物……四一
交通の不便……四二
虎、丸……四三
氣溫……四四
第三章　北濠ポート・ダーウイン……四五
アラフラ海とバンダ海……四五
ダイバー船……四六
ポート・ダーウイン……五四
北濠地方（ノーザン・テレトリー）……五五

ダーウインの位置……五七
官憲の取締……五八
氣候……五九
ダーウインの概觀……五九
人口……六四
濠洲の對日觀……六五
日本に對する關心と認識……七六
蟻の塔……八一
眞珠採取業……八三
眞珠採取業に就いて……八六
ダーウイン駐在漁業監督官との問答……八九
村松治郎氏との問答……九三
北濠の漁業……九九
憂國の志士……一〇一
重油船……一〇四

生活の樣態……一〇七
飲用水と食糧……一〇八
交通と生活費……一〇八
新聞……一〇九
醫療施設……一一〇
教育施設……一一一
警察陣と行刑……一一三
濠洲黑人（アブオリジナルス）に就いて……一一三
氣溫……一一七

第四章　西濠ブルーム……一一九

ブルーム港へ……一一九
官憲の取締……一二三
西濠洲（ウエスターン・オーストラリヤ）の概觀……一二三
ローバック灣に就いて……一二五

ブルームの棧橋……一二六
ブルームの邦人墓地……一二九
官憲訪問……一三〇
我が名譽領事……一三五
ホテルの酒場……一三八
對日感情……一三九
人口……一四〇
ブルームの沿革……一四一
座談會……一四三
用水と食糧……一五〇
生活費……一五一
警察陣……一五三
交通機關……一五三
黑人に就いて……一五四
氣溫……一五六

第五章　蘭領チモール島クーパン……一五九

チモール島の概觀……一六一
クーパンの外觀……一六三
官憲の取締……一六四
官憲訪問……一六六
印度人ラフイキ氏……一六八
市街の瞥見……一六九
人口……一七〇
對日感情……一七一
日貨の進出……一七五
生活態様……一七九
交通機關……一八一
教育施設……一八二
兵備と警察力……一八三

醫療施設……一八四
産業と金融機關……一八六
氣溫……一八八

第六章　蘭領タルナテ……一八九

タルナテ島……一九一
官憲の取締……一九二
人口……一九四
習俗……一九五
氣候と潮汐……一九六
飲料水と食糧……一九六
電氣と製氷……一九七
生活程度……一九八
産業と交通……一九九
教育施設……二〇〇

醫療施設……二〇一
軍備と警察……二〇一
新聞……二〇二
氣溫……二〇三

第七章　蘭領セレベス島メナード……二〇五

メナード港へ……二〇五
セレベス島の概觀……二〇六
船上より見たメナード……二〇七
上陸の不便……二一〇
官憲の取締……二一一
習俗……二一三
人口……二一四
邦人の勇躍振り……二一六
對日感情……二一六

目次

氣候……一一〇
生活態様……一一〇
官民の施設……一一一
宗教……一一一
トンダノ湖へドライヴ……一一一
産業と交通……一一二
醫療施設……一一八
常用語と新聞……一一九
ホテル……一一九
警察と犯罪……一二〇
將來性……一二〇
ビートンに就いて……一二一
著者の略歴……一二一

目次終り

東印度及濠洲の點描

小林織之助著

第一章　蘭領アンボン

蘭領アンボン

揺れた揺れた瑞鳳丸が、延長一〇〇浬乃至一四〇浬、幅員約十八浬のジャイロロ海峡を通過し、赤道を越えたのは昭和十一年九月二十四日午前十一時半だつた。赤道といふからにはどんなに熱いことだらうといふ私の想像は見事に裏切られ、案外に涼しく爽快だつた。これはパラオ出港後、最初に得た新知識であり、生來、最初の體驗だつた。同日午後六時、僅かながらスコールの訪れがあつた、氣温はパラオ位、否それよりも幾分涼しい。ボー島に針路を向けた本船の左舷の中空

に遊星が唯一つ燦として輝いて居た。

官憲の取締

本船がアンボン灣に差かゝつたのはパラオ出港後六日目の九月二十七日午前九時。港は霧雨でとざされてゐる。雨を衝いての入港は何となく氣が浮き立たない。投錨した上、入港の合圖に汽笛を鳴らしたのは十時。當地の時刻によれば、パラオのそれより三十分遲いから十時半だ。

間もなくオランダの港務部長グレーヴ氏と共にマレー人と和蘭人の混血兒らしい面相の警察部長カペル氏とがヘルメットに白の背廣服といふ熱帶地につきものの恰好で巨軀を島民の漕ぐカヌーからニヨツキリ現はして本船に乘り移つた。所定の入港手續きの際、吾々三名は正規の旅券を所持した上、パラオ出發のずつと以前に外務省とも打合せを濟ましたのであるから便乘者として入港屆用紙に記入したものだ。警察部長に對し「本船入港のことは既に御了知のことゝ思ふ」と尋ねると、意外にも「蘭印總督からも日本の外務省からも何等の通牒に接してゐないから、船長以下の船員は公法に基づき上陸は差支へないが、君達便乘者は遺憾ながら上陸禁止だ」といふのだ。入港の際の雨が不吉の前兆だつたのかも知れない。官憲とも談合の上、バタヴィア駐在の石澤總領事に賴み、上陸取計ひ方を總督に交渉してもらひ、返電に接したのは三十日の夕方だつた。畢

竟、吾々三名は蘭領東印度諸島では何處の端くれの土でも踏んではならぬといふ譯合なのだ。しかし悲觀は禁物、行き當りバツタリ刹那主義で行くことに肚を決めた。かくて本船は十月一日に次の港ドボに向け出發したのだ、碇泊中、在留同胞の來訪者達と交驩したり、船中から二、三町先きに横たはるアンボン市をながめたりして無聊を喞たずに濟んだのはせめてもの慰めだつた。

恐日の港アンボン

聞くところに依ればカ警察部長は一昨年暮に着任したもので、排日家ではないとのことだが、本船入港當時、理事官も管内巡察中で不在であつたため、上、總督の指揮を仰いだ方が無難だといふ安全第一主義を執つたのであらうし、又當州のハガー理事官（州長官）は排日家といふよりもむしろ、恐日病者で有名な存在であることから推して、帝國官船とその便乘者を嚴重に取締つて、あはよくば上陸を禁止して國情視察の機會を阻止しようといふ魂膽であるらしい。して見ると吾々三名の上陸禁止は當地官憲の所期の方針とも綜合することが出來る。

本船の碇泊中、官憲は陸上三ケ所に見張を配置し、晝夜ブツ通しに監視させ、棧橋の突端に番人を屯させて、船員の上陸する都度署名させたり、日本人の商店の前後に見え隱れに張番を置いて、吾々三名の上陸を警戒させたりしたものだ。猶又、當地官憲の故意の所業と見るは僻目かも

知れないが、三十日午後四時頃、何處からともなく飛行艇三機が本船の上空に飛來すると見る間に、分列して着水した。何れも機關銃で物々しく武裝して居た。かくも當地の官憲が神經を尖鋭化するに至つたのも、成程と首肯される事由がないでもない。

昨年五月頃、帝國軍艦龍田の入港に次いで、六月頃の日本漁船拿捕事件に纏はる當地官憲の非禮且冷酷な同船員に對する處置に憤慨した高級船員の中には、官憲を殺さうとまでの決意を固めたものもあつたが、漸く同胞のために慰撫された經緯を聞いた官憲は眞青になつて驚いたさうだ。この事件で日本人の度膽にすつかり怯かされたため、官憲の排日病、否、恐日病は彌が上にも惡化して居る折も折、誰云ふとなく「三十艘の日本軍艦が來襲する」といふ流言が傳はるや、逸早く當港には蘭印の巡洋艦八隻が潜水艦幾隻かを引率して來港するやら、飛行艇二機が飛來するやら、加之、港灣を俯瞰する三ケ所の要地には高射砲を急設するといふ狂亂沙汰だつたさうだ。そして「ソラ日本軍艦が來た」といふデマが飛ぶ度毎に、御苦勞千萬にもカ警察部長は各所へ無電を飛ばして事實を確めるやら、自ら自動車を操縱して見張臺に馳せ登るやら、丸で戰爭の樣な騒ぎを繰返したさうだ。その結果、和蘭人は排日的になり、在港中の蘭印軍艦の將校は在留日本人の商店にやつて來て、商品が日本製だと聞くと唾を吐きかけるやら、嘲罵を浴せるやらの侮日的言動を恣にしたさうだが、痛快なことには其の半面に於て土民兵や島民達は、排日どころか、內心

日本に好感を寄せて居るし、日本人の酒舗に來て、「日本と戰爭することにでもなれば、何時戰死するかも知れたものでない」といつて暴飲したものも多々あつたとのことであつた。

それからといふものは蘭印の官憲の警戒は愈〻嚴重になつたことは多言する迄もないことだ。現に當港には三艘の軍艦が常置されて居る外に前記の飛行艇三機と警備艇二隻が海と空との二段構へで警備の任に當つて居る。この警備艇は白塗の二重甲板で一見遊覽船の樣に思はれるが、半武裝して居つて中々いかめしい。日本漁船が密漁したといふ告訴があると、待つて居たとばかり出動に及ぶのだ。然らば警察陣はどうかと云ふと、數名の幹部級を除き他は全部薄黑い顏のお巡さんで約三百名。自家用自動車の運轉手といつた服裝をして居る。體軀が大きいだけに威かしが利きさうだ。これだけの警察官が二萬五千の住民の治安維持の任に當つて居るのだ。

軍備

次に軍隊であるが、先づ日本の一個大隊位のものだ。將校連は全部白人であるが、もし一兵卒に白人のものが居るとなるとその昇進は驚く程早い。一ケ月も經過せぬ內にどん〳〵肩章や腕章が變つて行く。最近は所謂蘭印も非常時で種々軍擴に餘念がない。しかし應募者が足りないので、二十五年勤續した五十歳迄の恩給取を召集に及んださうだが、未だ數が足りないので更に五

十五歳迄の勳章をもつて居るものを殆ど强制的に召集した。ところがいい年をして入隊でもあるまいとこれを忌避するものは、「どうも心臓の具合が悪い」とか何とか言つて軍醫官の前に出る、すると軍醫官は「では一ケ月後にやつて來い」といふ、かういふことが幾度となく繰返されるのだ。氣の毒な年寄達は、地方からアンボンまで出かけるには船賃に三盾（ギルダー）（一ギルダーは當時の換算率でザツト二圓餘に當る）も要かるのだ。一日五仙で暮しの立つ彼等にして見ると三盾といふ大枚なお金は再三出し切れなくなつて、終に不本意乍ら入隊する落ちとなる有様ださうだ。こんなヨボヨボの軍人が何の役に立つものか。然しこれは決して笑へぬ事實なのだ。

アンボンについて紹介したいことはまだ澤山に持合せては居るが、その前に一體、アンボンとはどんなところかといふことを辨へておくことは言はば豫備知識であると考へるので、前後轉倒した憾みはあるが、アンボン市の歴史的並びに地理的概觀と目や耳に入つたことを書いて見る。

さて、アンボン島は亞細亞の東南部に群る馬來群島中、モルツカ群島の南部にある海盆地として有名なバンダ海の北に位し南緯三度四五分、東經一二七度五九分に其の中心があり、島全體の延長約三〇哩、最大幅員約一〇哩、面積九五七方粁、人口四萬五千を有して居る。沿岸は南方に著しい出入があつて、ライチモールとヒトー兩半島が突出してアンボン灣を抱擁してゐる。このアンボン灣の延長は約二〇浬、幅員七浬、水深二〇乃至四五尋で投錨地良好であり、背景に三千

乃至四千呎の連峰が控へて居ると述べただけで、どんなに良い港かといふことが察知されよう。本船がこの灣に差かゝつてから投錨するまでに、優に一時間を要したことは既に述べて置いたから、今、本船の推進力が十ノットだと言へば、成程と肯けるであらう。

アンボンとは如何なる處か

次にアンボンの名稱だが、或る書にはアンボンは和蘭名で、英名はアンボイナであると斷つてあるが、在留同胞の某氏の談によれば、この地方ではアンボイナは島名で、アンボンは市名であるとのことだ。

他の書にはアンボンは馬來語で霧といふ説があり、アンボヒはオヤ〳〵といふ意味で、來航した渡航者が、案外良い港なので驚嘆の色を現はす感動詞だといふ説もある。連脈中の最高峰フルフト（千三百米）やワワニ（千米餘）は兩々相俟つて遠洋航海者の絶好の標識となつてゐる。

アンボン市は本島のみならず全群島の治所に當つて居り、和蘭政廳の理事官（レシデント）が駐在して居る。序でだから蘭印上級官吏の官階を述べて見よう。最高官が總督、それから理事官（レシデント）、副理事官（アシスタント・レシデント）、知事（ガヴアナー）、管理官（コントローラー）の順位で、理事官の月俸は千五百盾で、當時の換算率で約三千圓に當るから大したものだ。

本島は十六世紀ポルトガル人が發見したが、一六〇九年に和蘭人が占領し、一七九六年に英國に奪はれ、一八〇二年に再び和蘭人が回復した。然し一八一〇年より一八一四年迄再び英領となり、爾來三度目に和蘭に復した。住民は馬來人を主として和蘭人が百五十名と支那人とアラビヤ人が多數居住して居る。この南溟遠隔の地に住む同胞は現在約二十五名で日本人會を組織して居るが、未だ會館なる建物の存在はない。

外觀

港内に碇泊した本船から二町程彼方のアンボンを眺めると、街は海岸傳ひに延びて居て、木造の不揃ひな古色蒼然たる家が羅列してゐる。どう最眉目に見ても田舍町だ。コンクリート造りの棧橋の附近に、約十四、五トン位の運送船が五十餘隻集中して居る。棧橋はカー・ピー・エム（王國和蘭汽船會社の略稱）のもので、其處に同社の事務所や倉庫が幾軒かある。棧橋といひ、建物といひ、素晴らしく贅澤なものだ。そして其の棧橋と連絡して木造の棧橋が更に海上に突出して居る。本船の入港の際コンクリートの棧橋のところに、カー・ピー・エム所屬の三千噸位の客船が、又木造の棧橋のところに精々百噸位の警備船が夫々繫留してあつた。棧橋や建物と似合はず、この汽船はいとも薄ぎたない感じのする時代物だ。それもその筈、減法高い運賃を乘客や荷主から

取立てゝ居るので、乘客も、貨物も少いから、黑字を出すことが出來ないのだ。今一例を擧げて見よう。

乘組員はアンボンからマカツサルまで、と言つてもピンと來ないだらうから、浬數は殆どサイパンからヤップ位しか離れて居ない、正確に言ふと六一一浬だ、と斷つて置く。それだのに、一等が百二十盾、二等が八十二盾、デツキで十七盾もするさうだ。貨物の運賃も御多分に洩れず高いから、物價のベラ棒に高いのも言はずと知れたことだ。丁度、本船の入港した雨の日、棧橋には多數の見送り人が殺到して居たところを見て、その汽船が出帆するらしいなどと話合つて居ると、正午に怪しげな、そして心細い汽笛が鳴つたが、然しそれから三十分經つても、中々動き出しさうに見えない。どうしたのかと要らぬ心配をして居ると、やつと動き出した。マカツサルへ向ふものらしい。

それから街は段階になつた隆起を描いた線の丘が、重り合つて背景をなし、その中腹に牧場もあるらしく牛が幾頭も放たれて居る。沿岸には椰子が所狹しといはんばかりに密生して居る。街に向つて左端に、ポルトガル時代の遺蹟であらうところのニュー・ヴイクトリア城砦があり、壘壁の所の凹み目に大砲が四門横たへてあるが、是等は遊就館のそれの樣に單なる記念品だ。此處がモルツカ群島駐屯軍司令部の本據なのだ。そして本船が當港に碇泊中、毎朝七時半から時餘に

亙つて、軍樂隊の奏樂か、それとも練習かの、樂の調べが海面を渡つて聞えて來る。日本の軍樂隊の奏樂とは較べものにならないから、音樂といふ程のものではない。この言はゞ樂器の音と、四圍を閉す霧雨とが、兩々相俟つて、雰圍氣をいかにも物淋しくしたものゝ、それが恰度、本船の朝餉の頃ほひなので、伴奏入りで食事をして居る樣だなどと、吾々はいゝ氣になつて、ともすれば憂鬱になりさうな、重い氣分を引き立てた。この城砦のすぐ傍に、柵で仕切つた海水浴場がある。暗流が急な勢なのであらう。そこに時偶、水着姿が現はれるので、双眼鏡によつて、美形を搜したものだが、成果なしといふところだつた。其處から數町隔つた港內に、前記の警備船と寸分違はない他の一艘が、忘れられたやうに、ボンヤリ浮いて居る。双眼鏡をとつて見ても船內には人ッ子一人居る氣配はなく、放置された姿だ。しかし、夕方になると時折、島民がカヌーで品物を運んだり、士官の樣な服裝のお役人が出入するところを見ると、滿更、遺棄されたものでもないらしい。街は霧におほはれてゐるせゐか、四六時中惰眠を貪つてゐる樣だ。夕闇迫る頃、運送船やカヌーが帆に風を孕ませて滑かに右往左往する賑ひは影繪の樣に見えて一興だ。夜に入りて、海岸傳ひに、又此處、彼方の電燈に灯が入ると、靜かな海面に反射する風光は、青森縣淺虫溫泉の夜景と選ぶところがない。夕方、島民船やカヌーで鐘や太鼓を叩く音が、あちら、こちらに聞えて來るが、これは風を呼ぶ呪ひなのださうだ。深更、十餘名の島民がカヌーに同乘して、

杓子の樣な櫂で手際よく、調子を合はせて漕ぎながら、漁獵に出かける折、その櫂の舷に觸れるコトコト言ふ音が、合唱する哀調を帶びた歌の伴奏の樣に聞えて、何ともいひやうのない興趣だ。これも異國情緒の一つ。

氣候と醫療施設

この方面の氣候は、皇國のそれの樣に四季に惠まれて居ない。熱帶圏內だから年に二季しかなく、四月から十月までが雨期で、十一月から五月までが乾燥期なのだ。だから本船の當港を訪れたのは丁度雨期から乾燥期への變り目だつた譯だ。概して氣候は不順で、剩へ、衞生狀態は不良だから、色々の病氣が多い。主なる地方病はマラリアで、特に急性のもの多く、死亡率は多いといふことだ。それからフランベジヤ、十二指腸蟲病や上腿潰瘍がある。急性な傳染病もあるが、是等の大流行を見ることは稀有だ。癩病や結核性疾患があり、脚氣も相當あるらしい。

これが醫療施設としては陸軍病院があり、院長は少佐相當官で、外に軍醫官が三名と藥劑師が一名居る。病床は二百位。病院の境內は廣く設備は稍ゝ完備してをり、一般市民の診療にも當つてゐる。別に癩病院の施設があり、醫師二名（內、和蘭人の女醫一名）が擔任して居り、患者は現在百數十名で主として島民ださうだ。

近年、衞生思想も相當普及して來たが、同胞の先驅者達が渡來して來た頃などは全く糞も味噌も一緒で、不潔極まる狀態であつて、海濱は共同便所だつたさうだ。月明の夜、朗かであるべき海濱の散歩も、時折汚ないものを踏みつぶした時の氣持惡さと臭氣で臺無しになり、後始末に閉口したものだとは、某在留同胞の飛んだ懷舊談の一節。今でも中流階級以下の住宅には便所がなく、室內に便所のあるものは、僅かに上流家庭だけだと聞いては、啞然たらざるを得ない。

電燈は火力發電によるもので、料金の高いことは言ふだけ野暮な譯だ。飲料水は湧出する泉から水道を引いてゐる位、水量は豐富だが、水質は不良だ。井戸水は飲料水として差支へないが、井戸そのものゝ設備が不良だから、結局水が不潔といふことになる。然し、生活に缺く可からざる飲料水を、主として天水に求めて居る南洋群島の居住者にして見れば、水量の豐富と聞いただけで羨望の至りである。水は決して粗末にしてはならぬ貴重なものだと口を酢にして言つたところで、實際に、水飢饉にでも會つた苦い經驗の持主でなくては馬耳東風だ。おそらくアンボン人には、水の勿體ないことが判らないであらう程に、水が豐富なのだ。

教育施設

土地柄にも似合はず、教育施設の相當行屆いて居るのには驚かされた。教育が國運の消長に直

接の影響があることは今更贅言する迄もないが、統治國民と被統治國民とが同一種でない國體にあつては、この異人種間の性情や觀念の相違から發生する感情の衝突や、環境から醸成する憤懣が導火線となり內訌を誘發する可能性を多分に含む蘭印諸島に於て、施政者が國家百年の計を樹てたのかと思ふと、流石に植民行政に優秀な成績を擧げて居るだけに、その着眼點の申分ないのに敬服するの外はない。

當地方の小學校は、官立が六校、私立が一校あつて、前者の中、五校は和蘭語と馬來語を、他の一校はアラビヤ語で授業し、後者は矢張り和蘭語と馬來語を使用してゐる。中等教育には中學校と女學校が各一校あり、それ以上の教育には、ジャヴアに於ける師範學校や大學に修學することになるのだ。曾て當地には師範學校があつたが、最近餘りに多過ぎるとの理由で廢校になつたさうだ。上述の次第で、教師たらんとするものは、和蘭語と馬來語を修得した肩書を所持したものでなければならないのださうだ。そして小學校は七學級あるが學業の程度は日本の方がズツと高い。次に授業料であるが、これは父親の納稅額に比例して割當てられて居る。この點他山の石とすべきであると愚考する。早い話が、月俸千五百盾の理事官の令息と、月俸僅かに十五盾の島民巡査の子供とは、同じ學校に通學して居つても授業料には格段の開きがあるのだ。

在留同胞の某商會主の長男は小學一年生であつたが、その授業料は月に二盾九十仙であるのに、

島民の子供は、僅かに十五仙納入すれば、差別的な待遇を受けずに修學することが出來るのだ。從つて貧富の別なく、可愛い我が子に通學させることも出來るから、結局教育普及の徹底を期することが出來る譯だ。これは特筆大書して可なりだと思ふ。この地方の視學官が、丁度三年前（昨年の話で）から各學校に手工の課程を設けて、學童に貝細工などの手藝を教へ、時々學藝會を開催しては作品を即賣などして居るが、然し今のところ、産業としては將來性は覺束ない程に幼稚なものだ。

習俗

蘭領東印度に於ける本船の最初の寄港地アンボンの住民中、馬來人とアラビヤ人が多數を占めて居ることは既に述べたところであるが、この馬來人即ち島民の中にはオランダ人との混血兒が頗る多いといふのは、曾てオランダ本國の植民政策が島民懐柔の一手段として本國人に島民の婦人達と手當り次第に性交させた結果と何かで讀んだことがある。しかし混血兒と言つても堂々オランダの國籍を有し最高學府を出でて、官廳の相當の地位を占めて居るものも決して尠くない。現在、我が南進策に怯えて國防工作を高唱し、和蘭本國政府に軍擴に關する嘆願書を提起したのもこの混血兒たちだと讀んだことがあるのを覺えて居る。次にアラビヤ人であるが、アラビヤと

蘭印とは隨分遠く隔つて居るので、最初は腑に落ちなかつたが、色々と書物を漁つて見ると、西方から南洋諸地方に向つての交通も可成り古い歴史にないこともない。特に、アラビヤ人が南洋を訪れたことは古い。第九世紀頃に書かれたアラビヤ人の地理書のうちに南洋の幾つかの地名が列記してある。歐洲人の南洋遠征が始まつたのは遙かに遲れて十六世紀で、オランダ人や英國人が南下したのは十六世紀の末から十七世紀の當初にかけてのことであると書いてあるので、漸く、成程と、肯いた樣な譯。

一體、當地方の島民は一夫一婦で、結婚後の品行は方正で、性質も、日本人に酷似した點が多い。然し回教徒たるアラビヤ人は、一人の男が四人まで妻を蓄へることが出來るのださうだ。概して島民が懶惰なのは、南洋群島の島民に於けると同樣、住居は極めて簡單に、竹の柱に椰子の葉の屋根で造られて居り、天惠の果實は、四季の別なく、目前に求めることが出來るからだ。雇傭人たちは、少し小金が出來ると、無斷で飛び出して野に還るが、金を使ひ果すと一寸した手土産を持つて戻つて來るといつた呑氣さだ。然し乍ら、サンザルといふこの附近に住するシヤオ族は、日本人と同樣、勤勉であり、敬神の精神から迷信なども似通つた點が多い。性病は多いが、ダイヤ人にこの患者のないのは、年中素裸で暮してゐるので、日光浴の效果によるらしいとのことだ。この地方の島民たちの性質は日本人と酷似してゐると言つたが、そも〳〵南洋と日本との

歴史を繙いて見ると、日本では古い時代から南洋の諸地方を南蠻と呼んで居たし、又南蠻人が日本に漂着した史實も尠くない。それから十七世紀の中葉から約一世紀半に亙つて日本の南洋貿易が隆盛を極めたことも記錄されて居る。他方、史實に依れば、次のやうな不祥事件がこのアンボンに起つたことがある。

即ち元和五年（西暦一六一九年）の春、和蘭の根據地であるジャガトラ（今のバタヴィア）を、突如有力な英國艦隊が襲撃したことがある。當時、ジャガトラには數百人の日本人（主に倭寇）が居住してをつて、堂々たる日本町を構へて居たので、是等日本人は和蘭側に加擔して、來襲した英國艦隊を相手に奮戰し、之を見事に驅逐したことがある。

ところが、和蘭人は、その當座だけ、日本人を鄭重に優遇したものゝ、あまりにも日本人が勇猛果敢なので、内心、恐怖の念に驅られてをつた。そして今までの感謝の氣持は、すぐに警戒心に轉變してしまひ、遂には、左に述べるやうな日本人虐殺事件の惹起を見るに至つた。

却説、和蘭東印度商會は、モルツカ群島（當時は香料の名産地である爲、香料群島と呼稱して居た）を接收、その要衝アンボンに堅牢な城塞を構築してをつたが、この時、同地居住の日本人が、何氣なく、この城塞の兵力を質問すると、性質の悪い和蘭人は、日本人が英國人と策謀して、蘭印を攻撃せんがための間諜であると獨斷して、この日本人を逮捕し、拷問にかけた上、日

本人十餘名と英國人十數名を拉致して火刑に處した。和蘭人は恩義を忘れ、無辜の外國人を斯樣にして、無情にも虐殺したのである。（註、昭和十五年六月二十八日讀賣新聞所載、永松茂造氏述より拔萃）

他方、ジームス・エム・アレキサンダー氏が、一八九五年に恁う書いて居る。

ミクロネシヤ人はポリネシヤ人とパプア、即ちニュー・ギニア人の血統を引く日本人の雜種だ。日本人の血が混つてゐる所以は日本人の航海者達が時々遭難して帶狀のミクロネシア群島を通過し、海洋遙かに遠く漂流して居るからである。一八一四年に英國の二本マストの帆船フオレスター號は、加州沿岸沖合で一隻の日本船に出會つたが、船中には三名の生存者と十四個の屍體が置かれて居た。一八三二年十二月、日本船が生存者四名を載せてハワイに漂着したことがあつた。ミクロネシア人はポリネシア人よりも色が黑く、脊も低いが、西部ミクロネシア人は東部地方のそれよりも色白で、ズツト日本人に似て居る、と。

この樣な史實を綜合して見ると、この島民たちに多少でも日本人の血が混つてゐるのではなからうか。私としては日本人の先祖が何處からやつて來たのかなどとの詮議立ては遠慮して置かう。

最後に風紀問題であるが、この土地の若い女達は、熱と光に惠まれるものゝ生理的作用にも因るのであらう、相當に裕福な生活を營んでゐる家庭のものでも、濫りに女の最後のものを提供し

て居るので、社會の風紀は紊亂して居るとのことだ。その直接の原因は果して奈邊にあるのか、判斷に苦しむ。

産業と交通

農作物が主であるけれども、地形上大發展をなすことが出來ないし、又作物にしても栽培に好適でないものが多いので困る。この地の主たる作物である荳蔻、丁香、少しばかりの珈琲、カ、オ、及びサゴは、この地方の需要を充たすには不足なので、一衣帶水を隔てゝ居るセラム島から大量を輸入して居るといふ狀態だ。

日常の食膳に供すべく各種の野菜は栽培されては居るが、甚だ少量なので中々高値だから、中流以上の食物でしかあり得ない。然しライチセール半島には總じて果樹が多い。

アンボン灣にはサヨリ、鰮、貝類、海草類、海參の漁獲が豐富であるが、是等の海産物は自給自足の程度で、十年一日の樣なのは、産業化を目指して、緊褌一番努力しようといふ誠意がないからだ。結局、産業的將來性は絶無といふことになる。

從つて交通機關は遲々として進展せぬどころか、反つて影が薄いと斷言して可なりだ。アンボンを中心に地方との連絡は、現在日本人會副會長たる矢倉英五郎氏が、商店經營の傍ら、所有船

小秀號（七噸半）の舵を握つて、支那人經營の運送船と鎬を削つて居る外に、運送業と看板を掲げて居るものはない。

尙、この地方の道路はジヤバ島などと同じ流れをくんで居る爲か、全部坦々たる鋪裝がしてあるにも拘はらず、自動車數は百四十八臺。これも産業の不振を反映するものだ。

産業不振に禍されて、生活必需品は、全部輸入品に仰いで居る。食料品の九割は濠洲から、爾餘の一割は日本から輸入して居るし、雜貨に至つては殆ど「メード・イン・ジヤパン」の商標入だから痛快だ。日本の經濟的進出を阻まうとする英國の指金によるのであらう、近年、日本商品の輸入を制限したり、特に昨年（昭和十年）夏からの搦手からの壓迫は、どうも腑に落ちぬものがあると聞知した。

それは日本人の生活上に缺く可からざる味噌醬油及び是等の元である大豆は昨年（昭和十年）一月から輸入禁止を喰つた。抑ゝ日本人の必需品たる是等のものゝ禁輸は、蘭印諸島に於て、是等の代用物があるのならば兎も角、さうでない有樣なのであるから、斯かる當局の擧措は、直截的に言へば、日本人の撤退を遠廻しに强制するに外ならない。しかも全然その理由は發表されて居ないに至つては言語同斷だと聞かされたが、よく實情を檢討して見ると、禁輸ではなくして輸入制限なのだ。その理由は甘蔗の栽培に不適になつたところへ大豆を植付けさせようとする官憲

の魂膽だつたらしく、現に支那人たちは日本の味噌や醤油に近いものを作つて居るとのことだ。そして又在留同胞にして一定量に限り官憲の特許を得て是等を購入して居るものも實在して居ることも確めた。

上掲の日貨の進出について、米國ボストン市に本據を有し、新聞界に驍名を馳せてゐるクリスチャン・サイエンス・モニター紙の記者、マーク・テイ・グリーン氏が亞細亞誌への寄稿文の一部を譯出して、現時諸外國が如何に日本の經濟的進出を畏怖して居るかを紹介して見よう。

「太平洋に發生しつゝあり且つ進展しつゝある或る昭著なる變化と意義深長なる趨向とは、世が世ならば世界の視聽を集中すべかりしものを、現在（一昨年の夏頃）では左程に耳目を聳動して居ない感がある。然しこの變化と趨向の數々を研鑽して見ることは極めて必要である。といふのは是等にはこの廣大なる地域全圓の經濟的及びおそらく政治的將來に重大なる影響を持つ多分の可能性が含まれて居るからだ。是等の變化と趨向中、最も高調すべきは日本人に關する問題である」と冒頭にかゝげてから、原文の中程に「他にも日本人の利口にして精巧な遺り口の例證がある。筆者は先程二十五仙の寫眞機のことを話した。諸君は、この寫眞機は恰度、我々が小學校の生徒であつた頃、手頸にはめて悦に入つて居つた眞鍮の腕時計の樣な子供の玩具に違ひないと言ふだらう。決してそんな代物ではない。日本人はそんな遺り口では滿足しない。

それは本當の寫眞機で撮影することが出來るのだ。どれだけ永く使用出來るか筆者は識らないが、若し諸君が、それで十二枚の風景をとつたら大して文句は言へまい。加之、この寫眞機は勿論小型だが、現像や燒付の器具も附屬して居る。それでもなほ本當のことを言ふと、所謂、單個の表情がある。換言すれば、日本人は一個二十五仙の寫眞機を以て、通商上の動因として期待して居るのではない。日本人の期待して居るのは、この商品を見て驚愕してその生產者に絕大の讃辭を惜しまぬ顧客連から、斯かる商品を案出し、之を實現することの出來るのは怜悧な國民に違ひないといふ聲を聞くことである」と。實に明快なる觀察に驚かされる。

之に反して、曾ては南洋華僑として謳歌されて絕大な信望を獨占した在留支那商人は、すつかり日貨の進出に壓倒されて仕舞つたので、利に敏いだけに、今では日貨を店頭に列べ、日貨のおかげで露命を繋いで居る憐れな境涯だ、それもその筈、當地を引上げ歸國する氣配の一向に見えないのは、よし引上げるとしても、匪賊の一味が潛入して居つて、歸國の途中を擁して、金品を根こそぎ强奪しで仕舞ふからだ。外南洋一帶の住民たちにしたところで、今では、往昔の華僑の繁榮は欺瞞政策によつて築き上げられた砂上の樓閣に外ならないことを見きはめて居るだけに、對日感情は實にいゝし、中には日本の動きを正視して居るものもあるのには驚かされた。これは當地の警察署長で、スロイ氏といふドイツ人であるが、同氏は昨年（昭和十年）二、二六事件後、

二日目にラヂオで叛亂を聽取し、在留同胞の某氏に向つて「何、大した杞憂は無用だ。恰度、羅針盤の破損を修理した樣なもので、船體には何等別條はない」と語つたさうだが、正鵠を得た批判だと思つて感銘した。

アンボン生れの純粹な和蘭人の議長エー・フアナール氏は當年（當時の話で）五十歳であるが獨身者の親日家で、昭和十五年に東京で開催されるオリンピック大會に是非來朝し、その序に日本人の花嫁御を貰つてくるといふ程の執心振だと聞いた。同氏は十四五年來、議長の要職を重任又重任されてゐる程に名望高く、令兄も、一流の旅館の經營者で、獨身者といふ變り者だ。そしてこの議長は日本婦人を配偶者に迎ふる場合、四圍の排日的環境の重壓、並びに本國政府の忌諱に觸れて、現職を辭するの已むなきに至つても、斷然願望の達成に向つて邁進すると明言したほどの親日振りだ。成程蓼食ふ虫もすき〳〵とはよく言つたものだ。賢者は群盲を排して所信を貫くために躍進すると看るは僻目か。然らば何故にこの議長がそれ程日本の婦人に執心するに至つたかといふと、一度も來朝されたことはないが、久しく某在留邦人と親交されてゐる間に、某氏の妻女を通じて、日本人の婦德を知り、且又在留邦人の妻女達を通じて、妻としての日本婦人を敬慕されるに至つたのだとは議長の感懷ださうだ。猶、議長は來朝の折には、三人の島民も携行されるらしい。

こゝに面白い話がある。某酋長は非常の親日家で、前記の日本漁船拿捕事件の際、蘭印官憲の亂暴な取扱ひを、丸で自分のことの樣に憤慨し、他聞を憚るところもなく「日本の軍艦が五、六隻アンボン灣に徐行で入港するなら、一戰を交へずして、この界隈は日本のものだ」と誰彼の見境ひなく啖呵を切つたさうだ。それが官憲の耳に入つて、遠隔の地へ轉勤させられたといふことだ。私は皇軍の威武は知る人ぞ知るだと思つて溜飲を下げた。

又、アンボンならぬ蘭印の他の地方もさうだが、日本の軍艦が入港すると其後三ケ月位は日本商店が繁昌するとのことだ。島民たちは軍艦を參觀するのを非常に嬉しがつてゐるさうだ。それもその筈、外國の軍艦が來港しても島民に參觀させぬので、一向島民たちは見向きもせず、敬意も拂はないからだ。在留邦人にとつて、帝國軍艦の來港は福の神の御入來である。商人達ばかりではなく在外邦人にとつては、帝國軍艦の訪れは、眞個の感激以外の何ものでもないのだ。色々の意味に於て。

和蘭本國政府の行政政策

端的に言へば、超資本主義だ。何故なら、和蘭政府の遺り口は本國人と英國系の資本によつて運營する、僅か五大會社の權益を擁護する考へからこの五大會社の中の何れか一つの手を經由す

るのでなければ、日貨の大部分を輸入することの出來ぬ樣に仕組まれて居るのだ。本國政府の政策といつたところで、勿論、某國が陰で糸を引いてゐることは判り切つた話だが、大資本家達にだけ蘭領諸島の企業を獨占させて仕舞つて居るが、これは近視眼的な遣り口で、將來を無視したもの。結局、自ら墓穴を掘るのと異らないのではなからうか。そして、公官吏が、必要以上に多く、このお役人樣達は、殆ど全部のものが恩給取だから厄介だ。本國政府が、アンボン島とセラム島並に其の屬島に支拂ふ恩給年額は五萬盾位ださうである。

一例を擧げるならば前市長の月俸は五百盾で、外に恩給が六百五十盾といふ二重收入だから、御本人は豪勢なものだが、これを支拂ふ國はたまつたものでない。所謂、恩給亡國でなくて何であらう。

だから、噂によれば、大晦日のタツタ一日で、某日本人の酒舗の賣上高が大枚千盾あつたとは嘘の樣な實話だ。現在ではそれ程景氣はよくないので、酒類商として年に百盾の稅金は拂つて行けぬらしい。酒類のことで思ひ出したが、ビールは他の酒類よりも一番よく賣れるさうだ。

話は元に戻るが、畢竟、財源を蘭印に仰ぐ和蘭のことだから苛斂誅求といふことになる。といふのは、蘭印の全人口七千萬で、和蘭本國のそれは六百五十萬だから、十人强の島民達が一人の和蘭人を養つて居る譯合になるからである。

新聞

アンボン及びこの近郊に發行される地方新聞が一つもないと言つたら、大概、文化の程度が察知されよう。新聞の優劣こそ、國家消長のバロメーターとも言ひ得る。卑近の例證として、支那を見るがいゝ。一體支那に權威ある新聞があるか、出鱈目なニュースを上海電報といふのではないか。このアンボンに見る唯一の新聞は、すべてジャヴアで發行された蘭語新聞で、二十日位遲れて居るのは交通の不便な爲だ。剩へ、このジャヴアの新聞と來たら、支那のそれと大同小異で、誤報も甚だしく、流石の支那の新聞も三舍を避ける程にデマが多いと聞いた。

海の園

次にホテルであるが、當市には和蘭系一、支那系二、島民系一、都合四つある。和蘭系のものは一流であるが、爾餘のものは問題外だ。アンボンには、時偶、觀光客の流れがジャヴア方面から來遊するさうだが、灣外七、八浬北東に當る海中に「海の園」といふところがある以外は觀光客誘致の宣傳資料ともなるべき景勝もない。

この「海の園」を觀賞する爲のプログラムも「上陸禁止者」たる吾々には何の感興でも、又待

望でもなくなつて仕舞つたし、それに上陸許可の交渉に荏苒貴重な時日を空費したので、旅程も豫定より遲れてゐるために、折角のプログラムもオジヤン。上陸禁止なんだから上陸しなかつたら、かまはないぢやないかといふ小理窟も成立つものの、吾々が本船を離れて、本船備付のモーター・ボートに乘移つて飛び出したら、氣の弱い官憲のことだ、どんなにブツたまげて、騒ぎ立てないとも限らない。小膽者には心配をかけぬといふ義俠心を起して、此の見物は取止めることに一決した。

併し乍ら「海の園」と言つただけで、說明位しないのは不親切千萬だ。一通り說明しよう。早朝、海上波穩かなる時、島民の丸木船に乘つて漕ぎ出で、船底に硝子を張つた箱を透して海底を瞰下すると海中に鰯、秋刀魚、鯛等の海魚や、それから海蛇、珊瑚、海藻、貝類等の棲息狀態が、ありのまゝに見透すことが出來て、丸で熱帶の水族館であり、觀光客にとつて見逃してはならぬ名物になつて居る。

氣溫

本船がアンボンに碇泊中の氣溫は最高二九度で、最低二四度だつたことを附記して置く。

セラム島の概觀

序乍ら、アンボン港のすぐ向ふに見えるセラム島のことを紹介して見る。

本船がアンボンに入港した前日の晝近く、針路の彼方に見えた大きい島だ。全島の面積一萬七千百六十方粁で、人口は七萬と註せられて居る。島の脊をなす山脈は六千乃至八千呎だ。そして最高峰たるヌサ・ヘリ山は九千六百呎で斷然頭角を拔いて居る。どうも吾々の樣に猫額大の南洋群島に生活して居るものが、この樣に面積尨大なる、しかも人口稀薄な島々が諸所に放置されて居るのを見ると、その內のどれでもいゝ、一つ位何とかならぬだらうか、などと垂涎措く能はざる次第だ。別に頂戴したいといふのでなく、せめて自由に入島出來ぬものかと思はない譯には行かない。世界地圖面には、全然、針を突いた程のものが實際に來て見ると、恁うも大きいのかと驚かざるを得ない。これが今回の旅行で得た第二の新知識だつた。

アンボンでの官憲との交渉が上乘の首尾だつたならば、このセラム島へもドライヴして見る豫定だつたが、如上の不首尾で、折角、眞ぢかまで來て居ながら、その土を踏む機會に惠まれなかつたから、指を啣へ乍ら、すぐ眼の前に見ただけに、一しほ殘念だつた。

上陸しなかつた土地を紹介するのも變なものだが、この地方に就いての文獻は極めて少いの

で、この機會に紹介するのも決して徒爾ではあるまい。或る書によれば、

「セラム島は一名シラン島と呼び、馬來群島中第二の大島で、セレベス島とニュー・ギニア島の間に横たはり、中央部狹窄し、面積一七、一六〇方粁、人口七〇、〇〇〇を有し、數多の山脈が島中に横たはり樹木鬱蒼として居る。コヽナツト、サゴ、椰子を植ゑ、米、珈琲、煙草を産出する。其の住民は馬來卽ち海岸島嶼族であるが、海岸地方には支那人と島民の混血種族が多く、盛んに漁撈に從事し、遠くスンダ方面まで出漁する。」

と書いてある。

これで、一先づアンボンに就いての報道を打切つて、矢張り、蘭領東印度のアルー群島中のワムマ島上にある都邑ドボに就いて紹介することゝする。

第二章　蘭領　ドボ

ドボ港へ！

（昭和十一年）十月一日正午、本船はアンボンを出港してドボに向つた。航行すること一時間にして灣の尖端にある燈臺を通過して大洋に出た。

本船の出帆する數時間前、昨夕アンボンに飛來した飛行艇三機の內、一機は何處かへ飛び去つた。或は杞憂かも知れぬが、一足お先にドボへ向つたのかも知れない。三名の上陸禁止者が便乘して居る本船の行動を監視する爲の準備固めであるらしい。アンボンの官憲は本船入港の際、吾吾三名の旅券を一時預つたのだから、それに貼附してある寫眞を複寫した上、飛行艇に託してドボ官憲に手交し、本船のドボ入港と同時に、吾々を取締る爲の手配らしい。丸で重罪犯人の取締か、又は逃亡犯人逮捕の手配同樣の警戒振には、ホトホト愛相も盡き果てざるを得ない。

パラオを鹿島立つてから丁度二週間目に當る十月四日の午前七時、右舷の眞近に、六尺位の海豚が十數匹半身を海上に躍らせながら、いとも鮮かに本船と並んで競泳して居るのに會つた。單

調な船中生活のことゝて、何もかも物珍らしく無聊を慰めてくれる。かくて午前九時本船はアンボンから約四百二十浬隔つて居るアルー群島に差掛つたと思ふ間に、右舷にワムマ島（一名ドボ島とも謂ふ）が見えて來た。

アルー群島の概觀

このアルー群島はオセアニア洲のニュー・ギニア島の咽喉部の南に位して居り、南緯五度二〇分から同六度五五分に及んで居り、西は東經一三四度一〇分から同一三四度四五分に及び、各島とも著しく接近して居つて、約南北に長く、全部珊瑚礁から成つて、大小八十餘の島嶼が一團となつて居る。總面積は八千四百十八方粁で、島上は密林で被はれ、住民は主にパプア族で、中にはキリスト教信者も居る。一九三〇年の島勢調査に據ると島民の人口は一萬八千三百で、これに精々二十名位の白色人種に、支那人が七百と在留同胞が二百足らずである。

産物としては、群島そのものが廣大な珊瑚礁だけに、眞珠、眞珠貝、玳瑁や海參が豐饒で、陸からは米、玉蜀黍、サゴ、極樂鳥が産出する。東部地方は眞珠の採集で昭著であつて、最近木曜島に於ける斯業が衰頽した結果、同業者はこの地に移り、セレベス・トレーディング會社がこれの經營に當り、數十名の日本人が雇傭されて居る。以前には年に四、五千の支那人、マカツサル

人及び日本人が交易のため來訪したことがある。

ワムマ島は、上述のアルー群島の構成分子だけに、丘陵らしい隆起もなく、所謂、低地の延長で、水打際から椰子、其他の叢林が密生して居り、海は薄綠に、波は無い。島の北端に二本の無電塔が中天に聳え立つて居る。本船はこのワムマ島に沿うて大きく弧を描きながらドボ港に近寄つた。やがて投錨したのは、午前九時四十分（パラオ時刻）だつた。

ドボ港の概觀

一口に言へば、細やかな漁村だ。本船の右舷の眞向ふに、粗末な木造の延長二十間とはない棧橋がある。その棧橋の稍ゝ左手の彼方に前記の無電塔が見え、海上には三個の浮標がある。棧橋の右手の水際には、海面から高さ二間餘の杭の上に建てられた掘立小屋が、幾百となく羅列して見える。そして海濱の水打際を鬱蒼たる椰子樹が緣取つてゐる。これがドボ港の繪だ。

ドボの概況

ドボは別名、ドッボと呼び、其の人口は僅かに千百餘名、内、在留邦人は全部で百十五、歐洲人十一（濠洲五、和蘭二、スエーデン一、其他西班牙人と丁抹人及び支那人が七百、島民三百で

ある)。在留邦人の家族に五歳以上の子供が一人も居らぬのを、最初は不審に思つたが、事情をよく聞いて見ると、この土地の邦人は、子供達がその年頃になると全部、内地へ送り返して教育して居るのである。

日本兒童をマレー人と一緒に通學させて居るものゝないのは、子弟の教育上、大變喜ぶべきことゝ思ふ。しかし親と子、夫と妻とが子弟の教育上、不自然な別離を餘儀なくされるのは、吾々南洋群島に居住するものも同然だが、如何に生活のためとは言ひ條、一家團欒の樂しみを味はずして各自は生業にいそしみ難く、兩親の存在なくして圓滿なる教育は望めないものだと聞かされると、外地に生きるものに一抹の悲哀があることは否めぬ事實だ。

當地には、木造二階建の日本人會館がある。この會館は明治四十三、四年頃、二千八百盾を投じて建築したものであり、日本人會の財的地位も相當豐かなものと聞いて嬉しかつた。日本人會會長の任期は一年交代制で、現在の會長は鈴木與助氏であるが、目下病氣療養のため歸國中であり、名譽會長に雜貨商を經營して居る瀬戸和藏氏がある。瀬戸氏は德望のある老人で、明治三十七年に渡來され、以來、六回程、內地に歸省されたが、前後三十二年間在留されて居り、所謂、ドボの顏役で通つて居る位だから和蘭官憲の氣受けもよい。同氏は、「私が最初に渡來した當時には在留日本人の男が二十名、女が四名居つた」と言はれたが、それによると、當地は既に久しき以

前から同胞の先驅者達の活躍して居たことが判る。

賴母しいことにこのワムマ島に借地とは云ひ條、皇國の土地がある。それは昭和五年に擔保流れで、臺灣銀行のものとなつたもので、ドボ港の東南二十一哩の地點にある。面積二千百四十パウ(一パウは約我が四段二十四歩)の中、栽培面積は五百五十パウで、全部古々椰子を植付けて居る。その借地權の有效期間は七十五ケ年で、幾分經過はして居るが、まだ相當長い先まで占有することが出來る。こゝに支配人乾辰男氏が最近迎へられた若い夫人と共に奮鬪して居られる。又ワムマ島の向ふの島で、故永野角十郎氏が官有地を借地し、年稅三百四、五十盾を納めて製材業を營んで居る。

上記椰子園に雇傭されて居る島民の賃銀は月給制だが、缺勤日數だけ日割で差引かれることゝなつて居る。熟練工で、月八盾、他は七盾であるが、賄付だ。そして眞珠採取船に働くものは月七盾半から十盾であるさうだ。

對日感情としては官憲の邦人に對する態度は良い方だし、島民達のそれも良好だ。それは日本人の雇主が、白人達の樣に、島民の使用人を差別待遇しない爲らしいが、日本人の雇主にして見れば、特に、平等に待遇するのでなく、例へば、賄なども別に調理すると却つて餘計に手間が要るからだと聞いた。萬事がかうまく行けば世の中は安穩だ。

氣候と醫療施設

氣候はアンボン同樣、熱帶圈內に位置して居るのだから、年に乾燥期と降雨期があるが、玆四年來の氣候は頗る不順であるとのことだつた。

從來、醫療施設としては、セレベス島マーカツサルに本據を構へ、二十六隻の漁船を所有する前記セレベス・トレーディング會社が半民半官組織で、一病院を經營してをつたが、昨年六月頃から和蘭政府が管理することゝなつたさうで、バタヴィア醫大出のジャヴア人の院長と看護婦が三名で、治療に當つて居る。

外に、癩病患者隔離所があり、收容力約十名とのことだ。

官憲の取締

官憲と言つても幹部は和蘭人が二人切、一人はコントローラー（管理官）の次席のヘサツク・ヘベルの地位にあるエー・バラー氏と、もう一人は港務部長だけだ。軍隊は島民兵が二十二、三人位に、上官が軍曹でこれも島民だ、そして警察官を兼務して居る。

當港に本船が入港したのは丁度日曜日だつた故か、それとも他に理由があつた爲なのか、本船

が港內に投錨して汽笛を鳴らして稍ゝ暫くすると、お役所の小使の樣な服裝の島民が、素裸の島民にボートを漕がせて來船、入港屆の用紙を屆けてくれた。其の用紙はアンボンで記入署名したのと同樣、使の先生少し英語が解るらしい處を見ると、小役人なのかも知れない。それつ切り、白人は誰一人見えなかつた。本船をわざ〳〵出迎へてくれた前記瀨戸名譽會長や辻內副會長、それに臺灣銀行の椰子園支配人乾氏、外に、當時入港中の虎丸の船長齋藤氏と同船事務長鈴木氏一行について、當地官憲が吾々上陸禁止者につき何等かの手配がアンボンから來て居るか否かを尋ねたところ、別に通知は來て居ないらしいと聞いて、吾々が豫想して居た程に重罪犯人としての警戒を受けては居ないことを內心喜んだ。又例の飛行艇が飛來した氣配もなかつたので、さては取越苦勞であつたかと輕い笑ひを浮べたのも其日限り、四日午後二時に飛行艇三機が飛來する豫定を五日に變更したのであらう、午後二時頃になると港外の上空に微かに爆音が聞えると思ふ間もなく例の三機は翼を並べて本船の眞上を飛翔してから、鮮かな操縱振りを見せて着水し、棧橋北寄りの浮標に夫々繫留された。乘組員は出迎へのボートに移乘、棧橋から上陸して行つた。當港內の干滿の差は約七呎だ。昇降に便ならしむる爲の棧橋の突端に鐵製の梯子を、丸で猿の樣に攀ぢ登るのだ。すると其處に軍人兼警察官が二、三名見張つて居る。肩に銃、腰に劍だから中々嚴めしい警察官だ。棧橋を渡つて仕舞ふと右側にバラック建の港務部があるから、船から陸地へ

出入する者は必ずこの關所を通らねばならない。此處を通過するとドボの町だ。粗末な家が密集して居る。町内には此處彼處に例の警察官が銃を擔つたまゝ漫歩して居る。あまり恰好のいゝものぢやない。町とはいつても邊鄙な漁村の姿そつくりだから、何一つ觀賞すべきものはない。

ドボへ入港してから二日目の朝七時、前日飛來した飛行艇三機の内一機が、爆音勇ましく離水してから本船上空を一周した上、港外に飛び去つた。機體が見えなくなると間もなく、港外遙か彼方に軍艦が見えた。先きに飛び去つた飛行艇は此の軍艦の先導役を承つたのかも知れない。午前九時頃、此の和蘭の軍艦は針路を轉じてから港内に向けて徐航して來た。

やがて艦上に搭載の飛行艇一機は本船眞近に飛來し、示威のためか、本船のマストに觸れんばかりに低空飛行を四回も續けたものだ。「何、本船上に爆彈でも投下する樣なことがあれば吾々乘組員は一たまりもないが、その代り少くともドボは日本の屬領地となるんだ」と言つて强がりを見せはするものゝ、内心滿更いゝ氣持ちやない。ヒョッとするとドボへ飛行艇が三機も飛來し、剩へ、軍艦が回航した日時が偶然にも本船の來港碇泊したのとカチ合つたのかも知れない。何も蘭印政府に本船を歡迎する程の義理もない所を見ると、自然、蘭印政府が如何に神經過敏であるか、又如何に心臟が弱いかをハッキリ見究めることが出來る。

この軍艦は本船より約一浬隔てゝ投錨した。艦名はソェムバ號で、約二、五〇〇噸級、飛行艇

三機を搭載してをつて、先づ海防艦といふ類。本船は六日午前十二時、北濠ボート・ダーウィンに向つたが、其の間直接當地官憲の取締を受ける樣なことはなかつたし、又官憲が來船して吾々三名の上陸禁止者の首實檢をする程のこともしなかつた。

次に檢疫方法であるが、外國からの入港船は、日本では必ず全面黃色の檢疫旗を揭げる事になつて居るのだが、蘭印諸島では船内に傳染病患者の居ない時には、この旗を揭揚するには及ばない。先年、本船がアンボンに入港の際、檢疫官の乘船を乞ふ考へでこの檢疫旗を揭げたものだ。すると檢疫官が驚いて馳せつけて來て見ると船内に傳染病患者が居ないので、とんだお眼玉を頂戴したさうだ。實は其の當時生憎檢疫官が遠隔の地へ出張中であつたが、アンボン官憲が本船の檢疫旗を見て驚き、急遽この醫官を出張先から呼び戻したものだ。叱責される筋はこちらにないが、これが先方の取締方針なら致し方がない。

どうも腑に落ちないので、後日チモール島クーパンに入港の際、港務部長が英語がよく判るので、この事實を指摘して尋ねると、矢張り檢疫旗は傳染病患者のある場合に限り、揭げることになつて居る事を確認した。

極樂鳥

極樂鳥は、其の羽毛の美しさに於て鳥類の王とまで讃美されて居る。それは剝製にして裝飾品として珍重されたり、又其の羽根は婦人帽子の飾として愛翫されて居る。大正五、六年頃、婦人帽子の飾として羽毛が流行の尖端を行つた當時、一羽の翼だけで、優に二、三百圓の高價で飛ぶ樣に賣れたものだ。現在でも剝製したものが、內地では一羽四、五十圓から百二、三十圓の相場ださうだ。この極樂鳥がこのアルー群島の特產物で、以前はこのドボが取引の中心地だつた。勿論ニュー・ギニア地方からも產するが、その色彩に於て當地のものが王座を占めて居るとのことだ。世界市場の需要を充すために、餘りに多く捕獲した結果、これが絕滅することを憂ひ、當地官憲は、最近二、三年前からこれを保護鳥として、輸出罷りならぬといふ布令を發したのだ。そしてこれに違背したものは賣手と買手双方から一羽の密輸每に大枚千盾の罰金を課してまで、嚴重に取締つて居ると聞知した。それでもなほ官憲の隙を窺ひ、密輸を企てゝ居るものがあるので、官憲は相當手古擦つて居るとのことだ。單なるデマかも知れないが、利慾に目のない支那人は窃かに官憲と提携して、表面官憲に內密の樣な風を裝ひ、取引が濟んでから官憲に買手の服裝や人相を詳さに內通するものがあるさうだ。だから犯人は必ず逮捕されるし、支那人は濡手で粟のつかみ取りで、金儲けにはなるし、現物はそのまゝ手元に戻つて來る。結局、この筆法を幾度と繰返すのだから、現品は買手から賣手に官憲の手を通じて再び戻つて來るのだ。だからカモになつ

たものこそいゝ面の皮だ。金はなくするし、現物は沒收されるし、其の上に罰金だ。所謂、泣き面に蜂とはこのことだ。

住民の習俗

この地の島民は、その懶惰なることに於ては世界でも稀有ださうだ。面構へとか服裝などはアンボンの島民達と全然異つて居ない。檳榔子を嚙む習癖は先づ皆無といつてよい、これを嚙んで、血の樣な唾を吐くのは外來者と見て差支へない。耳飾をつけるものが近年殆ど見當らないのは、彼等でも現代化した爲か、耳朶に穴の跡の殘つて居るのを恥かしがつて居る位だとか。

常用語

蘭印地方の常用語は、何といつても馬來語が一番廣く通用する。しかし乍ら、國語として最も尊重されて居るのは、英語で、次が蘭語、馬來語、土語といふ順だと聞かされて見ると、英語の活用範圍の廣いのに驚嘆せざるを得ない。或る書で讀んだことだが、米國の著名な語學者メンケン氏の談によれば、世界の全人口約四十一億の內、二億餘のものが英語を解するといふ說を實際に信憑する機會に接した譯だ。成程、蘭印地方の今回往訪した諸港に於ける官憲の幹部級は英語

で話せば用が辨ずる。しかし、一般人は馬來語を常用語として居るから、この方面へ旅行するものは、馬來語を研究して置く必要がある。それだけの準備が出來ぬなら、せめて馬來語の會話集位携帶されることをお勸めする。

食料

此の地方は交通が不便で、カー・ピー・エム汽船會社の定期船は月三回しか入港しないが、肉類としては牛と鹿の肉があるし、野菜は主として支那人が栽培して居り、大根や茄子等が供給されて居るので、食料に不足することはない。日本人にとつての必需品たる米は、立派なジャヴア米があるから、先づ心配は無いと言つていゝ。

其れから醬油、味噌の輸入制限はアンボンと同樣だが、是等に代ふるべきものを釀造してゐるから生活上には一向差支へない。

次に飲料水であるが、井戸水があつて飲用する事は出來るが、鹽分が多少含まれて居るので、此れを用水とし、天水を飲用して居る。電氣が無いので、重油から瓦斯を發生させる。瓦斯のランプ（相當高價なもの）を使用してをり、又氷などはなく、僅かに電氣仕掛の冷藏庫が二、三臺ある位の程度だ。だから本船の入港した當時、在留邦人と官憲に氷を贈つたら非常に隨喜してを

つたのも宜なる哉だ。

教育施設

當地の教育施設は眞に微々たるもので、僅かに馬來語の小學校が一つと、支那人の言はゞ塾の樣な建物が一つあるだけで、前者は四學級に分たれ、各學級には生徒が約三十名位、これ以上の教育を受けるには、アンボンまで出かけなければならないのだ。後者は七學級で、就學兒童は七十人位であるが、此れを教員の肩書ある支那人の夫婦と、もう一人、都合三人で擔任して居る。

このドボの近郊にも寺小屋の樣なものがあり、就學兒童數は約二十名。前記支那人の學校で教鞭を執つて居る夫婦ものが、この瘴癘の氣に滿ちて居る異鄕で、熱心に兒童の教育に當つて居る努力は、支那人とは言ふものゝ、實に感激せざるを得なかつた。

然し恰も俊寛の樣に南洋群島の小さな離島で孤獨な單身生活を物ともせず、同胞の兒童ではなく、島民の學童の教育に精進して居らるゝ先生方の獻身的努力に比すべくもない。南洋群島を訪れる外國人達が、この先生方の御奮鬪振りに感激して居るとて、何の不思議があらうか。

主要產物

ドボの主要産物としては先づ眞珠貝、燕巣と海參（ナマコ）を擧げる事が出來る。で、眞珠貝は濠洲産のものゝ樣に、品質は優秀でないから、當時噸當り約千盾であつたが、其の年産額は三千擔（ピクル）で約二百噸位、燕巣の年産額は三擔で、一等品は一擔につき千盾。次にアルー群島の海參の年産額は約三百擔で、其の七割五分を占めてをり、品質により五種に分たれて居る。此の主要なる産地は、本船がドボへの途次、瞥見したタンニバー島であつて、年産額は約一萬擔と註せられて居る。海參の一等品の價格は一擔につき三十乃至三十二盾、二等品は二十四乃至二十五盾だ。

この海參の全盛期は大正十二、三年頃で一擔七十盾にまで騰貴したことがある。昨年支那の稅制改革に依り、四割の輸入稅を課せられる樣になつたので、需要が乏しくなつた。

從つて一擔二十盾位まで下落したけれども、又再び需要が殖えたので、現在では上記の如く三十三盾までに復活したが、何しろ收穫期は毎年八月より十一月迄であるから、如何樣にも算盤がとれなくなつて、最近では十九盾位に暴落したこともあるらしい。

而して當地居住の同胞が所有する漁船で和蘭に船籍を有するものは當時六隻であつた。

交通の不便

次に交通運輸に就いて言へば、陸上に於ては二臺の官有自動車以外に、乘客用自動車は勿論、トラックさへも無いのは、陸上には産業といふ産業のない事を雄辯に物語つて居る。

僅かに椰子栽培業はあるが、この運搬はすべて島民のカヌーで行つてゐる。海上には先づ御用船のあることを指摘する必要がある。

これは白ペンキ塗の新鮮な感じのする二十噸位の快速の汽艇で、御役人の出張とか又は警備の任にも當るのだらう。次に前記カー・ビー・エム汽船が十日目毎に入港する外に、飄々乎として蘭印の海を周航する虎丸の存在がある。

虎丸

本船は噸數二百五十噸で、船籍をジャヴアに有する鹽原海運會社所屬の帆船だ。虎丸は船籍の關係上恐日熱の熾烈な蘭印の大海原を、威風堂々帆走し、海國日本のために活躍して、カー・ビー・エム汽船會社と鎬を削つて居る。

船長始め機關長、事務長は日本人で他は島民たちだ。であるから在留日本商店は勿論のこと、島民達までも、安價な運賃で生活必需品を供給してくれるので、虎丸の入港は、何時も大歡迎を受けて居る。それもその筈、虎丸が入港してから、出港する迄の期間、寄港地の積荷運賃や物價

まで下落するといふから、カー・ビー・エム汽船會社の强敵であることは、實に奇怪千萬な存在だ。

チモール島のクーパンに四、五年前に此の虎丸が日貨を滿載して入港した事があるさうだが、其時、瞬く間にその本品を賣切つて仕舞ひ、カー・ビー・エム汽船を顏色なからしめたことがある。同會社は到底虎丸と張合ふ事が出來ず、數千盾を鹽野海運會社に貢いで再來を見合せる事に叩頭歎願したらしい。それで其後、今日まで虎丸の姿は此のクーパンの港外には見えなくなつたと某氏から聞かされた時、愉快なる哉、虎丸の存在よ！　と叫ばずには居られなかつた。

氣　溫

本船の當港に碇泊中の氣溫は最高二八度五分で、最低二五度であつたことを附記して置く。

ドボに就いての記述はこの位で打ち切ることゝする。ドボではアンボン程に、碇泊期間も長くなかつたので、充分報道の資料を蒐集し得なかつたのを遺憾に思つて居る。

第三章　北濠ポート・ダーウイン

本船の後甲板でドボ在留の前記諸氏と共に「又會ふ日迄」と言ひ交して乾杯した後、抜錨したのは十月六日午前十一時五十八分。かくて先刻本船間近に投錨した和蘭軍艦ソェムバ號の左舷側を悠々と過ぎて、次の寄港豫定地なる北濠のポート・ダーウインに向け進航した。翌日は拂曉より本船のローリングは愈ゝ激しくなつた。傾斜計は十二度を示して居るからパラオ出港以來二度目の難航だ。左舷を强打する怒濤は飛沫を擧げて後甲板を横なぐりに、恰かもバケツの水を覆へす樣に侵入した。海面は物凄い程、紺碧に冴えて居た。

アラフラ海とバンダ海

快晴に明けた八日の午前八時、本船は既にアラフラ海を半ば近く過ぎて居た。このアラフラ海に就いて一言述べさせて頂きたい。地圖や海圖を一見しても隣接するバンダ海との限界がどうも判然しない樣に自分には思はれたから、調べた結果を序乍ら述べることゝする。アラフラ海とは印度洋の一部で濠洲の北部とパプア島、所謂、ニュー・ギニア島の間に横たはつて居つて馬來群

島の東端に當る海洋のことであり、バンダ海とは亞細亞海の南東部に位する馬來半島に横たはる中海洋であつて北はモルツカ群島、南は南西諸島、東は南東諸島、西はセレベス島のライウイ半島、ウェツクー島を結んだ一線に限られて居て、灣内を北東より南西に走るシボアバングの上に、二、三の小島が並ぶけれども、一般に深く四千米以上の海深を保つて居り、最深度は五千二百五十六米に及んで居ると記述してある。

ダイバー船

やがて本船の右舷の彼方に、船籍を蘭印に錄する眞珠採取船ワマール號が視野に入つた。この邊一圓は海面更に風浪なく、從つて船體の動搖も減じた。午前十一時頃、針路上に、船體を眞黑に塗つた外國のダイバー船（眞珠採取船）二艘が見えた。吾々は愈ゝアラフラ海の眞珠貝の漁場に入港したのだ。漁場とは言つても大洋の或る假想圈内の稱呼に過ぎないのだ。本船の四圍には數多のダイバー船が點在して居る。

聞くところによれば、この界隈で眞珠採取に從事して居るダイバー船は、其の當時、日本側約八十艘、外國側約三十艘とのことだ。

同日午前十一時頃、ダイバー船備付のボートにて來船された富美船長の談によると、この方面

は六月五日以降一度も降雨を見ないとのことだつたが、この異鄕の海洋に、しかも不順勝ちな天候と闘ひ乍ら、僅か二、三十噸の木造船に一蓮託生の決意を固めたダイバー船員たちが、堂々皇國男子の本領を發揮して居るその冲天の意氣には自ら頭が垂れた。中には僅か十五噸の小船で一路内地から當方面に遠征するものもあると聞いては、猶更吾々の想像も遠く及ばぬ壯絶な度胸には愕然たる欣びを禁じ得ない。この遠隔な海洋に勇躍する日本のダイバー船の數が、上記の如く斷然壓倒的であると聞いただけでも、海國日本の氣概が他者の追隨を許さぬことを雄辯に物語つて居るではないか。異國の海洋の隨所に翩翻と飜つて居る日章旗を仰ぎ見る時、私は目頭が熱くなる程感激せずには居られなかつた。

九日正午、私は本船の船長と同行、四名の船員が漕ぐボートに打ち乘つて眞珠採取作業に從事して居る富美丸を訪れて見學した。

灼熱そのものゝ樣な太陽の奔放な直射を受けて居る富美丸の後甲板から、二條の四百呎もある蜿蜒長蛇の樣なゴム管が波間に浮きつ沈みつ流されて居る。その先端はダイバーの潛水兒に取付けてあり、この管を通じて空氣が送入されるのだ。船上では一人の男が太さ一吋位の綱を持つて眞劍な面持で立つて居り、もう一人他の男が例のゴム管に愼重な注意を拂つて居る。船上からは長い綱の先端に鉛の重りの附いた鈎が時々海中に投ぜられる。その綱が船上に引上げられる度毎

に、眞珠貝が時には七、八個位、又時には一杯、太い紐で荒く編んだ箱の中に入つてくる。船上に引揚げられた貝を、軍手をはめ鉞を揮ふ一人の男が、素早く貝の緣を叩き切ると、次の男が貝をナイフでこじ明けて中實を取除く。そして手の空いたものが、時々海水で貝の內側や、甲板を洗ふのだ。この仕事が終つて次の籠が海中から揚がるまでの餘暇に、是等の男たちが太い糸の先端につけられた大きい釣針に貝の肉を刺して、海中に拋り込むと見る間に、一尺二、三寸の黑鯛の樣な魚や色々の魚が釣れる。これが食膳に供せられるのだ。やがて、海面の遠くから、段々近くに泡が立ち、繰り綱を持つた男(英名をその儘、テンダーと呼ぶ)が何か信號でもあつたのか、盛んに綱を手繰ること暫し。すると舷側に、怪異ないともグロテスクな潛水夫(英名をそのまゝ使つてダイバーと謂ふ)がポツカリ浮ぶ。綱繰りがダイバーを舷側の梯子のところまで手繰り寄せるや否や、船上の二人の男は夫々逸早くダイバーの兜を脫がせたり、背負つて居る鉛の重りを取除く。少し身體の自由を取戻したこのダイバーは床几の樣な椅子に潛水服を被たまゝドツカリ腰掛けて、火を點じて貰つた卷煙草を喫つたり、粥や魚や野菜の煮物で食事をとる。水を離れたダイバーは丸で王侯貴族の待遇を受けて居る。このダイバーは今迄、十五尋から二十尋の海底で荒い危險な仕事をして居たものとも思はれない從容たる態度を示して居た。潛水服を脫がず、僅かに手頸のところを分厚なゴム・バンドで止めた軍手を外した位だつたのは、離水直後、潛水服を

脫ぐと急激に外氣に觸れて、氣壓の異なる故であらう、急に氣分が惡くなるし、萬一その樣な時には再び海中に潛るとよくなるからだとのことだつた。所謂潛水病に罹らぬ爲らしい。離水してから小一時間も休息してから元通り身仕度を整へて貰つて、例の舷側の梯子のところからドブンと水煙を立てゝ海中に姿を沒して行つた。そしてこのダイバー船は、時々輕いエンジンの音を立てゝ位置を變へる。恁ういふことが日沒近くまで幾度となく繰返されるのだ。これが眞珠貝採取の狀況である。

次に、富美丸のビカー、老練なダイバー某氏との問答を左に揭げて、その生活の一面を御紹介しよう。

問「大分御元氣ですね、失禮ですがお幾つにおなりですか」

答「今年四十七歲です」

問「幾年位ダイバーをやつて居られますか」

答「もう十五年もやつて居ます」

問「もう海の中の仕事は何ともありませんでせうね」

答「この仕事にはすつかり馴れて居るし、覺悟はして居るから平氣ですよ。時には鄕里に殘して來た妻子のことも忘れて熱心に働いて居ることもあります。こんな具合ですから、陸地に着か

なくとも何等苦痛を覺えません。然し、同船者に怪我人とか病人の出來た場合は例外です」

問「潜水服は何時脱がれるのですか」

答「一日の仕事が終つた時です。脱ぐ時も一時間位かゝつて徐ろにとるのです——海中から出て來て、すぐ脱ぐと潜水病といふ病氣になるからです。未熟なダイバーは、この邊の心得がないので、この病氣に斃れるものは殆ど新人です。今年も既に他界したものは六人ですが、何れも新人ばかりでした」

問「恐ろしいこともありませうね」

答「鮫に襲はれるのが一番恐ろしいですよ、鮫がダイバーの周圍を旋回し出したら必ず喰ひつくに定まつて居る。だから、私はそんな場合には、直ちに空氣送入管を潜水服の兜からはづして、空氣を水中で放散させる。すると盛んに無數の泡が出るのです。その隙に自分は海底にドッカリ坐禪を組むのです。恁うして鮫が發泡に驚いて居る時に逃れるのです。ダイバーを通過して仕舞ふ鮫が引返して來て加害することはない樣です」

問「潜水服は相當重いので作業がしにくゝはないですか」

答「浮力のある海中でも、全く窮屈千萬です。それ故に潜水兜だけで働いた方が、どんなに自由で、働き易いか知れないと言つて、兜だけ被つて働いて居るものもあるとのことです」

問「外國人のダイバーの成績は如何ですか」

答「聞くところによると近年十五六人の外人が潜水夫となつて傭はれたさうですが、生活標準の高い彼奴等のことですから賃銀も高く、食料にも相當な經費が要るので、雇主側は雇ひ切れなくなつて居る上に、外人のダイバーは、仲々働かないさうです。ダイバー自身も要求は容れられたとしても肉體勞働に耐へ切れなくなつて、現在では全部廢業して仕舞つて居るさうです」

問「一體、採取高は一日幾噸位ですか」

答「平均何程とは言へませんが、成績のよい時には、五日間で十三噸も採取したことがあります。これは、昨年の好調期の話です。現在では一週間に、僅かに二噸位です」

問「採取作業中は海底で歩き廻つて、貝を一個所にでも拾ひ集めて置くのですか」

答「底流が強烈なために、摘草などする呑氣さとは譯が違ひますよ。丸で駈足でもやつて居る程です」

問「一日の作業時間と潜水時間は」

答「一日約七時間の作業です。そして潜水時間は、最高二時間ですが、私は最高一時間十五分です。しかし大抵の場合、一時間位です。勿論、貝の見當らない時は、それよりも早く見切りをつけて海面へ引返します」

問「一期の稼ぎ高は何程ですか」（註、一期といふのは、三月頃から十一月末まで）

答「約六千圓です。雇主の方は船の總取高の歩合か、又は一人の取分によつてダイバーの稼ぎ高を取定めて居ます」

問「採取と潮汐の關係は如何ですか」

答「干潮時の期間だけ採取して居ますから月に十五日間です。それは滿潮時には、底流の急激な爲に海水が汚濁し、作業が不可能です。その時は、正式の手續きを踏んで最寄りの寄港地へ入港して食料や飲用水の補給をしたり、然らざるものは陸地に近い領海外に碇泊して、次の干潮時になるのを、休養しながら待機して居ます」

問「濠洲の監視船の取締振りは如何ですか」

答「監視船は十五噸位、時速二十浬といふ快速なもので、今年六月頃から出現した樣です。吾々が萬一、領海内にでも作業して居るのを發見することがあつても、直接拿捕することなくして「沖へ出ろ」といふ合圖をする寛容な取締振りです」

これで、ダイバー達の生活が如何に果敢なものであり、且つ危險性に富んで居るかゞ察知されよう。

其日の夕方は赤道直下とは考へられぬ程涼しかつた。桃色の太陽が六時半頃、地平線下に沒した直後、影繪に描き出されたダイバー船が殘光を浴びて金波銀波の上に漂ふ情景は雄大だつた。

明くれば十月十日夜半の狼藉も何處へやら、海上は宛然油を流した樣に柔かだ。午前七時半ウラナカ漁場に入航。此處はポート・ダーウインから六、七十浬しか隔つて居ない。このウラナカ漁場とは日本人の名前に因んだもので、邦人ダイバー間の通稱らしく、英名ではない。八時頃から光進丸、大日本丸、生長丸等のダイバー船に會つた。各船がマストに日章旗を揭揚して吾々の乘込んだ瑞鳳丸に敬意を表してくれたときの歡喜は、この時この場所に居合せたものゝみが知る感激である。各船の船長はわざ〳〵本船に來訪されたので、交驩の機會に惠まれたと同時に、種種な感懷を謹聽した。

濃い桃色の夕陽が沒して夜の幕が下ると、本船の周圍に、五尺位の海蛇が澤山泳ぎ廻つて居るのが見えた。聞くところによると、海蛇の頭が菱形になつて居るものは有毒で、昨年も咬まれて死んだものがあつたさうだが、其他のものは無毒だとのことだ。然し見たところ、餘りいゝ氣持のするものではないが、艦内へ這ひ込まぬと聞いて一安心した。船員がこの海蛇を一匹捕へて見ると、外皮は分厚で、白地に薄黑の斑紋が美しい。身體は陸に見る蛇の樣に丸くなく、腹部が魚の樣に扁平で、泳ぐに都合のよい樣に出來て居る。

ポート・ダーウイン

十一日午後四時、本船から約二十浬隔つて居るチャーレス岬の高さ百二十呎の燈臺が見えて來た。燈火は十五秒毎に明滅して居る。眞晝は流石に灼熱の暑さであつて、熱帶圏内にあることを多分に意識した。船中を歩き廻つて少しでも涼しい個所を探したものだが、夕刻から涼風は寧ろ強い位に吹いて來たので、蘇生の思ひをした。純熱帶地の夕方から夜にかけての空氣の乾燥した涼しさは、本當に體驗したものゝみが知る快味だ。七時頃餘りの心地よさに陶然としてデッキ・チェヤーに凭り掛り、シャツとズボンのまゝで寢入つて仕舞つた。

翌朝八時半（時刻はドボより更に一時間遲い）本船は右舷にチャーレス岬を二、三浬の彼方に見てポート・ダーウインに向つた。チャーレス岬は見渡す限り低地の延長で、丘陵らしきものさへなく、波打際までゴムの木、竹及びマングローブが繁茂して居り、所々に奥深い入江がある。航すること約三十分にして左舷に百度以上の隆起のないリー岬を見た。やがて二本の煙突の側に宏大な工場らしい建物が見えた。この煙突は航海者達にとつて好個の標識ださうだ。聞くところによると、この大工場は歐洲大戰當時、或る米國人が經營して居つた製肉工場であつたさうだが、休戰以來、今日もなほ閉鎖されて居り、現在では、西濠ウインダムにある工場が之れに代つて、

肉類の罐詰を製造して居るとのことだつた。十時半本船の速力を半減して進航すれば、右舷に燈臺があり、更に前進すれば高さ七十二呎のフォート・ヒルが眼前に展開した。之を遠廻りに廻つて、ポート・ダーウインに入港した。時、正に十一時。三百ヤード先きに延長五百六十呎、水面よりの高さ六十呎もある木造の棧橋があり、其處に濠洲郵船會社所屬のコーリンダ號（四、三七二噸）が繫留されて居た。

北濠地方（ノーザン・テレトリー）

ポート・ダーウインに就いて詳述する前に當地が位置する北濠地方のことを概述することは、この方面の文獻の少ない事實に徴して決して徒爾ではないと思ふ。さて北濠地方即ちノーザン・テレトリーはノース・オーストラリア（面積二八七、二二七方哩）とセントラル・オーストラリア（面積二三六、三九三方哩）より構成されて居り、其の全面積は五一三、六二〇方哩で東經一二九度から一三八度で、南緯一〇度四一分から三六度に至つて居る。聯邦政府は一九一一年一月一日に南濠洲から行政權を獲得。長官はダーウインに、副長官は南部のアリス・スプリングスに夫々駐在して南緯二〇度以南の區域の行政を掌つてゐる。一九三四年六月三十日現在に於けるこのノーザン・テレトリーの人口は五、〇四五であるが、土着の生粹な黑人（原名アブオリジナルと稱し

てゐる）の人口は含んでゐない。

産業としては穀物の種々なる特質を識別して栽培し得ない農業家達の無能と實驗の缺如に禍されて、農業界の發展は振はず、辛うじて落花生が唯一の産物であつて、その産額は近年異常の增加を示してゐる。しかしてこれは南緯二〇度以北だけのことだ。同緯度以南の農業は、實際上問題にはならない。農地貸付は普通の地代で永代借地として許可されてゐるが、この貸付地は各二十年毎に再評價を受けなければならない規定になつて居るし、この土地は平易な、そして自由な條件に從ふ約束で、貸地契約の施行後隨時世襲財産とすることが出來るらしい。而してこの土地には大抵な熱帶産物を栽培することも出來るし、養豚とベーコンの製造が最も有望視されて居るとのことだ。安定な産業は牧畜で、南緯二〇度以北は家畜、その以南は主として馬、牛の飼養に好適である。然し乍ら鐵道の敷設を見るまでは南緯二〇度以北の牧畜業については、東部及び南部の濠洲市場が餘りに遠いので、殆ど進展なるものが期待されなかつたが、アデレイド（南濠）市場から前記アリス・スプリングスまで、近年漸く鐵道が延長したので、南緯以南の地方は一層好調を呈して來た。

このノーザン・テレトリー全體としては、適當な條件の下に養牛産業を有利に經營することが出來る。そして、更に、斯業に利用すべき尨大なる地域が放置されてゐる。クイーンスランド州

の境界線から西濠の境界線に至る距離六百哩の間には、牧草や牧畜上飼料となる灌木の繁茂する數千方哩の曠野がある。

最近、金の値上げに伴ひ、金採掘熱を刺戟し、最近二年内に未知の金鑛が上記セントラル・オーストラリアに發見された。他の鑛物としては、ウルフラム（タングステン）とタンタライトを指摘することが出來る。

鐵道はダーウインより此の北濠地方のバーダムまで三百十五哩延長し、且又アリス・スプリングスは現在鐵路によつてアデレイドと連絡してゐる。

ダーウインは最高潮の海面より八十呎の高度を保つてポート・ダーウインを俯瞰して居るし、アリス・スプリングスはマツクドンネル連峰中に位置してをつて、絶好の氣候に惠まれて居る。

ダーウインの位置

ポート・ダーウインは上掲のドボから約五百九十哩隔つてをり、北濠地方（ノーザン・テレトリー）の首邑で、曾てはポート・オブ・パーマーストンと呼ばれたこともある。當港の位置をもつと正確に言ふならば、南緯一二度二八分、東經一三〇度五一分で、高さ約六十呎に位するイメリー岬の東南に當る高臺である。

沿岸地方には品質良好な眞珠及び眞珠貝の採取が行はれ、又素晴らしい鑛物の資源がある。現に採鑛業は進展の途上にあり、殊に金、錫及び最も優良なる雲母は特筆すべき產物である。

官憲の取締

午後一時頃、檢疫官エッチ・エル・カルザース氏と在勤海軍武官エー・イー・フアラー少佐が汽艇で來船された。本船のサルーンに招じて入港手續きに要する書類を提示すると同時に、本船の來航に就き正式の通知があつたかを尋ねると、濠洲政廳より本船が八日頃入港する旨の通知があつたが、一向に消息が知れないので案じて居たと言はれ、本船に對し帝國軍艦としての便宜を供與すると聞いたので、之れに對し衷心より感謝の意を表した。そして、フ少佐はこの附近の潮流は最高潮時に於て五ノット以上に達し、低潮時でさへ二ノット半位だから、棧橋に繫船するのは相當至難であるからと言つて、自ら上部船橋に立つて水先案内の役をつとめてくれたり、潮汐干滿の差は二十四、五呎だから、繫船中不斷の注意を要すると警告されたり、本船は何時までも碇泊しても差支へない、滯留期間は問題でないと言はれ、且又最近七ケ月間は一滴の降雨もないので、水飢饉だから、假令濠洲に船籍を有する商船にさへ、給水する事は出來ないが、二十噸位なら何とか便宜を計らうときまで言つて厚意を披瀝された。そして吾々が當地に滯在中、至れり盡せりの

配慮には、一同深き感激を覺えた。そしてフ少佐は吾々と舊知の友の如く歡談すること時餘にして退船された。

氣候

本船が入港した當時は丁度降雨期への變り目であつた。前記の通り、過去七ケ月間も降雨が無いために、この地方の家畜は數百頭も死んださうだ。乾燥期に於ては、五ケ月目位で降雨に惠まれれば幸の方だと聞いては驚かざるを得ない。一ケ年の降雨量は六十吋だ。そして一月中だけで十五吋も降るさうだから、如何に乾燥するかは想像に難くない。英國版の水路誌の中には、凉しい微風が年中絶えること無く吹き、此町は可成健康地だと書いてあるが、それは僅かに朝夕だけの事で、日中には微風などは藥にしたくも吹いて來ない。焦げつく樣な暑さと赭土から舞上る砂塵には全く閉口した。

地下二呎の地熱が華氏九十度と聞いただけでも、目が眩む樣だ。

ダーウインの概觀

午後四時、吾々便乘者三名は、本船まで出迎へられた日本人會々長岡田岩吉氏の案内で上陸す

ることになつた。上陸といつても、讀者諸君が想像されるやうに、船から一歩降りれば、容易に棧橋を踏めるのでもなければ、又横濱港の様にタラップが船と棧橋を連絡するのでもない。いざ上陸する段になつて見ると、棧橋を組立てゝ居る直徑二呎もある硬木の杭が、眼前に林立して居るだけに、棧橋の表面は本船の甲板から二十呎も高いところにあるのだ。だから棧橋を踏むまでには、數ケ所に海面に垂直に取付けられた、幅二呎位の鐵製の梯子を、恰度火見櫓に攀登る様に、登らなければならないのだ。

其時はまだ潮が引き始めた時だから、その位登ればいゝのだが、最低潮時になると、この危險千萬な鐵梯子を三十呎も登らなければならない。晝の中なら兎も角、暗夜などと來たら、棧橋に這ひ上つたり、船に這ひ下りたりする度毎に、ホツト一息するといふ有様、鐵梯子も鹽水につかつたり、鹽風に曝されて居るから、眞赤に錆びついて居るので、洗濯したばかりの白服など著て居たら、たまつたものでないし、身體一つの操縦が漸くなんだから、手荷物などは持つたまゝ登れたものでなく、荷物は棧橋へ上つてから紐で吊上げるといふ始末だ。ましてや酔拂つてなど歸つたら、それこそ危險千萬だが、よくしたもので、降口に立つだけで折角の酔ひも忽ち醒めて仕舞ふから心配はない。しかしこれが唯一の上陸手段ではないのだ。本船の舷側からモーター・ボートで、さしがね形の曲り角附近の梯段のある個所まで行くことは出來るが、それにはボート係が

二人位を要する位潮流が急激なのだ。前にも述べた様に最高五ノット位に達することがあるから油斷はならない。それ故に上述の様な危險だが簡單な方法によつて居たのだ。婦人や子供が居たら、こんな眞似は出來まい。私は遙々ダーウインまで來て怪我位なら兎も角、頭でも叩きつけて死んでたまるものかと、細心の注意を拂つて昇降したのである。イヤハヤ骨の折れること夥しい。

然し乍ら、潮が滿つるに從ひ本船が段々浮揚して、最高潮時になると、棧橋から直接本船の船橋のすぐ後ろに架けた平板を渡つて容易に昇降することが出來るのだから、最高潮時の頃合を見計つて上陸したり歸船したりすれば、危險千萬な眞似はせずともいゝのだが、いざ上陸といふ段になつて、都合のよい時刻迄漫然待つて居る譯にも行かなかつたから、吾々は幾度かこの危險な藝當を繰返したものだ。

この棧橋は本船の様な小さい船の爲に作られたものでないことは、言ふだけ野暮な話だが、しかし豫想外に大きいのには驚嘆した。諺に大は小を兼ねると言ふが、それにしても餘りに棧橋が大きいのか、將又本船が餘りに小さいのか知らないが、遠洋航海をするにはチト肩身が狹い感じがしないでもなかつた。

この最初の難關を通過して棧橋上の人となつた吾々は、幅員四間もある頑丈な分厚な板の上を五百五十呎も歩いて差し金型の曲り角まで來て直角に左折し、更に二百呎近くも歩いてストーク

ス・ヒルの麓まで來ると、こゝに日本會々員の一人、東氏が自働車の側で待つて居られた。それは自働車は棧橋の上をドライヴすることが出來ないからだ。この棧橋の袖から直角に曲つた可成り先きまで荷役用の鐵路が敷設してあり、十噸の移動起重機が一つと、外に數個の小型起重機の設備がある。そして前記の麓に牛や馬の圍ひがあり、それより棧橋の片側に沿うて太い硬木で横に仕切つた通路が、直角の曲り角まで續いて居るのは、牛や馬などを大量に輸出する爲の設備であることは贅言する迄もない。然し現在ではこの設備は使用されて居ないらしい。それから棧橋まで敷設してある鐵路の上を、時代物の樣な機關車が盛んに野牛の毛皮や眞珠貝の梱などを滿載した無蓋の貨車を牽いて居た。この鐵道はダーウインから南の方へ三百十六哩延びてバーダムに達して居るが、一週一回だけしか運轉して居ないのだ。

やがて車上の人となつた吾々一行は、この鐵道の倉庫を左に見て小坂を登ると、この附近に五千噸位入る重油タンクが約八個設置してあるのが眼を惹いた。前にも述べた通り半年以上も降雨に惠まれない爲に、赭土から舞上る砂塵は物凄い。しかし、久しく土に親しまなかつた吾々は地上にあるといふ感じだけで內心莞爾たるものがある。そして吾々が今立つて居るこの土地が南北の最大の長さ二千四百哩、東西二千哩の廣袤を有する濠洲大陸の一構成部分だと思ふと、十餘年前、在米當時滿喫した大陸の魅惑が甦つて來た。猫額大の南洋群島の一孤島に住む吾々にとつて

大陸といふ言葉だけで、色々の意味に於て深甚の關心を喚起すると共に、垂涎措く能はざらしめるに充分である。

吾々の自働車はダーウイン市內に入り、本通りのスミス街を元の本通りであつた支那人街に曲り、一路、カンタス民間飛行場に至り、之を一周した。此の飛行場の直徑は約一哩と言ふから相當廣大なるものだ。

定期航空便は四臺の飛行機が交互にやつて居て、此の飛行場には一週二回甲方面から來着し、乙方面に向つて出發してゐる。交通機關の完備してゐない大陸の旅行には缺く可からざる設備だと思つた。

前記飛行場から吾々はリー岬の見晴臺に到着した。此處には高さ二間半位の記念碑がある。之れに彫刻された文字を見ると、一九二〇年十二月十日にロス・スミス氏がヴィツカース・ヴィシー式の爆擊機を操縱して最初に飛來した記念に建立されたと書いてある。

此の附近に刑務所があるが、聞く所によると目下收容されて居る囚人は約六十名位で、主として土着の黑人であり、罪科は酒類や阿片の取締違反や、窃盜又は殺人犯であるとのことだ。

次に植物園を一巡したが、野生の樹木や畑があるだけで、吾々の期待はすつかり裏切られて失望して仕舞つた。それから日本人の墓地に詣でた。

此の墓地には白人の墓碑もあるが、黒人のものは全然ない。黒人の墓地は別にあるさうだ。數多の墓碑に刻まれた同胞の姓名をみつめたり、ナマコ採取者十五名の遭難記念碑の前に額く時、遠く離れたこの異郷で、他界された方々の勇壯果斷な奮闘振には、滿腔の敬意を表さざるを得なかつた。

斯くして吾々は再び本通りに引返し招ぜらるゝ儘に、ドン・ホテルに在勤武官フ少佐を訪れ、少佐の友人數名に紹介された上、ビールをお茶代りにして雜談する事時餘にして辭去した。

ダーウインは前述の如く、北濠（ノース・オーストラリア）の政廳の所在地であるが、一言を以て盡せば、新開地そのもので、實に雜駁な感じのする街で、一般人が想像してゐる樣な美觀は藥にしたくもない。實際に此の土地に足を印したことのない人達は、よく新聞や雜誌で報道されて居る文化と氣候とに惠まれた南濠のシドニーやメルボルンと、このダーウインと同一視してゐる樣に思はれるが、これは飛んだ認識不足だ。吾々がこの地で相知るを得た濠洲人から異口同音に「ダーウインによつて濠洲の文化を批判して貰つては困る。何とか都合して南濠を是非訪れて欲しい」と聞いた、と述べただけで大體御察しを願ひたい。

ダーウインの人口は一九三五年六月卅日現在の調査によると五、二七六人、其內、歐洲人が三、六八二、混血兒（白人と黑人との）が八六七、東洋人が六九七、其他が三〇である。在留邦人數は約百六十名であるが、永住者は僅かに二十四名で、其の中妻帶者は三人であつて、他は主としてダイバー船員たちである。

當地には日本人會なるものがあり、現在の會長岡田岩吉氏は前後二十年近くも濠洲に永住された方だが、遺憾乍ら、會館なるものゝ存在はない。

次に日本人の子弟の教育問題だが、上掲の通り妻帶者は三人であり、其內、二人は外國人を配偶者としてゐられるから、子弟の教育も左程指摘する價値はない。然し乍ら、外國に永住する方方にありがちな、國民教育を忽諸にする事のない樣にと、私は心の中で念じてゐた。

濠洲の對日觀

抑も有色人種と白色人種とが相容れぬことは、既往現在とも認められて居る。特に有色人種に屬する一民族が、嶄然群を拔いた場合、そこに他者の嫉妬猜疑心が勃然として起ることは歷史を繙けば直ぐに判ることだ。

既往に於て黃禍論とか白濠主義とかいふ排日感情が現はれたことは、その半面に於ての躍進日

本の颯爽たる姿を物語るものでなくて何であらう。

言ふ迄もなく、黄禍とは黄色人種、即ち日本人と支那人とが、白色人種の領土に移住することによつて發生する危險を指したもので、その危險とは兩人種間に存する生活標準の相違性と黄色人種の多産性とを指摘したものである。結局、黄色人種が四海に君臨するといふことは、既に一八九三年シー・エッチ・ピヤーソン氏が其の著書「國民生活とその性格」中に豫言したもので、曾ては前獨逸皇帝ウヰルヘルム第二世が頻りに提唱したことがあり、また、近年に於ては一九二一年より一九二二年に亙つてロンドン・タイムス紙の社長故ノースクリツク子爵が世界周遊の砌、濠洲に向つて斯論を高唱したものである。

次に白濠主義であるが、これは一九〇二年、濠洲聯邦議會が關税法を制定しようとした時、自由黨の首領アルフレッド・デイキン氏は「白濠主義とは外國の安價な勞働の侵入に對する保護政策である。從つて好ましからざる外國人勞働者の生産品を輸入することも亦、外國人の移住と共に排斥すべきである」と述べたことに生起したもので、これまさに第二十世紀に於ける濠洲の態度を明示するもので、これこそ、また濠洲聯邦憲法の求める中心點である。

さて近年太平洋問題といふのが盛んに討議され、且つ檢討されて居る。「濠洲の見解ではこの太平洋問題とは太平洋の波浪が岸を洗ふ諸國の經濟的及び生物學的必要と政治的熱望との融和を標

榜して、この海洋の廣大な範圍内の和平を維持することである」と昨年初夏頃、英紙グラスゴー・ヘラルド紙は太平洋問題と題する論文を掲げて其の冒頭に述べてゐる。而してこの論文中、濠洲に關係を持つ部分を左に抄譯して見よう。

「問題としては支、露、日、佛、蘭、米、英及び印、それに新西蘭並びに濠洲等、多數の諸國の通商及び領土保全、換言すれば植民地の保有が擧げられて居る。太平洋に直接關心を持つ是等の諸國中、最も昭著な存在は日本であるといふことが、全問題に關聯した樞要な事實である。而してこの全問題とは、人口の激增と領土擴張熱とを打つて一丸となしたもので、さればこそ、北太平洋が直ちにこの問題の焦點となり、重要事項に就ての日本の政策がこの問題の鍵鑰となつて居るのである。

事實、濠洲が發見されて以來百五十年間、南太平洋は戰鬪的紛爭には比較的に捲込まれなかつたから、濠洲の官民が、本當に太平洋問題の實在なるものを意識したのは、極めて最近のことである。もつとハツキリ言ふならば、日露戰爭中の短期間を除いては、極めて最近まで、濠洲の人民には一般に本國が太平洋上の紛爭に捲込まれる虞れが些少でもあり得ようなどとは考へられなかつたのである。

濠洲人がこの樣に覺醒したのは、顯著なる事件の數々があつたからである。第一に日本の躍進

に押され氣味な支那の悲運を見て、識見ある濠洲人たちは、主として、(一)九ケ國條約が滿洲に於ける支那の權益を保全し得なかつたこと、(二)國際聯盟はこの支那の權益を回收せんと企圖したリツトン調査團の報告が無效であつたことから、豫備知識を蓄へる樣になつたのである。

もつと深い印象を與へたのは、日本が聯盟を脱退したこと、それにも拘はらず、日本がマーシヤル、カロリン及びマリアナ各群島の委任統治權を留保した事である。これに次いで日本は近々(註、一九三六年末)華府海軍條約が滿了する事態に鑑みて、最大限度の戰艦比率の獲得を主張してゐる。次に折も折、日本の外務當局の代辯者(註、天羽情報部長)は一九三五年に「將來、日本は單獨に支那と折衝する事を提言し、列國の干涉を歡迎しないであらう」と特筆すべき發表をしたのである。支那に對するモンロー主義めいた確言は、濠洲人にとつては極めて衝動的な事象であつて、其の意義は去る五月十二日の議會で動議された豫算中に包含されて居る日本海軍力を、戰艦の數に於てゞなくとも、太平洋に浮ぶ最强國に比肩するための提案に徵して見ても輕減されて居ないのである(中略)

「擴張政策」の意味を極めて的確に表現した如上の例證は、當然濠洲の如き國の注意を喚起するものである。濠洲にとつては太平洋の波が岸を洗ふ他の英國の領域と同樣、海外貿易航路、特に英國にとつて其の航路保全は先づ死活問題程の重要性を帶びて居ると言つていゝ。同時に若し日

本がロシアの提唱した不可侵條約を受諾したならば、太平洋に平和の殿堂を築く礎石を實質的に鞏化する事になるであらうと當地(註、英國)では考察して居る。

是等國際的重要性を持つ個々の事由は濠洲人の思考に働きかけ、太平洋問題に善處する對策を練らせる事となつたのである。加之、是等の事象は何れも日本の經濟、その政治機構、政綱及び熱望に對する關心と研究熱とを促進したのであるが、太平洋問題は日本の擴張政策を支援する無双の三拍手たる陸海軍、農民、勞働大衆を理解せずして會得することは不可能である。(中略)

「濠洲」は日本の實質的な商業及び工業團體を熟知して居るけれども、通商による以外の擴張には不贊成である。

加之、濠洲の人口の九割五分を占むるものゝ精神は熱烈なる英國人氣質で、英國のために濠洲を確保せん事を要望して居る。他方、又白濠主義を振り翳して英國及び英本國の他の分子との間に生ずる尖鋭なる人種問題を回避するにつとめて居る。從つて、濠洲政府がこの昭著なる問題について、濠洲の政策と英本國のそれとを調和する爲にこれまでに敢行したかも知れず、將又今後、斷行するかも知れぬところの如何なる行動に對しても、牢固たる支持者が現在あり、又將來もあるであらう。畢竟するに、濠洲の政策は左記の二大要綱を內包してゐると略言する事が出來る。

一、就中、通商が平和の促進に資する有益なる勢力を使用するとの見解を以て太平洋關係列國、

特に極東諸國との通商を擴充する事。

二、無防備の狀態が侵略を誘起する事なからしむる爲に、濠洲の國防の增强を計ること。此の政策を達成するために、濠洲政府は一九三六年度に全額千萬磅を投じて軍備と三部門卽ち陸、海、空の兵員を擴充增加する三ケ年計畫を編成せんとしてゐる。この計畫が巡洋艦の建造を包含してゐる以上、濠洲政府がシンガポール根據地の補强に要する英國の豫算をこれだけ（註、巡洋艦の建造費のこと）輕減してゐることに徵しても、濠洲政府のシンガポール根據地に關心を持つてゐる事が判る。

三、理解を深め、紛糾を除くために、太平洋關係列國との協調と修好を助長すること。

是等の政綱を實際の政策に具現するために既に多大の努力が注がれてゐる。假令、濠洲の勞働黨は未だ大體に於て國際問題に就いての正式な政策の持合せはないけれども、政府が急激に變革しても、上揭の三大政綱に現はれた態度の歷然たる基礎がなくなる事はあり得ない」と。

上揭の論調を熟讀玩味すれば、濠洲の對日政策を諒解することが出來るが、更に、之れを裏書するために、ダーウインに滯在中、偶然にも濠洲人某氏と相知る事を得たので、一夜同氏と深更まで語り合つた所產の概要を報道して見よう。

「濠洲の總人口、六百萬の內、七割八分のものは濠洲で呱々の聲を擧げたものだ。そして彼等は今

から百五十年前に英國から移住した軍人や流謫された囚人たちを祖先に持つて居るのだから、その血統を引いただけに、幾分腕力によらなければ理論だけでは是非を說得することが出來ない性癖のあることは否めぬ事實だ。私も勿論、同じ血統の子孫ではあるが、種々な環境に生きて見た私はさうした個性が結局、吾々の祖國、濠洲自體のために歎かはしい結果を誘致することを慮つて、濠洲人民の蒙を啓いて善導するために、挺身これつとめたものだが、英本國の資本的重壓下に身の自由を束縛されて居る濠洲の指導者たちは、背に腹は代へられぬ譬の通り、不本意乍らも、英國の重壓に服從しなければならない境遇にあるのだ。既往、印度を征服した英本國は、更に支那大陸を領有した後、更に日本をも克服せんと虎視耽々たる有樣だ。これは賢者識者の眼から看れば、愚の骨頂だが、英國の宿望であるから已むを得ない。英國は國策遂行の必要上、吾々濠洲人に向つて日本を嫌へと敎へて居るが、この北濠地方の人民は如何なる奇緣か、久しい以前から來訪のダイバー船乘組員たちを通じて、日本人の精神を識り、延いては日本を理解する幾多の機會に惠まれて居る。

日本の將來の活躍すべき天地にシベリアあり、支那あり、且つは馬來群島があることを知つて居る。現に、私の老母は西濠の大海で、眞珠採取に從事するダイバー船員たちの眞劍な奮鬪振を、日頃見て居たので、私の幼少の頃、日本漁船のダイバー達は軍艦乘組の水兵たちが奮戰して居る

時の様に、身を鴻毛の輕きにおいて、國家興隆のために粉骨碎心して居るのには感銘の外はない。將來、世界に覇を唱へるのは、必ず日本人だと私によく言ひ聞かせたものだ。私もまだ日本を訪れたことはないが、日本人のダイバーたちを通じ、また色々の機會に相識るを得た日本人達を通じて、日本を理解して居るつもりだ。繰返して言つて置くが、事實、濠洲人の中には、多分に日本を理解してむしろ好感を持つて居るものも居るが、英國の支配下にある濠洲としては英國の指揮命令に背馳することも出來ぬ境涯にあるのだ」と某氏は語つた。

恁う言つたところで、濠洲人民は皆が皆、抗日政策に同感であるといふのではなく、中には、高遠な識見を持つ爲政者も居ることは、決して見遁せぬ事實だ。猶又、個人對個人の場合では、排日的感情どころか、却つて親日的態度が多分に感受される。或ひは僭越な言ひ分かも知れないが私の所感としては、どうも同じ英國人でも、濠洲人と純粋の英國人とは何となく構成分子が異つて居るかに見える。第一に容貌、第二に氣性、第三に言語も夫々相違して居るからだ。第一の容貌は一寸筆舌には盡せないが、顏色といはうか、比較對照して見れば、そこに異つた個所がある。第二の氣性であるが、これは私が二、三年前英國に其人ありと知らるゝ著述家で、曾ては從軍記者として驍名を謳はれたフイリツプ・ギップス氏の著書「今になつて話せる」と題する歐洲大戰從軍記を讀んだことがあるが、其の中に英國人と濠洲人の國民性の相違がハツキリと窺はれた。

濠洲人は矢張り大國民のそれの様に襟度が廣く、剩へ、何處となくに慓悍な氣性の閃きがある様に思はれた。第三に言語であるが、同じ英語でも、幾分發音の相違する點があり、抑揚も英國人のそれの様に、尊大ぶつた嫌ひが微塵もないのは氣持がよかつた。

上述した様な境遇に支配さるゝ濠洲は、英本國の指金で、近年軍備といはうか、國防といはうか、兎に角、補强工作に寧日なき精進をして居ると聞いた。そして甲氏は私に向つて「特に最近日本船の入港する度數の增加するにつれて、重油タンクの數も、常備軍の人員も增加してる様だ。結局ダーウインを濠洲のシンガポールたらしめんとする計畫に外ならないのだ。現下、英國はソ聯邦を唆かして日本に挑戰せしめようと、その工作に浮身を窶して居るから、事態に好轉を見ぬ以上、今後五年内には第二次大戰が勃發するのではないかと杞憂して居る。勿論、英國と日本が交戰するのだ」と悲壯な面持で語つた。

又乙氏は「濠洲に在勤海軍武官事務所の創設されたのは僅か三年前で、現在のフ少佐の前任者はジヤレツト大佐であり、現檢疫官カルーザス氏の前任者はシー・イー・クツク醫官で、兩人は何れも排日家だつたし、黑人管理局に關係がある現鐵道局の支配人ケー・マツクナルド氏も亦、排日家だ。カンタス飛行場の十四哩彼方に軍事飛行場が增設されるとの噂があるが、目下のところはまだ着手する迄に至つて居ない。現在、重油タンク（五千トン入）は八ケ所にあるが、軍事用

として更に十個のタンクを増設する計畫もあり、更に、シンガポールに於ける如く、地下タンクを造るといふ計畫のある噂も聞いた。そして前記カンタス飛行場とても、民間經營とは表面だけで、實は半官半民の經營ださうだ」と語つた。

恁ういふ方面には至つて素人な私でも、其の土地を歩き廻つて、重油タンクのある附近が撮影禁止區域だと聞かされたり、陸軍駐屯軍が兵營建設の準備に精進して居るのを見たり、且又、南濠の政廳から土木の技師連が出張に及んで、道路鋪裝工事の監督に當つて居るのを目擊して見ると、前述の噂は滿更デマでもないらしいと思つた。

現に歐洲から濠洲への航空路はインペリアル・エーアウエー（英國系）でシンガポール迄、同地からダーウイン・カンタス・エーアウエー（濠洲系）で連絡を保つて居る。そして濠洲では海岸線に沿うて航空路が全土を完全に一周してゐるし、無電の設備は勿論あり、印度とジャヴアへは海底電線の敷設があり、蘭印のチモール島クーパンへは一週一回の定期飛行便がある。猶「太平洋諸島」と云ふシドニー發行の月刊誌十一月號によれば、近々ニユー・ギニアと濠洲間とに定期航空路が開通する運びに至つたらしい。

さて當地の軍備としては私の認知した限りに於て、陸軍駐屯軍があり、司令官が大佐である所から見ると、現在少くとも一箇聯隊位の兵力があるのではなからうかと思ふ。次に海軍力である

が、當港に軍艦が配置されてゐる譯ではなく、年に一度位來航する位ださうだ。尤も昭和十年（一九三五年）六、七月頃、五、六隻が軸艫相銜んで來港し、飛行機も八臺飛來したと云ふ事を聞いた。又、前記海軍武官事務所には二少佐と書記が一人勤務して居るだけだ。

そして民間飛行機を軍事飛行機に改造する事も出來る事から、これも海軍の重油タンクと同樣に軍備施設の一部と見られぬ事はない。

兎に角、當地がシンガポールと相呼應して英國及び其の屬領の防衛戰線を張るものと見られて居る。此の機會に、ダーウイン港と不可分の關係を保つシンガポール根據地に就いて昨年八月上旬の比島紙上に掲げられた記事を譯出して見よう。

英國が七千五百萬磅を投じて構築に着手した偉大なるシンガポール根據地は、今や英帝國防衛線上の有效なる戰鬪陣營の一つとなつた。濠洲と新西蘭を襲擊する日本を擊摧するを以て、その目的とする巨大なる城砦の主要部分は今月完成された。この城砦は建造者達の手を離れて英國海軍當局に引渡された。

この世界最强の海軍根據地に就いて、今後猶成すべき仕事を完了する迄には、向ふ一、二年の日子を要するであらうが、一旦緩急ある場合、現在の設備の儘で使用する事も出來る。

此の根據地の主たる目的は日本を「牽制された狀態」に置く事であるが、建造者達は極東に戰

爭の勃發する場合、英國は米國に對してこの根據の使用を許可するかも知れぬと信じられて居るから、この根據地は米國に保護を提供するものである。

この要塞の最重要部分には、海上三十浬沖合に於ける移動標的に命中し得る數門の十八吋砲が設備されて居ると。

日本に對する關心と認識

僅か二、三日間のダーウイン滯在中での、私一個人の所感を以て、凡ての濠洲人の日本に對する認識とか關心とかを律する事は勿論出來ないが、この遠隔の僻地に於ける住民の吾々一行に對する態度は、濠洲人の或部分の對日感を反映する片鱗とも見る事が出來ると思ふ。

某氏は言ふ「無論白濠主義は存在して居るが、親日的な濠洲人もゐる事は事實だ。そして、一九二九年頃に日本人の契約移民が來濠してをつた事を知つてゐるが、其頃數千人もをり、彼等の賃銀は僅かに月二磅だつた。西濠のブルームに於ける日本の移民總數は紀州の江住村全村の人口よりも多數だつたが、彼等は歐洲人たちのために、恰も黑人同樣に酷使されたものだ。彼等の中に罹病、入院する者があつても、人間らしい取扱ひは受けなかつたものだから、回復する可能性のある患者でも、可憐不治になるといふ悲慘な境涯だつた。

其の頃を回顧して見ると、現在濠洲人の日本人に對する態度が好轉したことは見遁せない事實だ。殊に、近年に於ては相當、日本の實在を認識して來た樣だ」と。現に、在勤武官のフ海軍少佐は昨年の夏パラオに寄港した海王丸がポート・ダーウインを出港してから一週間後に着任されたのであるが、フ少佐がシドニー在任當時、我が練習艦隊の軍艦淺間や八雲を迎へられ、司令官や幕僚たちと面識があることを述懷されて居たし、フ少佐の發意による案內で、ダーウイン駐屯の陸軍司令官々邸を訪れて來訪の挨拶を述べた時、司令官ホイツトル大佐はじめ幕僚と、ウイスキーやコーヒー、サンドウイツチの載せられた卓を圍んでの歡談中、少壯士官連は士官學校在學中、日本語を學んだといつて、十四、五册の難かしい教科書を携へて來て見せたり、變手古な日本語を操つての會話が始まつたものだ。聞く所に依ると士官學校では選科に、日本語講座を設けて居るが、年に希望者は二、三人は少くともあり、相當研究を積んだ者は日本へ實地研究に派遣される事になつてをり、事實數年前には留學してをつたものもあつたが、現在では一人もないとのことだつた。これも日本に對する關心の現れだ。

又、著述家のザビエル・ハーバート氏は恁う言つてをられた「私はシドニー大學やメルボルン大學に學んだもので、曾ては工業學校で化學講師を勤めた事がある。其の當時、卽ち一九二五年頃シドニー大學で囑託教授として東洋歷史を擔當してをられた貴族院議員を嚴父に持つ北小路幾

松氏を知つて居るし、又同大學にシドラー教授といふ東洋美術を擔當してをられた方とも交友がある。そして其の教授の夫人が日本人である事を覺えて居る」と。

このハーバート氏は、或る夜、自發的に本船を來訪されて、私と舊知の友のやうに、深更まで胸襟を開いて、心ゆくまで快談された。私はこのとき、深い印象を受け、寢床に入つて後も、猶萬感交〻去來して、容易に寢つかれなかつたほど心地よい昂奮に驅られたのである。

彼は一八九九年、西濠ポート・ヘツドリンドに生れ、久しい以前から、人類學に興味を持つ傍、濠洲文學の紹介に專念してをつたのである。彼は言ふのである「濠洲の文學は、未だ誕生して居ないのだ。私は一九三〇年に渡歐して、初めて自分の國籍を發見した次第だ。滯歐二年半、私は特に、英國に注意を拂つて來た。そして自己の存在と共に、濠洲の存在が、如何なるものであるかを發見する機會を得た次第である。私と同樣の考へを持つて居たものに、ピー・アール・スチーブンスといふ濠洲人がある。彼は滯英八年のうち、五箇年間セシル・ロード卿の奬學金で、オツクスフォード大學に修學し、學士號を得た男だ。彼は歸濠後、資金三十萬磅の後援を得て、シドニーにブルチン圖書出版會社を設立、自分は年酬一千磅で働くことになつたが、何分、株主連は、何れも南濠の人々で、教養乏しく、又思想も貧弱なために、彼等株主連の氣に入ることのみ書けばよいが、さもなければ之に反對するといふ有樣であつた。

それといふのは一五〇年前、濠洲に來た移民たちは軍人と囚人で、其他は少數の普通人であつたもので、その多くは英國人であつた。それ故、現在の濠洲人なるものは、是等の人々の子孫に外ならないので、この種の人々の多くは所謂「スリツプ・レール」である、「スリツプ・レール」といふのは垣の門の中央に、鍵のある戸扉のことで、横に引いて開けることは出來ないが、押せば開けられるのである。即ちこのやうな人達を說得させることは出來ぬから、力づくでやらなければ埒は明けない。是が濠洲聯邦の文學誕生時代の狀態であり、同聯邦の精神でもあつたのだ。當時、ヘンリー・ローソンといふ熱血文豪がをつたが、彼も亦、同樣悲憤慷慨してをられた。そして、四十年、叢林の中で、可憐、餓死されたほどだが、其後功績が認められたのであらう、現在、この文豪の銅像はシドニーに建立されて居る。

前記スチーブンス氏は資本家に迎合、その欲するところのみを執筆するを嫌ひ、遂に、ブルチン出版會社を辭して、自ら、スチーブンス國內書籍出版會社の設立を志したのである。時に、一九三三年であつた。斯くて、當時の有力者であつた牧畜業者や砂糖業者に向つて、資金の支出を勸誘したが、是亦、ス氏の原稿を嫌厭し、彼等の欲するところを書くやうにと主張したものだ。

上記の實狀が動機となつて、私は濠洲の實體を江湖に紹介するため「カプリコルニア」（CAPRI CORNIA）（註、書名）の執筆に着手したのである」と。

更に、ハ氏は語を次いで、この「カプリコルニア」の起原と内容を次のやうに說明された。

「地球上には、赤道に沿うて南北に回歸線が走つて居る。即ち之が「カプリコルン」である。濠洲はこの南回歸線によつて切斷されて居るといふことに暗示を得て、北濠洲の歷史と文學とを世界に紹介するために、私は前記「カプリコルニア」といふ假想の國を創造し、其の舞臺に、色々の人物を踊らせなのである。この原稿は二十五萬語から成つて居る。私はこれを執筆中、三十二時間ブツ通しに書き續けた後、十六時間、睡りつゞけたなどしたこともあつたのである。謂はば、私の心血を注いだ力作である。

私の使命は(一)「カプリコルニア」によつて、濠洲人に道義を敎へ込み、(二)日本國民の偉大さを紹介する書を著すことである。この第二の使命を果して、日濠友好の契を結ばせたい。(三)「眞個の聯邦政體」といふ尨大な書を刊行して、友誼を基礎とする眞正な國家の建設を提唱することである」と。(因に上記「カプリコルン」といふ書が一昨々年、即ち昭和十四年、シドニーと倫敦とで出版され、聯邦文藝賞二百五十磅が授與されたことを聞いた。私は著者ハーバート氏から、いろ〳〵圖書出版に至るまでの辛苦を聞かされて居るだけに、年來の宿望が達成した著者の歡喜はいかに大であつたらうと、衷心から慶祝した次第である。　昭和十五年十月、著者は私に同書を惠贈された。それには、「一九三六年、ボート・ダーウインに於ける愉快な交驩を記念し

て」と自署してあつた。そして、その書は細かい字で組まれた、五四九頁といふ尨大なものであることを附記して置く。)

加之、本船が碇泊中ダーウイン在住の濠洲人たちが交〻見學に來船して、漁業に關する質問をしたり、雜談に耽つたりしたものだ。又小舟を若い男に漕がせて來船されたピー・パンチ氏といふ老年の港灣測量官は「私は六ケ月間當地に滯在して港内を測量調査して居るのだ」といつて、掌大の精巧な六分儀を見せて船員たちに說明してくれたり、「私は三年前日本を訪問した事があるが、來年五月の英國皇帝戴冠式のある頃に歸英するが、其の途次日本を再訪するのを樂しんで居る」などと、親しく話しかけたものだ。

猶又、ダーウインの街を歩いて居ても、商店に買物に行つても、微笑を浮べて、隔意なく話しかけるものこそあれ、排日氣分などは微塵も認める事は出來なかつた。

吾々が在港中、一夕船上で「アツト・ホーム」を催したが、賓客側の顏觸はフ海軍少佐を筆頭に、ウエルス大審院判事、濠洲內務省の土木技師コヴレーと同建築技師ハスラム兩氏並びに「サン」紙記者フェリー氏等と菊池船長に吾々三人を加へた九人で、二時間餘に亘つて歡談、盛會であつた。これも矢張り、フ在勤武官の御高配によるものだが、吾々三名は一日前記土木、建築兩技師や新聞記者のドライヴする自動車でダーウインの郊外、十二哩の地點にある「蟻の塔」と稱

する名所に出かけた。

蟻の塔

途中は護謨の木や雑木が密生する荒涼たる曠野（濠洲では俗に藪と謂ふ）を横切つて十哩もドライヴすると廣漠たる平野が開けてゐる。此處には一見湖と見紛ふ礁湖があり、數千羽のペリカンが湖畔に群つて居たが、自動車の爆音に驚いてパッと一齊に飛び立つと、丸で煙幕を張つた樣に陽光を遮つた。更にドライヴすると目的地の「蟻の塔」と稱する廣場に到着した。

見渡す限りの曠原には高さ五尺位から丈餘に達する、丸で墓石を羅列した樣な扁平な白蟻の塔が無數にある。此の蟻の塔の兩面は必ず東西に向いてをるから、實に整然たる排列だ。聞く所に依れば陽光が午前中片面を照して居る時、蟻は他の片面を築いてをり、太陽が西に廻ると、東側の面を築いて居る。そして午前中に築いて居つた西側の面には陽が射してこれを乾燥する、といふ具合になつてゐるさうだ。

實に壯大な奇觀である。道すがらの路傍にも所々に蟻の塔を見受けたが、これ程大きくもなく又、これ程多數のものが集結してもゐなかつた。

案内者たちは吾々の逗留を一日延ばして、一夜、上記の礁湖に狩獵することを勸めたが、旅程

の都合もあるので、遺憾乍ら、折角の厚意を辭退しなければならなかつた。

眞珠採取業

このダーウインにキヤプテン・エー・シー・グレゴリーといつて眞珠採取販賣業を手廣く經營して居る年齢五十四、五歳の長身な親分肌な濠洲人の存在は特筆しなければならない。同氏の稱號キヤプテンなるものは歐洲大戰に從軍した時、陸軍大尉であつたものらしい。北濠一圓の斯界では相當著名な人物で、現在でも當地とブールム近海にダイバー船七艘も所有し、日本人のダイバーを三十人も使用して居られて、歐米の市場で相當の取引をして居られる關係上、一再ならず日本へも渡來された位で、日本人のよき理解者であり、同情者でもあつて、アラフラ海や濠洲近海で漁業に從事して居る日本のダイバー船乘組員たちは尠からざる恩惠に浴して居る。現に、豐田丸がダーウインに入港することになつた時に、法規の定むる前寄港地の出港許可證の提示を特に免除して貰ひ、圖南丸の船員の轉船が拒否された場合、同地官憲の特許を得て貰つた上、濠洲通貨の所持なきため、一噸乃至二噸の眞珠貝を買上げて淡水、重油、食料の購入、機關の修理に要する費用を用立てたりしたのも、このグレゴリー氏の懇篤な溫情の現れだつた。

本船がダーウインに入港した十月十二日の夜、吾々一行が映畫館で久し振りで本場のトーキー

を觀賞して居た時、このグレゴリー氏が吾々に刺を通ぜられたのだ。私が本人に會つて見ると、性急な態度で「實は倫敦から至急電報を受けたので船長に面談したいことがある」といふ、生憎菊池船長は歸船されて居つたので、同氏を本船まで案内することゝなつた。咫尺を辨ぜぬ眞暗闇に例の長い棧橋を渡るのだ。一歩踏み外したら最後、數十呎の海中に墜落しなければならない。それにこの附近には滿潮時になると、十呎から十二呎位の鮫が群つて居ると聞いて居るので、中中歩みははかどらない。生來はじめての無氣味な戰慄を覺えたものだ。漸く本船のところまで行つたが、前述の鐵梯子を二十呎も降りなければならない。幸、本船に辿りついて、船長にグ氏を紹介した。

グ氏の要談はざつと恁うなのだ。

グ氏は倫敦のロイド保險會社の當地代理業者で、本日本社からの至急電報に接したので突然來訪されたのだ。實は十月六日午前五時メルボルン發、夕刻當地着の上、チモール島クーパンに向つた英國のゼムビル卿所有の單葉機が途中針路を誤り、東經百二十二度四分北緯十三度三十六分の方位にある、セーリンガパタムといふ珊瑚礁に不時着した爲に機體を破損したのだ。乘組員四名はダーバンよりロンドンに向ふ英國汽船に救助されて無事歸英したが、その機體を救助し得る汽船は、この附近に皆目ないので、瑞鳳丸の來港を機に、之れが救助搭載の上都合のよき港に陸

揚して欲しい。報酬としては千磅位差上げられると思ふ、といふのだ。

この回答は明朝することゝして一旦別れたが、本船の幹部とも相談の結果、翌朝「人命救助ならば兎も角、機體だけの救助に本船の行動は變更出來ない。よしその珊瑚礁がブルームよりクーパンへの航路より約六十哩程しか隔つて居なくとも、本廳の命なき限り獨斷にて取計ひ兼ねるし、愈ゝ救助作業に着手するとしても本船にはそれだけの設備なき旨」を回答したところ、「願ひを聞いてくれるなら、南濠より專門の技師を飛行機で貴船の出港までに呼寄せる。若し出港後ならばブルームまで飛行機で派遣するから、同地から便乘させて欲しい、兎に角貴國の外務省にも報じ救助の手配を歎願する」と述べられた。結局、吾々が西濠のブルームを出帆する時までには何等の通知にも接しなかつた。

歸途についたグ氏と同行して再び市街に戻る途中、グ氏は「昨十一日午前十時に倫敦のリムブン飛行場を出發したジーン・バッテン嬢といふ芳紀二十四、五歳の女流飛行家が、單身にて一路當飛行場へ飛來された。所要時間は五日と廿一時間だつたさうだ。そして同日午後六時新西蘭に向け飛翔し、同地で數日休養の上、タスマニアに向ふ豫定ださうだ。倫敦ダーウイン間の單獨飛行は今回を以て嚆矢とする」と語られた。

眞珠採取業に就いて

猶、當地滯在中、吉田囑託と共に、グ氏を事務所に訪れて眞珠採取業に就いて時餘に亘る所感を聽取したので、左にその要領を掲げて見よう。

問「貴下は日本人ダイバーたちに對し種々御同情御支援下さると聞いて居る。之に對し、吾々は衷心より感謝する。さて最近、日本人のダイバー船が頗る增加して來たので、貴下の御商賣に多大の影響を與へて居ると思ふが、これに對する御意向を承りたい」

答「勿論影響は受けて居る。しかし日本人ダイバーは吾々濠洲人と同樣、公海で漁撈に從事する當然の權利を持つて居るのだから、如何とも致し方がない」

問「貴下は何人位ダイバーを雇傭して居られるか」

答「現在三十人だ。其のうち二十九人は日本人で、一人だけ支那人を使つて居る。その理由は日本人のダイバー船が激增して來たので、優秀な日本人のダイバーを雇ふことが出來ないからだ」

問「ダイバー達は賭博をしたり、如何はしい女の問題を起したりして御迷惑を掛けて居ると聞いたが、若しも彼等が妻子を日本から呼寄せることが出來たなら、さうした問題は起らないと思

ふ。妻子を呼寄せることが出來ないといふことは、人道に悖ることではなからうか」

答「御尤もだ。しかし法の定めがあるから已むを得ない。雇主の立場にして見ると、彼等が賭博をしたり女に金を費ふからこそ、危險な仕事をする氣にもなるといふものだ。私の使つて居る支那人は一晩で千磅も儲けたので直ぐ廢業した。だが、すぐ翌々日又、その千磅を負けて仕舞つたので、使つてくれと賴み込んで來たことがあるが、彼等たちの道樂は禁じない方がよいと、實は勝手乍ら思つて居る位だ」

問「眞珠貝の採取は濠洲と日本と互に協調してやつた方がよいと思ふ。日本側でもボートの數を制限してはどうかといふ說も擡頭して居るが、貴下はどう思はれるか」

答「日本側でボートの數を制限したところで、濠洲側が反對にボートの數を增加すれば、日本の不利になるのではないか。それには日本と濠洲とが、兩方から歩み寄らなければならないと思ふ」

問「實は先刻、協調といつたのは其のことを指すのだ」

答「兩方で規約に依る以外、效果は收められない」

問「濠洲側では日本のダイバー船の來航するのを好んでは居られまいと思ふが」

答「官憲に言はせれば、來て貰ひたくないだらう。しかし現に來て實在するものをどうすることも出來ないではないか」

問「日本人のダイバー船が、淡水、重油、食料を補給せんとする場合、若しくは病人の出來た場合に入港の手續があまりに面倒だ。恰かも、商船の入港手續きと同樣だ。提出書類のうちで、必要でないものを省略する事は出來ないものか」

答「自分は御說に同感だが、得て官憲といふものは世界中何處でも同じもので、さういふ面倒なそして不必要な書類に記入させることを欲して居るから、どうも致し方がない」

問「日本人のダイバー船の入港した場合、銀行での兩替が難かしいので、必要品の購入も出來ず困つて居る。何とかして貴下の方で貝を一噸なり二噸なり買つて頂けないものか」

答「自分はこれまで色々と日本人ダイバーたちのために助力し、骨も折つて居る。貝を買ふことにしてもよいが、自分のところだけに賣るのでなく、此處彼處と賣り廻られては困る」

問「眞珠貝の世界の需要高は現在どの位か」

答「それは貿易の消長に從ふ。目下は約二千噸位だ。景氣がよくなれば男子も多くシヤツを着るし、婦人も衣服を着るから、貝釦や貝の裝身具の需要が增加する譯だ」

問「今後とも何分、日本人ダイバー達の爲めに、宜敷御力添へを御願する」

答「何か困つたことがあれば、訪ねて來さへすれば、自分に出來るだけの便宜は惜しまぬつもりだ。貴國としても西濠の樣に名譽領事（註、ブルーム駐在の名譽領事はアーサー・メール氏である）を當地に駐在させる樣にしたらどうか。自分はよく歐米を旅行する、本年五月、紐育から歸途、日本へ立寄り、數週前歸濠したばかりだ。それから先夜、飛行機々體の救助の件につき電照したが、未だ何等の返事も接受して居ない」

ダーウイン駐在漁業監督官との問答

次に、ダーウイン駐在漁業監督官カール・ナイランダー氏との問答を揭げて參考に供しよう。

問「一般の漁業許可は如何なる方法でやつて居るや」

答「漁業を生業とする者に對し許可證發給の料金として五志（現時の換算率で邦貨三圓五十錢に當る）を外に、漁船使用許可證發給料金として、矢張、五志を納付せしめて居る。その有效期間は夫々六ケ月である。然し乍ら、生業に從事するものでなく、自分で船を所有して居ない、謂はゞ娯樂本位のものは許可證が不要で、勝手に漁獲することが出來る」

問「漁業規則書あらば頂きたい」

答「ダーウインに漁業を生業とするものは僅かに五、六人しかをらぬから、別に規則書の要求もあまりないので、現在手元に持合せはない。然し年でも改まつたら、カンベラの政府から取寄せよう。そして入手したら、在留日本人の村松氏の所へ屆けて置かう」

問「何故、大量的漁業に從事しないのか」

答「大量的に漁獲しても、販路はダーウインだけだから引合はぬ。何故ならば、大量生産をする段になると多數の漁夫を雇傭しなければならない。それには漁夫の勞銀が高い。又罐詰にするにしても熟練工の賃銀が高いし、罐詰を他州へ移出するにしても、當地があまり遠隔の地にあるので、運賃が高くなつて採算がとれない始末だからだ」

問「何か漁業の取締規定があるか」

答「魚を捕へるのにダイナマイトを使用する事は嚴禁されて居る。魚類の生きた儘を捕へるのは差支へないが、一旦殺してから捕へる事は禁止されてゐる。何故といふに、ダイナマイトをかけると必要以上の魚類が殺生されるからだ」

問「當地では漁業を產業としてはをらないか」

答「當地では產業として居ないが、クキーンスランドや西濠の方が盛んだ。それは需要がある、即ち販路が廣いからだ」

問「日本船が近年增加したので迷惑してはをらぬか」

答「日本の漁夫たちは、こちらの漁夫と同樣、公海で漁業に從事して居るので、それは公法の認める所で、正當の權利であるから如何とも致し難い」

問「監視船乘組員の日本船に對する取締振をダイバー船々長達から聽取したが、日本船が濠洲領海內で漁撈して居るのを發見すると、「領海外に出ろ」といふ合圖をして、直接拿捕拉致する樣な事はないさうだが、その寬大な措置には衷心より感謝して居る」

答「監視船と言はれたが、この汽艇はクキーンスランド州の國防局が四、五月以前に建造したもので（註、北濠の海事と教育はクキーンスランドの直轄下にあることを確聞した）、敢て日本漁船の監視專用に建造したのではなく、その主たる目的は民間飛行援護にあるのであつて、其他、長官の必要と認むる用件の發生した場合、種々なる方面に使用して居るのだ。最近、民間飛行が盛んになり、其他の用務が增加する傾向を確認したので、近々、他により大型の汽艇を建造する計畫もある。現在の汽艇は「ララツキア」號といつて、其の船長はチャーレス・ハウルテイン氏で、歐洲大戰中、獨逸艦隊の間を悠々として彷徨した勇士で、度胸のすわつた、公正な態度を執る紳士だから取締りも公明なのだ。

先般、この汽艇が日本のダイバー船をダーウインまで拿捕連行して來た事があるが、これはその船中に病人があつたのを發見したので、保護檢束をしたまでゝあり、一應取調べの上、何等處罰せずに、釋放したことをハツキリ覺えて居る。これ迄、吾々が日本ダイバー船を法規違反の下に處罰した例は一度もない」

問「今後とも何分、宜敷御願ひする」

答「出來るだけの事はしよう。今日はわざわざ訪問された事を感謝する。諸君の安全なる航海を祈つて居る」

尙、本船が北濠地方に航行及び碇泊中、上記汽艇「ララツキア」號を見る事は出來なかつたことは遺憾だつた。航行中出會ふことが出來たら、ホ船長にも會つて所感を質ふことも出來たものを。

前記漁業監督官カール・ナイランダー氏は、現在濠洲人であるが、日露戰爭當時、露國陸軍將校としてイルクツク駐在の情報部員だつたもので、其後來濠して歸化されたのである。同氏の忌憚なき所見といひ、前記キヤプテン・グレゴリー氏との問答に徵して見ても明かである如く、南溟遠隔なアラフラ海に雄飛する同胞ダイバー達に、深甚な理解と同情とが寄せられてゐるのが判る。彼等たちがこの同情と寛容な取締に馴れることのない樣に自重して欲しいと思つて居る。

前者、漁業監督官ナイランダー氏との會見談を裏書する爲に、昭和十一年八月三十日附の濠洲シドニー市の「デーリー・テレグラフ」紙に「病める眞珠採取業者（ダイバー）」と言ふ見出しで報道された記事を引照して見よう。

濠洲政府警備船「ララツキア」號は本日、日本人のダイバー船「ワマール」號を五名の乘組員と共にダーウインに連行した。此のダイバー船は黑人指定居留地バサースト島西岸に於けるロッキー・ポイント沖の三浬以內に投錨中、官憲の爲に發見されたものである。

此の「ララツキア」號の船長ホールティン氏は沿岸線を監視中、右のダイバー船を發見したのであつた。ホ船長が乘組員たちに、ダーウイン迄同行を求めた時、彼等は卽座に同意した。檢疫官カルーザース醫官（註、旣に前文に紹介して置いた）は乘組員が赤痢に罹つてをつたこと及びダイバー船內の飮用水が不潔であつたことを發見した。

ダイバー達も亦、彼等がバサースト島の遙か沖合で眞珠貝採取中、殘り一個の水槽中の飮用水が腐敗して居るのを見出したと說明した。

乘組員たちは全部罹病した。そして醫療を求めるべく、ダーウインに續航する前に、飮用水補給の爲、バサースト島沖合に假泊する事を決心したのだつた。全部求刑さるゝ模樣はない。

村松治郎氏との問答

次に永年西濠及び北濠に於ける實業界に飛躍されて居る唯一の歸化日本人で、斯界に相當の信望を集めて居り、ダ港日本人會のよき後援者である村松治郎氏との問答を掲げて北濠の事情を紹

介するに先立ち、同氏の略歴を述べて見る。

村松氏は静岡縣の産で、日清戰爭以前、幼兒の折、御尊父に伴はれて來濠、長ずるに及んで最初に西濠コサツクで雜貨商を經營さるゝ御尊父を助けて居られたが、一八九八年に歸化され、一九〇八年に現在の商賣に轉ぜられたのであつた。そして一九二〇年、二度目に歸朝されたことがあり、一九三〇年にコサツクより、當地ダーウインに轉入されて現在に及んで居る。

さて同氏との問答に移らう。

問「最初、來濠された當時の西濠の樣子は如何でしたか」

答「西濠キング・サウンド附近にあるダービーには人家が約百軒あつた位でした。ダイバー船もゝ、このダービーよりは以西で働いて居りました」

問「當地には排日的氣分はないですか」

答「別にそれらしいものを聞いた事がない。漁業監督官のナイランダー氏や私と同業のグレゴリー氏始め、郵便局長のウエスト氏夫妻などは其の意味に於て實に良き人達です」

問「日本のダイバー船が多くなるので、御商賣に打擊はないですか」

答「大してない。私は歸化人ではあるが、矢張り日本人ですからね」

問「白人側では日本船の增加に對して苦情は言つて居ませんか」

答「別に聞いた事はない。日本人のダイバー船の來航を妨止するなどの噂は單なる巷說で、公海に於ける行動を阻止すべき方法はない」

問「貴下は採取船を幾隻お持ちですか」

答「現在、コサツク（西濠）に四隻と當地に三隻です。ブルーム（西濠）方面に船を廻さないのは、昨年の成績で三隻で約百噸位でしたからです。」

問「貴下のダイバー船の乘組人員は」

答「一隻につき先づ八、九名です。」

問「生產過剩のため、値段の低下する虞れはないですか」

答「勿論ある。歐洲大戰勃發當時は最も高値を呼んで居た時代で、極上品になると一噸約二千六七百磅に達した事もある。勿論、世界の恐慌の波及によつて、需要が減少した事も一つの理由だが、現在では倫敦の相場で極上品一噸につき二十磅乃至三十磅です。」

問「先程コサツクにも船をお持ちと承つたが、コサツク方面とブルームやダーウイン方面で採れる貝に相違はありますか」

答「コサツク方面の貝は元々小さく、その一定の大きさより大きくならないし、ブルームやダーウインで採れるものに比して軟質です。」

問「濠洲では、採取してもよい眞珠貝の寸法は規定してあるか」

答「當地方では、貝の片側の蝶番になつた個所から緣まで三吋半以下のものゝ採取を禁止して居る。然し、濠洲全體に適用する一定の規定はなく、州によつて採取してもよい貝の大きさを夫々別個に規定して居る。」（註、採取の許可されて居る貝の大きさは各地官憲の任意に決定する事が出來るらしい。例へば、クキーンスランドの規則では大きさを內側の寸法五吋以上、外側の寸法を六吋半以上として規定してある。前記三吋半とあるは、安全な解釋として外側の寸法と見た方がいゝが、それではクキーンスランドの大きさと比較して見ると開きがあまりにも大きい樣に思はれる。尤も日本人ダイバー諸君は公海で働いてをるので、外國法規の拘束は全然受けて居ないから、此の貝の大きさに無關係のやうであるが、其の後入手した「南太平洋諸島月刊誌の記事には、近年日本人のダイバーたちは、貝の大きさに無頓着で、手當り次第、採取してゐるが、斯くては、如何に公海に於ける行爲とは言ひ乍ら、將來、眞珠貝の殖床を絕滅する事になるから、自ら墓穴を掘る類だと、非難してゐるのを讀んだ事がある。これは決して無視すべき問題ではないと愚考する次第である。

問「貴下は主としてどの方面に輸出されるか」

答「今年の春、米國と契約して、最近紐育に若干（註、特に明記せず）發送したが、これは上等

品と下等品とを取混ぜたもので、一噸八十乃至八十五磅でした」

問「世界市場の需要高は一年何噸位ですか」

答「眞珠貝と高瀨貝とで三千乃至四千噸でせう」

問「ダイバーとの契約年限や月給、利益の配當の具合は」

答「私の方は一年契約として居る。月給は三磅、利益の配當は三十噸未滿の收穫に對し月二十三磅を、三十噸以上には二十五磅の步合を、夫々與へて居る」

次に私を除いた人々の會話は眞珠貝の雜談に移り濠洲の黑人たちは、眞珠を銳利なナイフで削つて、その粉末を下熱藥として重寶し、又は切傷の妙藥として珍重して居るとか、某氏所持の最高價な眞珠は四グレーンのもので時價千磅のものだとか、羅馬法王が南十字星型の眞珠を寶藏して居られるが、これが世界で最も高價なものだとか、奈良の三日月堂の佛像に時價六十萬圓の眞珠がちりばめてあるとか、往昔の戰爭は眞珠獲得を目的としたものだとか、珍奇な話はそれからそれへと續いて行つた。

話題は漁業に轉じ、西濠シヤークス・ベー（註、これを邦譯すると鮫の灣といふから鮫が多いのであらう）の沖合は年々五月より十月までが漁獲期で、赤鯛が主なる漁獲ださうだ。一九二二年の調査に依れば、イタリー、ノルウエー、ギリシヤ、英國などの歐洲諸國及び濠洲の漁船が六

十艘も集結したさうだが、其中濠洲の船は僅かに一、二艘だけに過ぎなかつたさうだ。濠洲では如何に漁業を輕視してゐるかが推知されよう。西濠でも、一回の漁撈の收穫が三噸から五噸位あるが、これだけでは鐵道沿線だけでも不足を告げて居ると聞いては、人事乍ら齒痒くて堪らない。西濠の漁獲物はフリーマントルへ行かず、ジエラルトン廻しで陸揚し、冷藏貨車に積込んで配給して居る。この方面で活躍して居るのはギリシヤ人ださうだ。

序に前記、吾々とダーウイン官憲との「アツト・ホーム」の席上、偶々、漁業が話題に上つたから後れ馳せ乍ら玆に加筆することを許して頂き度い。

問「日本の共同漁業會社の漁撈船が一、二艘濠洲方面へ來て居るといふ噂を聞いたが、何處か、御存じないか。」

答「聞いて居る。カーペンタリア方面は成績不良なので現在、西濠方面に居るさうだから、多分當地とブルーム（西濠）の中間であらう。

問「濠洲に於ける漁業の將來性は」

答「濠洲では漁業に關する知識も體驗もなく、魚類の繁殖期も判らないから、漁撈期を制限することなく、年中、之れを許可して居つたが、これは非常な認識不足であることを意識し、近年から漸く、魚類についての研究に着手して居る。

北濠の漁業

ノーザン・テレトリーの漁業について前記漁業監督官ナイランダー氏が執筆した北濠行政年報中の一節を譯出して見よう。

眞珠及び眞珠貝採取に關する件。一九三四—三五年中、漁業許可證の發給を受けた二十八艘の中、二艘は同年中に斯業から撤去されたので、一九三五年六月三十日現在に於て、許可された漁船は二十六艘である。然しその中、四艘ジェー・ビー・カーペンター商會が本曜島からダーウインに廻航したもので、一九三五年六月下旬に許可證を下附されたのであるから、同年期中に眞珠貝の採取は五つの眞珠採取會社の運營する二十二艘に限られて居たことになる。一九三四年期中の眞珠貝採取高は四百七十四噸で、其の總額は大體、四萬三百磅であつた。一九三三年期中のそれは二百六十九噸であつた。一九三四年期中に採取高に二百〇五噸の增加を見たことは斯業が復活したことを指示して居る。

同年期の採取高は主として、パサースト島より五十浬北西の地點にある眞珠母貝の海床より剝取つたものであつた。貝は良質であり、倫敦の販賣報告に從へば、出荷は稍ゝ價格の上昇を收めた。この海床の中、淺い個所は稀有であると報道してあつた。それ故に、深海の潛水作業は一般

に必要であつた。眞珠採取業者たちの報告によればダーウイン、木曜島、日本及び蘭領東印度に船籍を有する約六十艘の漁船が上記の海床で漁撈に從事してをるとのことである。この地位は領海三浬外であるから漁業制限令を强制することは出來ない。一九三五年六月三十日現在に於ける契約による船員の總數は二百〇一名で、一九三四年六月三十日現在のそれに比すれば、七十七名の增加を示して居り、日本人勞働者は二十二名增加してゐ、蘭領東印度からは五名入國して居つた。同年契約による船員が檢疫規則違反の廉で處罰されたものが僅かに二名しかなかつたことは喜ぶべきことである。他の違反に對し處罰されたものは記錄されてない。

船體及び潛水具の檢査は規定通り施行された。普通の潛水具が今猶使用されて居たが、カーペンター商會は近き將來に新式の潛水具の特許品が製造される筈になつて居り、これによれば深海の潛水を安全ならしむるに至るであらうと發表した。この意味に於て、玆に報告する年度に於て眞珠採取船々員の間に全然事故がなかつたことは慶すべきである。

濠洲聯邦政府は眞珠採取業界に國庫の補助を與へることを認可したので、北濠地方(ノーザン・テレトリー)に於ける同業者全體に對する補助金は千磅である。

更に、斯業界を援助するために許可證發給に要する一年間の料金は一九三五年一月一日、船體に對し十磅より七磅十志に、眞珠及び眞珠貝賣買業者に對し二十五磅より十磅に値下げされた。

眞珠磨き業者に對する規定を設け、その許可證發給に要する料金を年三磅と定めた。然し乍ら同年中斯かる許可の申請者はなかつた。

漁業に關する件。漁業者に對する許可證八、漁船に對する許可證一が夫々同年中に發給された。魚類の供給は一磅につき六片(註、邦貨の約四十錢に當る)で、左程、よい魚類ではないが、市井の歡迎を受けて居る。

鮫の漁撈は需要なきため減退した。グローズ島附近のビー・エム・ミツチエルモーア氏經營にかゝる牡蠣養殖所より產出する食用牡蠣の產額は前年通り約二噸で價格七十五磅であつた。

海參漁業に關する件。海參漁業許可證八、漁船に對する許可證一が同年中に發給された。海參の輸出價格は關心を呼んで居ないけれども、本業に從事する人員の增加が記錄された。

製鹽業に關する件。ダーウイン製鹽工場の生產高は稍〻增加を示し、同年內の產額は二百八十噸で、噸當り七磅であり、昨年のそれは二百五十噸で、價格は同一であつた。

憂國の志士

曩に、紹介した著述家サミュエル・ハーバート氏に就いて、是非附言して置く必要を認める、といふのは同氏が非常な親日家であると同時に憂國の士であるからである。ダーウインの日本人

會の一會員となつて居られるほどの親日家である。日本人會に外國人が會員となつて居るのは異様に聞えもするが、それは入會して日本人たちと親交する機會を得るために外ならないのである。昨年夏、パラオを經由した海王丸が當港へ入港した時は、同氏の一方ならぬ御高配に預つたものである。他方、又祖國愛に燃ゆる憂國の士でもあることは、挺身以て「濠洲人のための濠洲」を建設することを宿望として居られるからである。

同氏は一八九九年に西濠のポート・ヘドリンドに生れ、人類學の蘊蓄が深い、一九三〇年に歐洲に渡り二ケ年半に亙つて人情風俗を研究されたことがある。吾々が當港に碇泊中、一夜、自發的に本船に吾々を來訪された折、南濠より當港へ單身徒歩旅行を企てられた時の所謂冒險談なるものを語つて聞かされた。これは濠洲の一部情勢を察知する好個の參考とも愚考したので其の話を玆に略述して見よう。

「私は十八歳のときから著述に興味を持ち、三十八歳の今日に至るまで筆によつて生活して居る。曾て私はシドニーから三千哩隔つて居る當地まで、十五ケ月間の徒歩旅行を企てたことがある。途中擦れ違ふ貨物列車に飛び移つたりしたものゝ、別に危險感に捉はれたことは一向なかつた。

時には沙漠地帶の木蔭で百二十度もある個所に、綿の様な疲勞し切つた身體を横たへたまゝ無意識に眠り續けたこともある。この沙漠地帶は文字通りの灼熱の暑さで、其處には毒蛇や猛獸は、

餘り熱さが甚だしいので棲息して居ないが、蠅の多いことは驚くの外はない。全身に眞黑にまつはりつくので、之れを追拂つて手を握ると、掌に一杯の蠅が捕れる程だから實に物凄い話だ。

渴を慰するに水なく、氣狂の様になつて探し廻つて、漸く溜り水を發見したが、餘程古いものと見えて臭氣鼻を衝く。この溜水を鼻をつまんで飲んだことがある。無我夢中とはこのことを言ふのであらう。

シドニーを發足したのは一九三四年の一月のことで、それより七百五十哩先きのブリスベーンまで汽車で行き、更に千二百哩奥地に入つて、チャラボといふ荒漠たる人跡稀なる未開地に到着、それからクロシカリを經て、なほ四百哩行つた先きのダービー・ウオータースに辿りついた時は既に半死半生の狀態で、骨と皮ばかりに痩せ衰へて昏倒したところを、定期航空便の飛行機に發見救助されてダーウインまで連れて來られたのだつた。當地に着いたのは翌年三月の末であつた。」

ハ氏はこれ程、一風變つた男であるが、曾て歐洲に遊んだ時、祖國を去つてはじめて眞個の濠洲の姿を看ることが出來たので、飜然、祖國愛に目覺め、同胞の反省と自覺を促すために努力した、憂國慨世の士であるが、現時の情勢下に於て同氏の宿望の達成を見るに至るべくもなく、獨り淋しく悶えて居る。私は最初、同氏の心境を解し得なかつたので「では外國に歸化でもされたらどうか」と尋ねたら、憤然として「自分は日本へでも行つて語學の講師として立派に生活する

だけの自信は充分にあるが、しかし濠洲を去るに忍び難い程に、祖國愛に燃えて居る」と言明された。はじめて彼の眞心を識ることが出來たので、私が餘りに輕率な質問を發したことを自責して居る。ハ氏と四時間近くも互に腹藏なき意見を交換したことを今なほ隨喜して居ると同時に、恁ういふ祖國愛に燃ゆる人物の高風に觸れる機會を得たことは大きい收穫の一つだつた。

重油船

瑞鳳丸がダーウイン港の棧橋に繫留されてから三日目の午後六時、後甲板に出て見ると遙か沖合に青筒汽船らしい船體が假泊して居た。曾て私は、青筒の汽船を九十九艘所有して世界の海運界に雄飛して居る英國汽船會社のことを聞いたことがあるが、既往の横濱波止場からこの青筒汽船を見、現在このポート・ダーウインで同じ青い煙突の船體を見て、この汽船會社の偉大なる飛躍振を成程と首肯したものだ。

午前八時頃小型の汽艇が本船の後甲板近くを通過する際「お早う」といふ聞き覺えのある聲がした。フト見れば、例のフ海軍少佐が右手を輕く擧げて居られ、その傍に、カ檢疫官も微笑して居る。「お早う」といふ挨拶は何でもないが挨拶をするもの、之れに應ずるものにとつて微笑ましい感觸を印するものである。まして、それが異鄕に於て相識つてから日なほ淺い外國人からの挨

拶たるに於てをや。この汽艇が前記の青筒汽船に到着した頃から暫らくして後、この汽船は徐々に棧橋に向つて動き出した。其の位置を變ると私が想像して居たものとは全然異つた船影なのだ。岡島技手と私は寫眞機を用意して本船の後甲板に身がまへ、徐航中の船體をパチリ、其の刹那被寫體の船體からメガホーンを通じて「カメラを引込めろ」と怒鳴られたが、もう後の祭だ。もうネガは出來上つた後だ。問題になつたら、ネガを任意提供すればいゝと覺悟して居た。吾々が最初入港した時、撮影禁止區域を尋ねたら、重油タンクの附近だけと聞いて居るのに、と不思議でならなかつた。かくてこの異樣な恰好の船が棧橋に繫留されて見ると、船首のところにワー・シルダーと銘が打つてあつた。

同日午前九時にフ少佐と會ふ約束があるので、其時、この船體撮影の件を自發的に打明けることに肚を決めた。

この外國船の繫船振りは實に鮮かなものだつた。稍ゝ暫くするとフ少佐はわざ〳〵本船に吾々を訪ねられたので、其時、この外國船は青筒汽船ではなく、濠洲海軍所屬のタンカー（重油船）でペルシャのアバディーンから重油を積込んで來たものであり「ワー・シルダー」の「ワー」とは戰爭のことで歐洲大戰中に建造したといふ意味であり「シルダー」とは印度の一種族に因んで命名されたので、他に「ワー、何々」といふ幾艘かの重油船のあることも聞いた。なほ、他の方

面から聽取したことだが、このタンカーは總噸數七千噸位で、重油を一萬五千噸位積込んで來たのださうだ。何しろ午前九時頃から午後三時頃まで、この船艙から一抱へもあらうと思はれるパイプを通じて電動力で吸上げて重油タンクに輸送して居た有樣を目のあたり見るに及んで、其の規模の大なるに喫驚せざるを得なかつた。

このタンカーが棧橋眞近に來た時は、恰度干潮時だつたので、推進機の廻轉のため泥がかきまぜられて海水が汚濁したことを見ても、此棧橋の外側の水深は餘り深くないことが窺はれる。色色と調べて見ると、一九三二年の調査によると水深十七呎（五米二）であり、內側のそれは一九三三年の調査によると二十四呎（七米三）であることが知れた。そして外側の棧橋の東側近くに綱で張つた朱塗の浮標があり、このタンカーも棧橋の外にこの浮標を使つて居たのは潮流が激しい故なのであらう。

愈〻このタンカーを撮影したことをフ少佐に打明け、お望みとあらばネガを提供する旨を申し出たところ「君達が撮影した時に被寫體はどの位の距離にあつたか」と尋ねられたので「餘り近いところではなかつた」と答へたところ、それなら差支へあるまいとて、幸に問題にならずに濟んだのもフ少佐のお蔭だつた。

これが他處であつたならば、吾々がこのタンカーを撮影したことは由々しい問題を惹起したに

違ひない。少くともネガは沒收されて、お目玉位は免れ難い。然し吾々にしたところで、海軍所屬のタンカーとは知らずに撮つたのだし、ネガの提供を自發的に申し出でたのだから、事穩便に濟んだのかも知れない。

生活の樣態

ポート・ダーウインに行つて見るまでは、地名の蠻音から來る感じだけで、繁華な街を想像して居たし、北濠の首邑であり、政廳の所在地であると讀んだり、棧橋には濠洲の超弩級の戰艦シドニー號やメルボルン號が同時に橫付けになつて居たなどと聞かされたりして、如何に大都會だらうと豫想して居たのである。ところが實際にその土地を訪れて見ると、曩にも記述した通り誠にお粗末な新開地で、街に電車があるではなし、高層建築も見當らない。運輸機關は全部自動車で、自動車の總數は僅かに七百臺で、タキシーが十臺だけ、自動車といつてもその過半數はトラック兼用の車體である。東京や橫濱に見る樣な高級車は吾々の逗留四日間中に殆ど見當らなかつた。そして車上の人々は、大部分作業服の姿だつた。市街のどの建物を見ても美しいといふ感じは起らなかつた。如何に最眞目に見ても新開地といふ氣分が濃厚だつた。文化生活では決してないなどと言ふだけ野暮である。ホテルが二つあるが、ホテルらしいホテルは唯一つ、他の一つは

言はば、貧弱なアパートといつた位のものだつた。

飲用水と食糧

さて食糧に就いてゞあるが、第一に生活上缺く可からざる飲用水の大部分は湧水であり、いつも清く澄んでは居ない。貯水タンクから棧橋までパイプが引いてあるから、船舶への補給は至極便利である。住宅の傍には、南洋群島のやうに天水タンクが必ず備へ付けてあるから、湧水があるのに何故かと、尋ねて見たところ、矢張り天水を吾々同様、重寶して居るといふことを聞いた。

食料品は豐富である。然し獸肉（一封度は邦貨で三十五錢）の外は多少高値だ。食料品の供給が潤澤と聞いて、私は當地の人々の安定した生活が羨しくてならなかつた。何故なら、吾々南洋群島の大部分の住民は内地に於けるが如く隨所に生活必需品の供給を受けることが不可能なので、内地よりの入港船を恰も寶船でも入港するかの様に待望して居る、憐れな境涯であり、飲用水に至つては少し日照りが續くと雨蛙の様に毎日空ばかり睨んで居る情ない生活狀態だからだ。

交通と生活費

然しダーウィンの交通は前にも述べた様に不便であり、且又一九三二年より一九三三年に至る

期間に當港に入港した船舶數は僅かに三三艘で、總噸數九二、六七〇噸であつたと言つたら、大體、その不便さ加減が察知されよう。斯様な次第であるから生活費は相當に高い。電氣は火力で電燈料は百二十ワットの使用料が月二磅といつたら先づ驚かざるを得まい。從つて勞銀も高い。一般外人勞働者の週給は五磅乃至六磅、そして普通人の一日の生活費は約十志（一シリングは邦貨約七十錢）だと聞いたら、これまた信じ難いやら、羨しいやらと言ふところであらう。

日本人の勞働者はダイバー達の外には居ない。そして在留邦人中このダイバー達を除いては全部五十歳以上のものばかりなのには、意外の感に打たれざるを得なかつた。何故といふに、それは一九〇二年二月四日に入國制限令が發布されたからで、以來契約移民以外には自由に入國することは罷りならぬからである。

新聞

次に當地には「ノーザン・スタンダート」といふ四ツ切大の十ページの新聞が週二回發行されて居るだけ。しかし各地からの普通大の新聞の入手は蘭印ほどに日數がかゝらないから、左程不自由も感ぜずに濟む。瑞鳳丸の來航について該新聞は十月十三日附の社説欄に恁う書いて居る。

「昨日カロリン群島から日本のスクーナー型汽船瑞鳳丸（百六十噸）が全乘組員二十四名をのせ

て來港した。本船は南洋廳が補助する漁業を北濠近海に確立するを目的として居るのである。この目的達成のためには斯業に關する既知件を多數蒐集且つ作表しなければならないが、これが日本人の得意とする愼重且つ周密な方法で、成し遂げられることは疑ふべくもない」と。

醫療施設

當地には官營のダーウイン病院があり、醫官二名、收容能力三五人であつて、他に癩病院がある。北濠地方（ノーサン・テレトリー）の一九三五—一九三六年度に於ける主たる病名と患者數を列記すれば緯度二十度の北に於て、脚氣一、デング一、赤痢一、丹毒二、胃腸病三、インフルエンザ一四、癩病二、マラリヤ一三、肺結核一の計三八であり、同緯度の南に於て、デング三、赤痢一、胃腸病五、インフルエンザ一の計一〇であつた。

然らば前記ダーウイン病院の經費はといふと、同年度に於て約五千七百磅で、癩病院のそれは約八百二十三磅であつた。

なほ當地方の同年內に於ける出生率は九十で、內、歐洲人五六、支那人一五、其他の亞細亞人二、混血兒一七であり、歐洲人出生率の一割九分に當る十一人は歐洲人と混血兒との間に生れたもので、混血兒中一割一分は歐洲人と黑人との間に、七割は混血兒と混血兒との間に生れたもの

である。同年度內に於ける死亡率は六十四で、內歐洲人四一、支那人一三、其他の亞細亞人五、混血兒五である、上述の事實から見ると、自然增加は歐洲人四二、混血兒一三、支那人三六で、混血兒の增加が素晴らしい。白人の死亡數中約二割五分に當るものは殺人と過失によるもので、支那人の死亡數の大部分は老年者達である。

教育施設

北濠地方には公立學校が七つあり、內、二つは混血兒の爲の學校である。全校の生徒は四四六で、歐洲人が一八一、支那人其他の亞細亞人が一〇八、混血兒が一五七である。

而してダーウインの學童全數は一六八で、歐洲人が九一、支那人、其他の亞細亞人が五三、混血兒が二四である。

特記すべきことは、遠隔の地に居住してゐて、每日通學し得ざる兒童のために官費で通信教授を行つて居り、其の程度は官立學校のそれと同じで決して劣つては居ないことである。本年度の出席率は一九三五年度に比して六名の增加で、實際に授業を受けた兒童數は昨年よりも十四名增加して居る。鑛業界が餘りに不安定な爲に、パイン・クリークに於ける學校の出席率は好轉を齎すに至つて居ないが、テンナント・クリーク地方では兒童數が激增したために、一校を設立する

の必要に迫られて居る。

なほ、小學校程度以上の教育を授けるために規定を設け、一人につき年約三百磅を奬學金として給與して居り、特定區域内に於ける兒童は志願して試驗に合格すればこの恩典に浴することが出來るのである。就學兒童に對する醫官の檢診の結果は滿足と見做すことが出來るが、多數の場合に於て齒科醫の施療を受くる必要のあることが勸告された。

クイーンスランドの學務部の檢査官が當地方の各學校の兒童を檢診した結果によると、學童の過半數が外國人の兒童なるがために、授業上、幾多の難事は今なほ回避すべくもないが、教育の高い基準は維持されて居るとのことであつた。

警察陣と行刑

當地の警察陣は白人の警察官が百八十名で治安維持の任に當つて居るが、近年人口の增加する傾向に伴ひ、犯罪も增加する氣配が多分にあるので、近く二百五十名に增員する計畫があると聞知した。

一九三四—三五年度内に於てダーウインの大審院の取扱つた事件は四、アリス・スプリングスのそれは三で、刑事々件は四〇であつた。そしてダーウインの地方裁判所の公判件數は一五六で

警察裁判所の取扱つた事件は前年度の三三四件に對し四一〇件であつた。

濠洲黑人（アブオリヂナルス）に就いて

北濠地方には一九三五年六月三十日現在で一八、二四四人の黑人及び黑人混血兒が居住して居る。其内、純粹な黑人數は一七、四二二で、混血兒數は八二二である。而してダーウインに於ける黑人の浮浪者は一、九二〇、定業者は六七八で、指定居留地で監督を受けて居るもの五九六、累計三、一九四である。

ダーウインには黑人保護係長、アリス・スプリングスには副係長が夫々駐任し、其の下に五名の係官が事務の補佐に當つて居る。

北濠地方に於てはカレドン灣とポート・キーツの黑人が殺人の廉で公判に附されたので、當地方の黑人居留地の取締及び施政問題が重大視されて居る。其後、國務大臣は特種の布教團に是等黑人種族のために布教地建設の許可を與へた。斯くして文化と接觸を保つべき新しい手段が彼等たちに提供されたことは言を俟たない。羅馬加特力教團はポート・キーツ地方を選定し布教地の建設に着手した。この擧は黑人たちの歡迎を受けて居ると報道されて居ると、この布教團の報告中に書いてある。メソヂスト布教團は布教地に相應しい敷地を發見するために、イースト・アル

ンヘイム・ランド沿岸の大部分を探檢した。更に中濠（セントラル・オーストラリア）のホイツスルダック・クリークに爾餘の教會が居留地として選定した地域があるが、この地方には殆ど黑人が定住して居ないので不適當と考慮されて居る。加之、國務大臣はアルンヘイム・ランドの黑人の犯罪再發を防止するために人類學者トムソン博士を招聘、彼をして野蠻人種と親交し、彼等の言語を修得して彼等に白人の法規の嚴守を教導し、彼等の保健狀態を報告し、且又一般人種學上の調査を行はしめて居る。

テンナント・クリーク（註、クリークとは入江のことである）で、金が發見されたためにワラムンガ指定居留地の境界線は全く變更して仕舞つたので、總督による新境界線の制定は一九三四年七月十二日の官報で公布されたとのことである。然しこの居留地よりも好適な敷地がマランボーイ地方にある旨勸告されたことがある。最近、飛行機の不時着陸地が、バサースト島の居留地に定められたので、其地方の黑人にしても飛行機の世話人として立働くものに食糧が配給されて居るとも聞いた。

この樣に北濠地方全體に於ける黑人指定居留地はアルンヘイム・ランドの三一、二〇〇平方哩を初めとして外に十八ケ所あるが、當地ダーウインの居留地は面積三十二英加である。そして布教地はハンヤー・マンスバーグに於ける九九五平方哩を筆頭に、六ケ所ある。もう一つのローバ

ー・リヴアーの布教地は借地權の所有なきもので、その面積は二三〇平方哩である。

行政廳で黑人が出入を嚴禁されて居る個所がある。それはグローヴ・ヒル附近のゴールデン・ダイク採鑛所に隣接する地域である。

北濠地方黑人醫療基金なるものがあり、ダーウインの雇主側は一九三六年度に約五三〇磅を寄附したので一九三五年六月三十日現在の基金總額は約九四二磅であつた。そして五名の醫官と一名の助手とが町村の中樞地點で黑人のために定期診斷を行つて居る。時には飛行機を利用して黑人の患者や負傷者を病院まで運搬して施療もして居る。

黑人の就職には許可證が必要であり、昨年度に於ては五四〇件の許可證が發給された。雇主と黑人若くは黑人混血兒との勞働契約數は一六〇件であつた。而して彼等を雇傭する場合、雇主は不斷の監督を必要とする規定があるにも拘らず、之れが遵守を怠つたもので許可證を取消されたものが四件あつた。

黑人の老廢者又は病弱者にして、十七ケ所の救護院で衣食の施與を受けて居るものが近年增加して居る。その顯著なのはアリス・スプリングスで、一昨年度の收容者は七十名であつたが、昨年度には一三〇名に激增した。

黑人問題についての經費は、ダーウイン政廳が昨年度に於て約二、八〇〇磅を支出し、約一、一

二〇磅を收入したから、純支出高は一、六八〇磅であり、南緯二十度以南のアリス・スプリングス政廳の全支出高は約三、〇〇〇磅であつた。

黑人の犯罪件數は一昨年度（一九三五年）に於て百三十七件であるが、その犯罪數を類別して見ることも滿更徒事ではあるまい。

卽ち暴行二二、公務執行妨害一、暴動的行爲九、不法なる所持一五、禁止地域侵入三七、火器の所持一、留置場よりの脫走一、故意による發砲四、殺人（故殺）三、暴行傷害二、泥醉五、飲酒二、麻藥所持一三、家宅闖入二、竊盜二、指定地域內に於ける格鬪一〇、指定居留地脫出二、不法なる銃器使用一、不法なる傷害三、誘拐一、街地漂浪一であつた。

一昨年（一九三五年）の犯罪件數に比すれば昨年度（一九三六年）に於ては三四件の減少があつた。

ダーウインに就いての見聞を基調としての記述は、大體これで擱筆することゝし、以下次の豫定寄港地である西濠のブルームに就いて報道させて頂かうと思ふ。

吾々の本船までわざ〳〵別れの挨拶に出向かれたフ少佐や日本人會長等と杯を擧げて、お互の多幸を祈り合つて別れた後、本船が拔錨、始動したのは十月十五日午後四時であつた。

氣溫

序午ら吾々がダーウインに逗留した四日間——十月十二日から十五日までの最高氣溫は攝氏三十二度で、最低氣溫は同廿七度だつたことを附記して置く。

第四章　西濠ブルーム

ブルーム港へ

翌朝八時四十五分本船が前記バサースト島より四浬半の沖合まで引返して投錨した時には、本船の周圍の遠近に何れも日章旗をマスト高くひるがへしたダイバー船が二十七艘點在して居た。私は再び高調したい、この壯觀は海國日本の躍進の勇姿を物語るものでなくて何であらうと。本船がわざ〳〵この漁場に引返したのは、アラフラ海に活躍するダイバー諸君が吾々の來航を聞知してからといふものは、吾々と交驩することの出來る日の到來を待望して居るとの報に接したからであり、又吾々は現地で漁撈に從事して居るダイバー諸君の活躍振を目擊すると共に、體驗談を聽取する心算であつたからである。

吾々は本船に來訪されたダイバー船長や船員たちと和やかに交驩した後、本船は愈〻ダーウインから七百四十浬西南方の西濠ブルームに向け轉針した。

この海洋に見る夕陽は淡紅色で、內地や南洋で見るそれよりもズツト大きい。四圍には大空と

青海原より外に網膜に映ずるものは何物も存在して居ない。

十月二十日正午のことである。單調そのものゝ様な生活に動もすれば倦怠を覺えんとする吾々を慰撫しようといふ海神の飛んだ思ひやりか、ダーウイン出港以來、初めての難航だ。激浪は物凄い勢で舷側にぶつつかる。後甲板デッキチェアーによつて讀書して居ると、突然椅子諸共に横辷りに舷側に強く叩きつけられたのでビツクリし、君子危きに近づかずと、早々サルーンに逃げ込んだ。パラオ出帆以來の猛烈なピツチングである。お蔭で無聊を喞つ暇もなかつた。

午後四時、本船は荒波に翻弄され乍らもルーバック灣内に入つて居た。漸くピツチングも止んだのでサルーンから這ひ上つて甲板に出て見ると、左舷の三町程先きには赭土の低地が際なく延長して居り、波打際には峨々たる眞黑な岩礁が此處彼處に見え、燈臺も海拔二、三十呎のところにあつた。右舷の約一浬半の彼方には、蜿蜒長蛇の様な木造の、恰も櫓と見紛ふ棧橋があり、双眼鏡から見ると汽船が繫留してあつた。その長い棧橋の左側より稍ゝ離れたところに、眞赤な斷崖が屹立して居た。これが西濠ブルームの外貌なのだ。

本船よりブルーム港務部長に宛て二十一日午前十時入港豫定の旨無電して置いたので、前記の位置で假泊することゝした。錨地の水深は八米だつた。

翌二十一日の早朝例の棧橋の方を見ると、繫留してあつた汽船の姿は其處になかつた。昨夜深

更に出港したのであらう。棧橋の下には全然海水がなく、砂地が露出してゐるところを見ると、例の汽船は昨夜半の滿潮時を利用して出港したことが首肯された。

やがて本船は定刻には棧橋眞近まで接近して居つたが、潮汐の關係でそれ以上進航することは不可能だつた。待つこと暫し。然し港務部の汽艇らしいものは全然見えなかつたが、双眼鏡を通して見ると、日本人らしい人達が漕ぐボートが棧橋近くに見えたので、本船よりモーター・ボートを派出して見ると、果せる哉、日本人たちであつて、棧橋に向つて右側（東側）に繫船せよとの港務官の傳言を齎したのだつた。滿潮時に於ける潮流が强烈なために、繫船作業は極めて至難だつた。繫船眞近に三名の官憲が、本船差廻しのモーター・ボートで乘船された。

官憲の取締

乘船された三名の官憲は、税關長ホスケン氏と檢疫官クラーク氏並びに醫官バイロン氏であつた。私はホ税關長に向つて「本船の來航に就き日本外務省より通知があつたか」と尋ねた。すると「ズツト前に、濠洲政府より貴船入港の通知と共に指令を受けて居るので官船としての便宜を供與する。吾々としてはシドニーの日本總領事よりの通知に接するよりも、本國政府から沙汰のあるのが順序だと思ふ。日本の總領事は貴國の外務省からの通知に接したので直接キャムベラの

我が政府に便宜供與方を願出でられたものと思ふ」と答へられた。

で、本船は燈臺料（如何なる入港船舶も、假令濠洲船舶でも三ケ月に一回、一噸につき九片（一ペニーは邦貨約六錢に當る）を徴收される。繫船料（一日につき三十志）關稅（碇泊中消費した る重油、綱類、食糧、酒類及びガソリンに對する稅金）が免除される譯だ。

次に「本船からの入港通知は受信されたか」と言ふとホ氏は「確に受取つたが、遺憾乍ら當官憲には汽艇もボートもないから出向く事は不可能だ。貴船として繫船前に吾々の乘船を希望さるるものならば、ボートを迎へに差立てて欲しかつた。その迎へのボートも來ないし、貴船は中々棧橋に向つて進航されないし、全然措置に困つたのである。當官憲に汽艇のないのは其の必要を認むるだけの用務がないからである」と答へられた。

恁う率直に言はれて見ると二の句が出ない。必要の書類を提出し、一同の檢疫も簡單に濟んだのは正に正午。棧橋に本船を出迎へてくれた在留日本人二十餘名は檢疫の終了と共に乘船された。

斯くて本船のサルーンは日本人で滿員、立錐の餘地がなかつた。其の中にブルーム駐在の日本帝國名譽領事アーサー・メール氏の令息（四十五、六歳位）を甲板でホ稅關長が私に紹介してくれたので、私が甲板から誘つて來た長身碧眼の港務部長バードウェル氏といふ二名の外人が混つて居た。バ港務部長は愛蘭人で一九一一年に來濠、二、三年にして歐洲大戰が勃發したので、陸

軍大尉として從軍され、戰後一九三三年から現職に就任、今日に至つたもので、貝殼の蒐集家として著名な存在である。業務の傍、貝殼類を研究し、且つ世界各國よりの註文を充たして相當の商賣をして居られることを本人から聞いた。又バ氏は私に向つて「昨夜、貴船が投錨した個所の少し手前には暗礁があるので坐礁しなければいゝと心配して居た」といつて、吾々を愕然たらしめたのである。それから外國を訪れた旅客が異國情緒に魅了されて、上陸早々ウツカリ要塞地帶とは氣づかず撮影した爲に、思ひがけぬ警察官や憲兵等の探知する所となり、取返しのつかぬ不愉快な印象を受けた事例をよく聞いて居るから、私の主義として、上陸第一歩に或はその前に、撮影禁止地帶の有無を官憲に尋ねることゝして居るので、此時も「當地に撮影禁止地帶はないか」と尋ねたところ、港務部長は「無い。御自由に撮り給へ」といふ明朗な回答だつたので嬉しかつた。そして前記四名のお役人は何れも丸い感じのする人達だつた。ブルーム入港の第一印象は頗るよかつた。

西濠洲（ウエスターン・オーストラリア）の概觀

ブルームに就いて詳述するに先立ち、ブルームが位置する西濠洲に關して略記して見よう。西濠洲（ウエスターン・オーストラリア）とは東經百二十九度の以西全部の大陸を稱し、最西部は

東經百十二度五十六分、南緯十三度三十分より同三十五度八分に及んで居る。而して東西千哩、南北千五百哩で、その全面積は九七五、九二〇平方哩である。

全人口は一九三五年六月三十日現在で、四四五、六九二、内、男二三六、五七八で女二〇九、一一四である。但し、これは純粹の黑人（アブオリヂナルス）は全然加算されて居ない數字である。一九三四年度の出生數は七、八〇一、死亡數四、〇七六で自然增加數は三、七二五であつて一九三〇年より一九三三年までの自然增加數は一八、六二八であると公表されて居る。

宗教は一九三三年度の調査に依ると英國教會派が一八六、四五七、羅馬加特力派が七四、三五四、メソヂスト派が四四、五二一で、プレスビテリアン派が三二、六九四である。

地形――西濠洲の奥地數百哩に亙る廣範圍は丘陵多く連峰さへあるが、北西部はブルース山（四、〇二四呎）と南西部のスメーリング山脈中のブラツフ・ノール山（三、六四〇呎）が最高である。

西部及び北部の沿岸地方は波狀を呈し、人跡稀なる濠洲の中央部まで丘坂を形成して居る。西部のダーリング及びハマースレー兩山脈は印度洋に面する海岸まで下り坂を成して居る。この印度洋に注ぐ多數の河流の中、主なるものを擧げればスワン、マーチソン、ガスコイン、アシバートン、フォーテスキュ及びデ・グレー等である。北部地方にはフイツローイ河がキング・レオポ

ルト山脈から印度洋に、トレスデール及びオード兩河がチモール海へ夫々注いで居る。遙か奥地の大部分は海拔千乃至二千呎の高度を有する大高原と言つて可なりである。その表面の或る部分は幅廣の粘土質の土壤が伸びて居る砂丘から形成して居る。

政廳の所在地パースに於ける降雨量の總計は一九三四年に四〇吋四一で、既往五十九年間の平均量は三四吋九二であつた。而して全面積の三分の二は牧畜に好適の地である。

抑〻西濠地方には一八二九年に最初英國人が移住し、一八七〇年に部分的の選擧制が布かれ、一八九〇年に、責任ある政府が創設された。行政は州長官立法院及び議會に委ねられて居る。而して現憲法は一八九九年の修正令に基づいて發布され、更に一九一一年の修正令に依つて修正された。執行權は英國皇帝の勅任する州長官と之を補佐する責任ある閣僚とに與へられて居る。現時の州長官の席は空いたまゝになつて居る。

ローバツク灣に就いて

ブルームの位置するローバツク灣へはガンソーメ・ポイントとケープ・ヴイラレットの間から入港するのであるが、高潮に於てはこの灣は廣い水面としか見えないが、低潮時に於ては、ガンソーメとイントランスといふ二つの岬から約一浬足らずのところまで航路の全體が露出する砂堤

や、バールといふ幾つかの淺瀬の爲に遮斷される。この淺瀬と前記二つの岬の中間にローバック水道が灣内まで續いて居るので、この灣は西濠沿岸有數の良港で、どんな船舶でも自由に入港することが出來る。滿干の差が甚だしいのと、海底の關係上、船舶はブルームと並行するダムビア入江に碇泊する。

前記ガンソーメ岬は海拔七十呎で非常に顯著だと書いてあるところを見るとその附近が一帶に低地であることが察知される。それからイントランス岬の高さは七十八呎である。次にケープ・ヴイラレツトはローバック灣の最南端にあつて高さ百五十呎である。さてブルームに就いて詳述することゝする。

ブルームの棧橋

ブルームを訪れて何が一番深い印象を與へたかと聞かれたなら、私は一瞬時も躊躇することなく、棧橋であつたと答へる。それ程に、この棧橋は偉大である。長さに於て且又形に於て。

この棧橋はブルームの東南端にあるマングローヴ岬から約二千七百呎も南に向つて延びて居る木造の長蛇だ。そしてその兩側は長さ三百四十呎だけ繫船に使用することが出來る。低潮時に於ける高さは優に三十呎はある。何しろ瑞鳳丸の最高のマストが僅かに四呎か五呎位棧橋上に出る

位である。次に形であるが、底廣の何となくガツチリした感じのする構造である。突端に鐵枠製の信號機があり、晝間は旗、夜間は電燈で棧橋の傍の水深や氣象を報知して居る。暴風の警告には青地の旗を揭揚して居る。猶且この棧橋の兩側には突端から五十呎を除き、陸地まで欄干があり、その表面には鐵路が敷いてある。客船の入港した時だけ汽車を運轉して居る。鐵路といつてもブルームを一周して居るもので延長僅かに二哩位でしかない。そしてこの棧橋には一噸の起重機が二つあるし、その突端から向つて左側に、ダーウインの棧橋に設けられてあつたと同樣な牛馬を船から揚卸しするための柵の通路が設備してあつた。

ブルーム港の潮汐の差は滿潮時に於て二十八呎といふから前記ダーウインのそれを凌駕して居る。

吾々は既にダーウインに於てこの干潮について修行濟みだから、本船々員たちも繫留について は心得たものだ。誠に笑止千萬な話だが、本船を棧橋に繫留して置き乍ら、オイ、ソレと棧橋を踏むことが出來ないのである。本船にとつて棧橋が餘りに高過ぎるのか、本船が餘りに小さ過ぎるのか知らないが、實に厄介な限だ。海水のある内はわざ〳〵モーター・ボートで棧橋の側に附いて居る階段のところまで運んで貰ふことも出來るが、潮が干いて仕舞ふと本船の底は海底の砂地に落付くから、裸足で前記の階段の處まで濡れて居る砂地を歩いて行くのだが、洋服姿に、裸

足になつて靴と靴下をブラ下げた恰好は、あまり人樣から見て頂きたくない色氣抜きの姿である。

こんな具合だから、一旦、街へ出掛けたら最後、滿潮になる頃まで、無駄な時間を過さなければならない。それに今言つた樣に二千七百呎もある、減法長い棧橋をテクるのだから、やり切れたものぢやない。船から陸地へと飛び降りられる横濱の棧橋などを見て居た吾々は、よくもかう不自由な目に遭つたものだと、つく〳〵溜息を洩さない譯には行かなかつた。吾々が當地に碇泊中、一夜外國客船が入港したが、直接棧橋に横付けにすることが出來ず、その船から棧橋の階段の處までモーター・ボートが照明の不行屆きな眞暗な海を往復して居たのを見たとき、そのボートが小さいだけにパラオの方がどれ程便利だか知れないと思つて居た。一體ブルームとはどんな處かといふと、前記ダーウイン以上に私の期待は裏切られた。例の長い棧橋を渡り終つて愈〻陸地に達すると右手にさゝやかな墓地があり、墓碑が不規則に建つてゐるし、前方には鋪裝もしない爲に赭土の砂塵が舞ひ上る、可成り幅廣の道路が續いて居るだけで、住家は疎に點在して居り、左手には木造の家がタツタ一軒あるばかり。太陽の奔放な直射を受け乍ら、日本人會が差廻してくれた自動車に乘つて日本人會館に向つた。途中特記すべきものが何もないと言つたら、意外かも知れぬが、大通りの兩側には宏壯な高級官吏の公舍や公會堂、郵便局、裁判所、刑務所が疎らにあるが、何れも平家建の木造建築ばかり。やがて日本人會館に到着すると、今朝、本船ま

で吾々を出迎へてくれた會員たち十數名が門前に列んで歡迎してくれた。途中一臺の自動車にも會はなかつたことは、これ亦想像されぬであらう。聞くところによれば最近完成したターを塗つた鋪裝道路は棧橋の右手にある鐵路に沿うて街の方面に約二哩も延長して居るとのことである。

ブルームの邦人墓地

會館に着いた吾々は、二名の會員の案内で、早速、自動車で日本人墓地に詣でることゝした。兼ねてブルームの日本人墓地には約千人の日本人ダイバー達が永眠して居るとは聞いて居たが、それ程でもあるまいと思つて居たところ、實際にその墓地に來て見ると、初めて成程と頷くことが出來た。この墓地は郊外約一里近い、閑寂なところにあるのは選定宜しきを得たといふべく、面積、二英加（註、一英加は我が四段二十四歩に當る）の廣い場所が、葉一つ落ちて居ない程に清掃してあるのを見て、會員たちの心盡しの程が察知されて嬉しかつた。其處に約七百餘の墓碑が整然と列んで居る。墓碑は何れも純日本式で碑面に刻まれた漢字も內地で見るそれと少しも異ならない。この日本人の墓碑に讀む戒名と、之れに詣でる人々とが作る敬虔な雰圍氣の中に立つて見ると、自分が幾千哩隔れた濠洲の一角に居る樣な氣持は少しもしなかつた。展墓する時、私の魂は鄕里にある祖先の墓前に飛んで其處に額づいてゐた。

この墓地には昭和十年三月廿七日、漁撈中突然の颱風に遭難してラセペーデ海峽に向つて避難の途中、可惜、不歸の客となつた百六十名のダイバーたちの中六十名の日本人も埋葬されてをると聞いた。

一旦、會館に引返した吾々は、街の見物に出かけた。街といつても、言はゞ、バラック建の粗末な家ばかりで何處を見ても鐵筋コンクリートの建築物などは皆無だつた。

當地唯一の娯樂機關は公會堂が外人たちの倶樂部に當てられて居り、他にバラック建の活動小屋がある。この活動館は一週一回だけ公開されるが、汽船が入港中は、臨時に公開するのださうである。私が在米中往訪したところは主として都會だつたからでもあらうが、外國にもこんなお粗末なところがあるかしらと疑はざるを得なかつた、と言つたら大體、讀者たちにも想像がつくことゝ愚考する。

官憲訪問

吾々は上陸早々、第一に稅關長ホスケン氏を訪れて、來港に際しての御厚意を謝する共に、來訪の挨拶をした。するとホ氏は「ブルームで濠洲を判斷して貰つては困る」とダーウインで吾々が聞いたと同じことを言ふ。官憲たちはこんなところを訪れるのは丸で臺所から入つて貰ふ樣だ

と言ふ意味で、何となく肩身が細い感じがするらしかつた。後に、このことを在留同胞に話したところ、「何しろ、瑞鳳丸はブルームを訪れた最初の日本船です。官憲が、そんな態度に出たと聞いただけで、吾々在留日本人は肩身が廣い」と、在濠三十餘年になるといふ老人が言つて隨喜して居た。

次に吾々はバ港務部長を訪問した。港務部は極めて貧弱な狹い一室だつた。事務所の棚の上に羅列してある貝殼を見て居ると「これらはガラクタばかりだ。自宅には相當の蒐集がある」と言つて居られた。聞くところによると部長の尊父がその方面の權威者であつて、臨終に二人の息子に唯一の財產である貝殼を遺されたさうだ。

同行者の一人が、この方面の海圖が欲しいといふと、一枚しかない壁面に備付の海圖を快く取外して與へられ、そして「私は別にフリーマントルの港務部から取寄せておくから差支へない」と言つて居られた。港務部長との會話を問答體で書くことゝする。

問「貴港への一ケ月間の入港船は幾艘位か」

答「十六年前には汽船が平均十二艘だつたが、現在では半減した。しかし小型船舶は十五、六艘は入港して居る。一九二一年には月に平均汽船が七艘と帆船が十九艘寄港したことがある」

問「入港船中の最大噸數のものは」

答「五、六年前に濠洲の驅逐艦キャムベラ號（一萬噸）が寄港した」

問「この附近の航海は危險か」

答「その驅逐艦キャンベラ號が夕刻出港する時、私とグレゴリー氏（目下ダーウインに居られるが、當時、ブルームに居住されて居つた）が、暗礁が危險だから翌朝まで出港を見合せる樣に と頻りに忠告したが、强情な艦長は干潮時に出港されたので、暫くすると案の定、暗礁に乘上げて船底に大損傷を負つたことがあつた」

成程この附近の海圖を見ても判る樣に「調査不充分につき充分注意されたし」と書いてあるのを見ても、危險性が多分にあることが窺知されよう。

第三に、漁業監督官フアグソン氏を事務所に訪れた。フ氏は曾て眞珠採取業を經營して居つたことがあり、其の方面の造詣が深い、斯界は一九一七年が最高潮であつて、眞珠貝一噸の相場が二千七百磅を越えて居つたこともあるといふ事實を、同氏について確證することが出來た。

それから吾々は、裁判所の別館にブルーム駐在の長官（原名、マヂストレートと謂ひ、行政、司法を行ふ、言はゞ奉行の職である）レーノルズ氏を訪問して、敬意を表した。猶、同氏が地方記錄官として出生、死亡、結婚の登記をも司つて居ることは、建物の入口のところに掲げられた眞鍮の看板が說明して居る。

裁判所といつても、その內外に人つ子一人見えないのは實に案外だつた。治安の維持宜しきを得て居るからであらう。

愈〻、長官室とは到底考へられぬ六疊敷位のバラック建そのものゝ樣に、全然裝飾のない机と椅子としかない一室に案內されると、五十四、五歲の、痩形な氣品の高い男が、執務して居つたが立上つて步み寄り、吾々と握手された。これがレーノルズ長官その人だつた。

一通りの挨拶が濟んでから後の問答を、左に掲げて見よう。

問「西濠は濠洲聯邦から獨立することを望んで居ると聞いたことがあるが、それは事實か。」

答「事實だ。しかし全民が獨立を希望して居るといふのでなく、中には之に反對して居るものもある」

問「何故獨立するのか」

答「抑〻濠洲聯邦確立の際の條件として各州は對等の對遇を受けるといふ約束で、聯邦の確立に贊成したのだが、同政府の行政手段たるや、其の約束を履行しなかつたため、斯くては西濠の產業を存分に開發すること不可能なので、聯邦政府の施政方針に對し憤懣を抱くやうになり、遂に當州の福祉のために獨立の決意を固めるに至つたのである。先年この問題を議會に提出したが却下されたので、西濠は四名の委員會を組織し、內二名の委員を當州に、他の二名を英本

國に派遣して、英國政府に陳情せしめた。しかし英國議會にて討議の結果、西濠には不利に決議された。斯くて英國に使した二名の委員は、歸還の上、事態の經過を縷々開陳した。斯くて西濠では人民投票によつて問題の解決に向つて努力した結果を、聯邦政府に具申したけれども、濠洲の首相は之を否認したのである。さり乍ら西濠では執拗に之れが可決を念願として、毎年人民投票によつて、濠洲政府に動議を續けて居る。勿論、明年（註、昭和十二年のこと）も早々、同樣の手段を執ることゝなつて居る。

長官が司法權を握つて居るので犯罪に就いて尋ねたところ、私の考へて居た通りの回答に接した。

問「當地方には犯罪はなきや」

答「西濠の住民は內外人を問はず、非常によく法規を嚴守して居るから、犯罪件數は極めて少い。遺憾に思ふ點は人民が自己の權利を自認して居なさすぎることだ。言はゞ內氣とでも言ふのであらう。曾て私の取扱つた事件に恁ういふのがあつた。

ダイバー船乘組の若いマレー人のダイバーが、彼より老練なダイバーに比べて、未熟なためにあまり潛らないのを憤つた船長は叱りつけた。それも其の筈、このマレー人のダイバーは身體に痙攣を覺えるので如何とも働けないのだつた。船長は怠慢だといつて立腹した擧句、遂に訴訟沙汰になつた。若いマレー人は上陸して醫師に診斷して貰つたが、其時彼の身體に異狀はなかつた

ので、この訴訟は彼の敗訴になつた。若し、この若いダイバーが、船中に於ける作業中の實狀を目擊者を通じて立證することが出來たならば、彼に不利の判決を下されることはなかつたことゝ思ふ。事實、彼は潛水病に罹つて居つたのだつたからである。自分の權利を餘りに無視し過ぎて居ると思ふ。」

問「殺人などの事件はないか」

答「殺人事件は黑人同志の間でよくあるが、白人間には、先づ皆無といつて可なりだ。何しろ黑人はよく喧嘩の相手を棍棒で毆り殺す風習があるので、時々グロな事件を惹起して居る」

我が名譽領事

それから吾々は當地駐在の我が名譽領事アーサー・メール氏の令息を事務所に訪れて、今朝本船の入港した砌、出迎へられたことを謝すると共に、敬意を表した。同氏の招きに應じて、すぐ附近の私宅に導かれ、應接室へ通されると、其處には同氏の令妹が早速茶菓の支度にとりかゝられた。吾々は久し振で家庭が持つ情味と潤ひに接することが出來た。令妹は可成りの年輩だが端麗な感じのする純英國婦人タイプの貴婦人だつた。私がメ氏と話し合つて居るとき、いともつゝましやかに、お茶をついだり、菓子を勸めたりして居られた。御尊父は生憎旅行中で御不在だと

聞いて失望した。

しかし令妹の話によれば、氏は昨年（註、昭和十年の事）十二月から今年（註、昭和十一年に當る）の春にかけて渡日された折、短期間に長足の進歩發展を遂げた日本の姿をよく見て驚かれたこと、入京早々大雪のために東海道線が一時不通になつたこと、プルームとは違つて寒冷なのには閉口したことなど、女らしく優しい語調で語られた。又メール氏はストリート・エンド・メールといふ會社を經營する傍ら、牧羊事業にも關係して居るので、話は牧羊界に轉じて行つた。そして同氏は「東南のジェラルトンから南へ沿岸傳ひにアルバニー、それからオークリーに至る地方は定期的に降雨があるが、其他の地方は旱魃である。當地はこゝ九ケ月間も降雨に恵まれないが、或地方によると、二年半も旱魃が續いて居る個所がある。乾燥のため牧草は枯死するので羊の死ぬものが多い。それまでは五英加（我が四段二十四歩に當る）に一頭位迄に減少したが、今では十五英加から二十英加に一頭の割合に激減し、中には二年半も、降雨に恵まれない地方では、八、五〇〇頭の羊が四、〇〇〇頭に激減したが、昨今では全滅したところもある位だ。カナーバン方面では、四萬頭だつたものが、一萬八千頭に激減したといふ悲慘な狀態だ。こんな關係で牧羊界にとつては恐慌時代だが、降雨でもあつて牧草でも繁茂することになれば、破産狀態に陷つたものでも、忽ちにして盛り返すだけの可能性は多分にあるから、この事業は丸で賭博と少しも

異ならないので、不況に逢着しても、左程失望はして居ない」とすつかり商賣話を聞かされた。それから「私の經營して居る牧場では一萬五、六千頭の羊を飼養して居るが、自動車で半日もかかれば往復出來るから、一つ、濠洲の主要産業を見學に出かけませうか」としきりに勸められたが、航海の豫定もあるので、遺憾乍らお斷りした。

次に同氏の父君が我が名譽領事をして居られる關係上、本船の來航につき何か外務省から通知でもあつたことゝ思つて居たが、一向に其の話は耳にしないので、念のため其の旨に就いて尋ねて見た。すると「實を言ふと」と案外だといふ態度で冒頭してから「一向、シドニーの總領事館から何等の通知をも受けて居ない」といふ意外千萬な回答だつた。濠洲政府としては本國の官憲があるから、それでいゝとして、日本帝國の名譽領事のところへ何分の沙汰があつて然る可きだと愚考した。メール氏にしたところで、在留邦人の手前花を持たしてやれば、どんなにか喜んだことか知れないし、他方同氏の心證をよくしておくことは在留邦人にとつて有利なことではなからうかと思つた。歸途、前記事務所の入口には矩形の看板が數枚かけてあつたが、其中に日本帝國領事館（註、名譽領事館ではなかつた）といふ古色蒼然たる看板があつた。私はメール氏の存在がこの古ぼけた看板同樣、忘れられて居るのではなからうかと心配でならなかつた。

ホテルの酒場

其の夜吾々三人は日本人會館から鋪裝道路を歩いて歸船の途中、渴を癒すために、當地第一のホテル・コンチネンタルの酒場へ立寄つた。ホテルと言つても木造の平屋建である。酒場のカウンターに倚り懸つて生ビールを註文した。其時同じカウンターに靠れてウキスキーを飲んで居た六十歳以上の、白い髭を蓄へて居る無雜作な服裝の男が、いきなり吾々に向つて「有好のために乾杯しよう」とほろ醉機嫌で言ふので、大變嬉しかつた。私はその意味を他の二人のものに通じてから、吾々三人とこの老人とはお互に乾杯し合つた。吾々一行の一人が向ふの席に行かうと言ふと、他の一人は酒場はカウンターに倚つて飲む方が酒の味がいゝといつたので、私もこのカウンターの下にあるピカ〳〵する眞鍮の棒へ片足を載せ、片肘をカウンターについて飲む處に何とも言へぬ味があるのだと調子を合せたので、一同、そのまゝ咽喉を鳴らして飲んだ。さて愈〻勘定を支拂はうとすると、バーテンダー(註、俗にバーテンといふ)は「貴君方の分は頂戴しました」といふ。「未だ拂つて居ない」といふと「この方から頂いたんです」と例の老人の方に顎をしやくつた。さう言はれて見るとこの老人が金を拂つたらしかつた。再會の機もないので、私はバーテンに向つて「ではこの方のお好きな酒を差上げてくれ」といつて返盃に代へた。老人は嬉しさう

に、「有難う」といつて受けてくれた。

吾々がかうして飲んで居るとき、酒場に映畫館のビラがぶら下つて居た。見ると、私が横濱に居た頃に觀て面白いと思つた、ゲーリークーパーが主役としてサー・ガイ・スタンディングやフランショット・トーンが助演して居た「ベンガルの槍騎兵」なのだ。私は早速、バーテンに向つて「この映畫は私が、二年前に横濱で見たことがある、面白いぜ」と言ふと、バーテン氏は、氣まり惡さうに「何しろ、ブルームは片田舍ですから、新らしい映畫は中々見られません」と言つた。別に、日本は相當進歩して居るぜ、といふ意味で言つたのでもなかつたのにと思ふと、僻地に住むものゝ悲哀がそこに現はれて居た。

この酒場には他に、二、三人の男たちが片隅に丸テーブルを圍んで、靜かに飲んで居たが、吾吾がいゝ氣持になつて其處を立去るとき、微笑で會釋して居た。

對日感情

對日感情はどうかと言ふと今更過言するまでもなく、これまでに述べたことで當地人の對日感情は大體綜合されるが、或方面から聽取したことによると、官憲の在留日本人に對する態度は決して惡くはないが、それは表面だけの利害關係から來る感情の現れであつて、金儲けに無關係なも

のは一向に無關心だ。さりとて、問題などの起つたことは先づないとのことである。

人口

人口といつても我が國のやうに戸籍がある譯ではないから、的確な數字を見出すべき根據はない。しかし最近版の水路誌によると一九三三年度の白人數は七五四と記述されて居るが、某方面から聽取した情報によると、白人三五、日本人二六〇、其他比島人、馬來人、クーパン人、支那人混血兒が合せて七九〇だとのことであるが、これは何れも概數である。上記日本人中、契約移民といつて、一年毎に更新される契約に基づいてダイバー船乘組員として渡來した者が一〇五名。其內、ダイバーは六十名であつて爾餘のものは在留同胞である。この在留同胞の大部分のものは齡五十歲以上の老人たちで、その內日本人會々長堤三善氏(四十歲位)並びに二、三人の子供衆と日本人會の書記福田利夫君(廿五六歲)の二名だけが私の見た若い男達だつた。そして婦人達は堤夫人とその親戚の方が一人と、外に二、三人位にしか會はなかつた。

何故、老人たちが多いのかといふと、矢張り、ダーウインについて述べたやうに、今から約三十五年前に入國制限令が布かれた爲に、それまでに渡來した人達がこの樣に永住して居るからである。そしてこの在留同胞の職業は雜貨商や下宿業、床屋等が主なるものであつた。

在留同胞も一九一七年の歐洲大戰勃發當時、前にも述べた樣に眞珠採取の全盛期だつたので、當地に日本人が千數百人も在住してをつたことがあり、其時は住家がなく困つたこともあると聞いたが、以來斯界も一向に振はず、年と共に衰微の傾向が多分に認められるのは、實に歎かはしい次第である。

プルームの沿革

約四十年前から西濠のコサツクやオンスローに於ける採貝業が衰微するに連れ、當地が西濠沿岸中最も樞要な採貝船の根據地となり、十數年前までは在留邦人の外にダイバーたちの數が千名を越えたことがあるが、以來斯業の不振に禍されて、近年頽廢の氣甚だ顯著になつたやうだ。現在の總人口(採貝夫共)約二、五〇〇人、戸數二五〇である。採貝業を除いた產業としては牧畜があるけれども、牛の牧場であるから、之れも不振の折柄、當地の產業に關する限りに於ては、採貝業を最も重要なるものと見る可きである。

當地にはプルーム・クリークと謂ふ入江があつて、採貝船のやうな小船舶の碇泊やこれらの修繕に便利である。俗にキヤムプと謂ふ採取業たちの宿舍並に在留民の家屋はこの入江の北側の海岸に並行して居る。在留自由渡航者たちが經營して居る宿泊所があつて、ダイバー達は其の出身

地方別によつて適當な宿泊所に籍を置く慣例がある。ダイバー達は各〻の雇主によつてキャンプと稱する宿舍が與へられて居るが、ダイバーの樣に收入が潤澤であり、休業中には休養を必要とするものは前記の邦人宿泊所に起臥して居る。因に、前記自由渡航者とは一九〇二年二月四日に亞細亞人種に對する渡航が禁止された以前に渡航したもので、永住權が與へられ自由に出入國の出來るものを謂ふのである。濠洲にて生れたものは別として、他は前述の如く悉く年齢五十を越えぬものは殆ど無い狀態である。

座談會

吾々は日本人會々員諸君に賴んで一日座談會を催して頂いた。日時、十月二十二日午後二時。場所、日本人會館。左に其時の問答を書いて見ることゝする。而して場所柄、質問の重點を眞珠採取業に置いたこと、順序立つて居ないことを豫め御諒承して頂き度い。

問「當地の氣候は如何」

答「一年を二季に分けて居る、四月から九月までは日本の秋に當り、十月から翌年の三月までは夏だ」

問「潮汐と氣溫は如何」

答「毎月二十五日が最滿潮時で、風はモンスーン（英名）といふ西の風が九月から翌年の三月末にかけて、正午から夜中まで吹き、朝になると凪ぎ、東南の風は四月から八月末まで未明から正午まで吹くから、年中半日は微風に惠まれて居る。」

問「棧橋の材料は何といふ樹か、そして其の産地は何處か」

答「濠洲産のジャラーといふ樹で、アルバニーやメルボルン附近で産出する。」

問「當地に金融機關はあるか」

答「西濠銀行とユニオン銀行とがあり、何れも濠洲系だ。」

問「當地の教育機關は如何」

答「州立學校（小學程度）が一つあつて、六學級に分れて居り、白人、日本人、支那人の學童が全部で百名未滿で、教員は僅かに二名。十四、五歳になると西濠の首府パースへ遊學せしめて居る。外にコムヴエント・スクールがあり、島民や混血兒の教育に當つて居る」

問「眞珠船の所有者と其の船の數は如何」

答「一九三六年度に許可された所有者數は二十一名で、船の數はスクーナー型で補助機關の船が五艘で、機關附や手押ポンプの船が五十艘である。」

問「ダイバー、綱繰（テンダー）及び船員の就職狀態は如何」

答「經驗者は最初からダイバーになる。テンダーや船員の中から先づ見習ダイバーになつて、それから、ダイバーになるものもある。眞珠船には必ずしも船長の資格がなくとも、首席ダイバーが船長をつとめて居るものもある」

問「當地の契約移民は幾名位か」

答「全部で七九〇名、內日本人一〇五、混血兒四二〇、マレー人一三三、クーパン人九二、支那人二五、比島人一五であつて內、ダイバーは九十名、これを國籍別にすると、日本人六〇、マレー人一九、クーパン人六、支那人五である。」

問「當地でダイバー船を建造することが出來るか」

答「當地には造船所がないので、フリーマントルで造つて居るが、之を修繕するところはある」

問「契約書の有効期間は」

答「今年度からの契約書は一ケ年で、普通三月から十二月迄である」

問「濠洲側のダイバーの報酬は」

答「月給が三磅で、外に十噸迄採取したものには、一噸につき二十磅、十一噸、十五噸、十七噸を採取したものに、一噸につき二十五磅、三十五磅、四十八磅を夫々歩合として與へて居る。但しこの場合はダイバー二人による採取である。」

問「テンダーの報酬は」

答「月給八磅で、十噸迄の採取量に對し八磅五志、十噸以上になると、半噸につき五志增です」

問「機關士の報酬は」

答「月給七磅十志で、歩合は十噸迄の採取量の場合七磅十五志、十一噸に對し八磅、それ以上になると一噸增毎に十志を與へて居る」

問「日本の契約移民の經費の負擔はどうなつて居るか」

答「內地（大抵は神戸）からシンガポール迄の船賃は自辨で、シンガポールで待船中の宿料や食費及び土地から濠洲迄の船賃は船主が負擔する事となつて居る」

問「給料を前貸することはあるか」

答「それは時期による。例へば契約の更新期間際ならば、二重の手數を省くために前貸するし、小遣などは船主が立替へて居る」

問「ダイバー船の乘込人員には制限があるか」

答「同國人は五名を限度として居る。然し乍ら、六、七名は載せて居るが、官憲が大目に見て居るのであらう」

問「契約移民交代の何否と增船の可能性は如可」

答「契約移民は會社側にて呼ぶだけの可能性あらば交代させることも出來る。船を增加させる事も出來るけれども、現下の狀態では增船は不利である、何となれば漁獲がないからである」

問「一隻のダイバー船で何噸位の漁獲があれば引合ふか」

答「船主の經費の多寡によつて異なるから、一律には斷定出來ない。然し機關附の船と然らざるものとの平均漁獲高は、十二噸採取すれば（今日の相場で）引合ふ。（註、日本船では三十噸採れなければ引合はぬさうだ）

問「日本船の進出に對する當地の船主側の態度如何」

答「杞憂しては居るが、具體的對策がない。ダイバーたちが主として日本人だから、如何ともすることが出來ない。最近、日本船が激增して居るので、外國船乘組のダイバーたちが日本船に移動することを氣遣つて居る。現にストリーター・エンド・メール商會（前記名譽領事メール氏の關係して居る會社）の船がダーウインに六隻出漁して居るが、水深が深いので、作業が出來ずに居る有樣だ」

問「ダイバー船の收入は何程位か」

答「今年も一人當り平均五千圓位だ」

問「ダイバー船は漁場を見出すにはどうするか」

答「當地の船は首席ダイバーが船長をして居るから、天測の必要なく、前年度の體驗によつて有利な地域を知つて居る」

問「眞珠貝の壽命は何年位か」

答「約十三年。地方別によつて壽命も異なるといふ說もある。そして一潮に一枚づつ外皮が筍の皮の樣に殖えて行くさうだ」

問「漁獲物の運搬方法は如何」

答「ダイバーは十二週間分の食糧を持つて出漁するから、其食糧の盡きた時に歸港するので、漁獲物を運搬して居る」

問「飲用水の補給は如何にして居るか」

答「船主は棧橋の水道栓から水をとつてもよい。別に料金を支拂はなくともよいのは、稅金を納入して居るからだ。水を井戸からとる船もあるが、貯水して置くと混合物が沈澱するから飲用して一向に差支へない。一體、當地の水は鐵管を通過して居るから、害毒はない樣だ。ダイバー船はバード・クリーク附近でも飲用水を補給して居る」

問「ダイバー船の使用する燃料とその値段は如何」

答「今年から重油を使用して居り、ドラム管で供給されて居る。七二ガロン入りで一ガロン七片。

（我が四十錢位）西濠の首府バースでは一ガロン六片、ダーウインでは四片である」

序乍ら石油の値段は一箱（二罐入で、一罐各四ガロン入り）につき十三志六片であり、ガソリンは一ガロンの値段が二志七片だが、罐入や箱入で買ふと比較的格安だ。」

問「ダイバー船のエンジンはどんなものを使用して居るか」

答「英國製のハインク・エンジンやドイツ製のセミ・デイゼル・エンジンを使つて居る。何れもバースから取寄せて居る」

問「當地に海參は產出するや」

答「ダービーの附近に產出する。採取會社の代理店も設けられて居るが、日本人が採取に行かないのは眞珠貝採取の方が遙かに有利だからだ」

問「高瀨貝の產地ありや」

答「ブルー・リーフといふところに產出する。價格は噸當り八十磅で混血兒が採取して居る。而して採取船も船主も矢張り混血兒だ。」

問「ブルー・リーフとは何處か」

答「ケーブル・クリークの燈臺から十七浬西北の地點にあり、潮流が急激な爲に採取が困難なので、普通のダイバー船は出かけない」

問「ダイバー船乘組員の性問題の解決方法は如何」

答「上陸したときに混血兒の女たちを相手に解決して居るが、濠洲官憲は之を嫌つて居る。その理由は、花柳病が混血兒の女たちを媒介して傳染することを虞れて居るからだ」

問「最も多數のダイバー船が難破した主なる悲慘事は何時か」

答「明治四十一年四月廿六日と昨年（昭和十年のこと）三月二十七日の颱風に遭遇した時で、其時溺死者百六十人を出して居る」

問「眞珠貝の主なる產地は何處か」

答「海濱から平均三十浬以內だ、「八十浬濱」といふところがあるが（原名エイチー・マイル・ビーチ）その邊は遠淺で、一浬沖へ行く毎に水深は一尋づつ深くなつて行く。而してその「八十浬」の位置はキング岬から約百三十浬、ポートヘツド・ランドから約三百浬の地點である。面白いことには眞珠貝の產するところには、影の形に添ふ如く、必ずチヤイナ・フイシ（支那魚）が捕れる。このチヤイナ・フイシは長さ八寸位で鮎に酷似して居る。これは又都合のよいことにダイバーたちにとつて好個の食料となつて居る」

問「北濠一帶の近海には毒魚は居るか」

答「河豚以外には毒魚は居ないが、鮫が多い。十六尺乃至十八尺のものが棧橋の附近に居る。昨

日朝、貴船の乘組員が海中に入つて作業して居るのを見たので、危險千萬と思ひ御注意しようと思つて居たところだ」

問「當地に流行病といつたものはないか」

答「現在のところ、流行病といつたものがないのは、空氣が乾燥して居るから病菌が棲息出來ぬからだ。今より三十年前には、多數の脚氣患者が續出したことがあつたが、其時、當地の醫師たちはこれに對する療法を知らず、傳染病とし取扱ひ、隔離所に收容したものだ。醫師の知識なきため癒し得らるゝものを、みす〳〵多數の死亡者を出したことがある」

同日午後六時からブルーム日本人會館に於ける歡迎晩餐會に招待された。賓客は吾々三名に本船の高級船員を加へた九名で、主催者側の在留同胞諸賢は五十餘名で、ビール、サイダー、海苔卷に稻荷壽司とケーキに果物といふ御馳走。盛會裡に九時散會した。主催者側の來參者は堤會長と福田書記とを除いて全部五十路を越えた顏觸ばかりだつたが、壯者を凌ぐ程の矍鑠たる風貌に接することの出來たのは實に嬉しかつた。

用水と食料

年中、用水のことで惱まされ勝ちな環境に住んで居る故なのか、私が恁うして外國へ旅しても

第一番に氣になるのは水のことである。生物と水、これは不可分の關係があるから、所感の赴くがまゝに書かせて頂く。

私がブルームの官憲に對する劈頭第一の質問は飲用水が豐富かといふことだつた。するとパ港務部長は「棧橋の以東約二哩の地點に井戸があるが、この井戸が水源地で、水は地下五千呎も掘下げて湧出させて居るが、どうも鑛物を混入して居るので、濾過してから飲んで居る。主たる飲用水は天水を使用して居るが、天水が缺乏するとこの井戸水を飲んで居る」と答へられた。ところが前記メール氏の邸宅を訪れると、前庭にはゴム管の先から水が霧と散つて庭の芝生を濕して居るので、意外の感に打たれざるを得なかつた。旱魃續きなのに、かう水をふんだんに使つてもいゝのだらうかと、私は餘計な心配をしたものである。メール氏の邸宅附近は、地下七、八呎掘下げさへすれば容易に清水を得ることが出來るので、長期に亘る旱魃が打續いても、水に不足することがないとは誠に羨望の至りである。

次に食料であるが、肉類は豐富だが、野菜や果物類は非常に拂底して居る。これも旱魃によるのであらう。從つて値段も驚く程高い。例へば、林檎は一個日本金で約三十錢あまり、大きくもない腐りかけたバナナ一本が十錢位なのには啞然たらざるを得なかつた。これと反對に肉類の安いのには驚く。當地に牛肉が豐富な故であらう。目方一封度につき六片(我が三十五錢に當る)で、

四季を通じて値段の變更はなく、且販賣するときも大ざつぱなもので、碌に秤などにかけずに目分量で賣買して居る位だと言つただけで、如何に豐饒だかゞ察知されよう。

生活費

私の見たところ當地の生活程度も、大體、ダーウインと選むところなく、先づ中流以下だと思つた。

勞働者の生活費としては一週一磅あれば食つて行ける。ホテルでは宿代と食費とで一週二磅、食費だけでは一磅五志ださうだ。ところが勞銀はどれ位かといふとダーウインより約十志位落ちて、週給五磅十七志だし、自由勞働者の日給は十六志八片だから、日本人の勞働者たちに比ぶれば、雲泥の差である。そして、島民たちの給料は住込で一週五志位ださうである。

新聞は三、四年前にはあつたさうだが現在はなく、パース發行の「ウエスト・オーストラリアン」といふ新聞があつた。外にも南濠からの新聞を購讀して居る人達もあるであらうが、私たちの滯在中には全然見當らなかつた。新聞が廢刊になつたことも當地の衰頽したことを裏書して居るのではなからうか。前記「ウエスト・オーストラリアン」紙は普通大の新聞で十六ページのものであつた。

當地には州立病院があり、病床數は約三十臺で、二名の醫官が擔當してゐる。そして入院料は一日七志六片だから、內地のそれと大差ない。

警察陣

警察力としては警部一、巡査部長一、巡査二で、外に警部付の書記が一名、全部で六名だといつたら意外にも思はれようが、總人口千五百人に對する治安維持のためには相應して居ると愚考するし、この事實に徵しても如何に住民が遵法的であるかを察知する事も出來る。

交通機關

交通機關としては、シンガポール、西濠のフリーマントル及び其他の諸港との間に定期船が往復して居る。而して一九三二年より一九三三年に至る一年間に當港に入つた船舶數は一一三隻で總噸數二一六、九四〇噸だつたと記錄してある。

外に無線電信所があつて濠洲聯邦電信網と連絡して居る。玆に特筆すべきは濠洲全土に於ける

指定地との間は定期航空便によつて連絡して居る事だ。當地の飛行場はオート・バイで一周すると約四十五分はかゝる程の大きさだと云ふことを聞いた。

鐵道といつても、延長僅二哩位、それもブルームだけであるから、船客の手荷物を棧橋からホテルまで運搬する位のものに過ぎない。しかし一哩もある長い棧橋の上は自動車のドライヴが出來ないから、當地の鐵道は旅客とその手荷物を運搬する爲には缺く可からざる施設である。

斯樣な次第で、濠洲大陸を旅行するものにとつて、航空路が如何に大きな役割を演じて居るかが判る。そして當地には自動車が二十臺まではないとのことだつた。何れも實用本位の代物である事は喋々するまでもない。

黑人に就いて

港務部長バードウエル氏の談であるが、黑人の言語は多種多樣で百五十哩離れる毎に言葉が異なるさうだ。これは恰度、南洋群島に於ても、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルート等各島々の島民語が異つて居るのと同樣であると思つた。勿論、濠洲の黑人は土語の外に英語を使つて居り、英語が共通語となつて居るのも、南洋群島の各島民たちが日本語を共通語として居るのと趣を同じうして居るのも面白い對象だ。

次に黑人の取締りであるが、これはダーウインに就いての記述中に披陳しておいたのと大體同じであるが、當地に永住した人達の話によると、七年前までは居留地を指定して其の周圍に柵を作り、柵外に出る事を禁止したものだ。但し一定の仕事を有するものにはパスを發給して居り、警察が常時監視してをつたさうだ。然し現在の取締りはこれ程でもあるまいと思ふが、吾々が滯在中、僅三日間ではあつたが、ダウイーンとは異なり、一人の黑人にも出會はなかつた所を見ると、相當嚴重な取締りを受けて居るらしい。これに較べれば、南洋群島に於ける島民たちは慈愛に滿ちた施政に感激し、大いに發奮すべき筈なのだが、などゝ私は獨りで考へて居た。

將來性、前述した通りブルームには眞珠採取業――斷つて置くが、濠洲の斯業取締りに關する規則に依れば、眞珠採取業とは眞珠及び眞珠貝採取を含むと定義してある――が唯一の產業であるが、某方面から得た情報に依れば、ダムビア岬の沖合に鐵鑛を產する島が最近發見されたさうだ。その發見の動機はA氏(生憎御病氣で會へなかつた)が數年前船に乘つてをられた頃、バラスト(荷物が少いとき船に安定を與へるために船艙に積込む石や砂を謂ふ)に、その島の石を積込んだ、がその石塊に關心を抱き、內地で研究して貰つた所、果せる哉、その石塊が鐵鑛であることを識り、T商會支配人U氏の斡旋で某鑛業會社(特に記さず)を說伏せた結果、一九三四年十月、同會社の專務E氏がO通譯等一行五名の調査團を組織してシンガポール經由で當地に渡來、現地に

出張踏査された。斯くしてこの鐵鑛脈の所有權問題につき訴訟沙汰となつたが、發見者A氏の登記手續不備の爲に、折角の努力も空しく、これが權利を喪失した形となつて居る。この訴訟に際し當地の學校の教職にあつた濠洲人も日本人側の爲に東奔西走し、政廳の上司を動かすに努力したが、遺憾乍ら上述の次第で敗訴になつた。

然しこの鐵鑛の採掘事業に關して日本の財界の大立物A氏を說伏中であつたが、先年逝去されたため、無効に終つた。何れ本年（昭和十一年）末前記のE專務が再來されるとかの噂も新聞紙上に掲げられてをつたさうだ。他方、濠洲人の技師がパースより現地に赴き、調査研究の結果、現在ではこれが發掘の準備工作に餘念なく、日本系の某社が濠洲系の會社より其の發掘した鐵鑛を購入する豫定だといふ風說もあるさうだ。

何れにしても、この事業が有望視されるやうになれば現下鐵が相當重視されて居る折から、衰頽の途上にあるプルームも、一躍繁榮を謳歌する幸運に必ずや惠まれることであらう。

氣溫

本船がプルームに碇泊中の氣溫は最高三〇度、最低二五度五分であつた。矢張り正午から午後四時までが一番暑く、二八度乃至三〇度であつた。斷つて置くが、この氣溫は本船の船橋に取付

けられた寒暖計に示されたものである。

十月二十三日、午前十一時頃、プルーム港を初めて訪づれた日本船瑞鳳丸を見學せんものと在留同胞の妻子連が夫君に伴なはれて來船された。中には初對面の同縣人の船員に、この地特產の鸚鵡を寄贈するものあり、又某氏は岡島技手に、二十年間も我が子のやうに愛育した珍鳥を餞別の印にと贈呈された程に、本船の來港を心から迎へられたものである。

やがて午後二時、ホ稅關長が健康證を持參して來船。乘組員一同に對し一應の檢査を了されたのち、時餘に亘つて談笑。互の健康を祈り合つて杯を擧げてから來船者一同が退船されたので、本船が次なる寄港地チモール島クーパンに向つて始動したのは三時五十分（パラオ時刻）當地の四時二十分だつた。

それから五時頃であつた、銀翼を夕陽に輝やかして單葉の水上機がプルームの方向に飛翔した。これが濠洲で吾々の最初且つ最後に見た飛行機だつた。

濠洲に於ける、今回の巡航の最終寄港地プルームに就いては、大體記述しつくしたやうに考へるからこれで擱筆し、當地の正北、五百浬の彼方に位置する蘭領チモール島のクーパンに就いて披陳させて頂かうと思ふ。